新宿区平和都市宣言30周年記念誌



平和-未来に語り継ぐ 私たちのメッセージ

新宿区平和都市宣言30周年記念誌

新宿区平和都市宣言30周年記念誌 平和・未来に語り継ぐ

新宿区

新宿区

平和都市宣言30周年記念誌 マロなぐメッセージ

表紙のデザインについて

表紙の写真は、新宿区役所本庁舎正面玄関前に設置している「平和の灯」(p84 参照)です。 昭和63年7月の設置以来、世界の恒久平和の実現を目指す新宿区民の決意を表したも のとして灯がともし続けられています。"未来に語り継ぐ私たちのメッセージ"を象徴す るものとして、この記念誌の表紙に使用しました。

新宿区平和都市宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。

私たちは、世界で唯一の核被爆国民として、自らも戦火を受けた都市の住民として、戦争の惨禍を人々に訴えるとともに、永遠の平和を築き、この緑の地球を、次の世代に引き継ぐ責務がある。

国際平和年にあたり、私たちは、人類の生存に深刻な脅威をもたらす、すべての国の核兵器の廃絶を全世界に訴え、世界の恒久平和の実現を心から希求し、ここに新宿区が、平和都市であることを宣言する。

昭和61年3月15日 新宿区



新宿区平和都市宣言記念板

新宿区平和都市宣言 30周年記念誌の 発刊にあたって



すべての国の核兵器廃絶と世界の恒久平和を願って、昭和61年3月15日に、平和都市宣言を行い、30年の節目の年を迎えました。

平和都市宣言には、自らも戦火を受けた都市の住民として戦争の惨禍を人々に訴える とともに、永遠の平和を築き、次の世代に引き継いでいくことが、私たちの責務である と記されています。

先の大戦から70年が経過し、戦争を体験された方々からお話を聴かせていただく機会が減ってきました。戦争では、亡くなられたご本人、家族を失ったご遺族、戦禍に巻き込まれ人生への影響を受けた方々などの悲惨な経験が人類の歴史に刻まれました。私は、この記念誌編纂にあたって、第一に「戦争の記憶の未来への伝承」、第二に「平和を守ること」を考えるきっかけにしてもらいたいと思いました。

このような思いから、「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」には、一人でも多くの方から戦争体験をお寄せいただくよう区民の皆様に呼びかけ、当時の世相や出征・空襲・学童疎開・引揚げなど様々な体験を収めることができました。また、子どもから大人まで幅広い世代、中国、韓国、ネパール、ミャンマーなどの外国籍の方々、「平和のつどい」参加アーティストなど、多くの皆様から平和への思いを伝えるメッセージを寄せていただきました。そして、今なお、区内に残る戦争遺跡や戦火をくぐり抜けた学校資料など、太平洋戦争前後の新宿のまちの記憶も記しています。

20世紀を振り返ると、植民地の拡大や植民地社会からの脱却の過程で、収奪する側とされる側の相克から戦争へと発展しましたが、21世紀は、貧富や文化の違いから発生した差別が新たな戦争を生み出しています。新宿区は、多様な文化を持った方々が住み暮らすまちですが、身近なところから異文化に対する相互理解の輪を拡げ、平和の礎を築いていくべきだと思います。

戦争が悲劇を生むことがあっても、幸福を生み出すことは絶対にありません。この記念誌が平和について考えるきっかけとなり、平和への思いが世代や国籍を超えて共有されることを切に願ってやみません。

ここに、貴重な体験やメッセージを語り綴ってくださった方々をはじめ、この記念誌 発行にあたってご協力をいただきました、すべての皆様に、あらためて感謝を申し上げ ます。

平成28年3月15日

新宿区長 吉住 健一

目 次

新宿区平和都市宣言 新宿区平和都市宣言30周年記念誌の発刊にあたって 新宿区長 吉住	····· 2 達健一 3
名誉区民「平和への想い」を語る	
「戦争がおっかないとか悲しいとか、考えたこともない、予科練に憧れてた軍国少年。 実際に予科練に入った同級生はみんな亡くなって、行かなくて良かったと思いました。」 三遊・「平和の使者たち」 高階 秀爾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	・・・・9 ・・・・10 ・・・・11 ・・・・12 扇藏 ・13 ・・・・14 ・・・・15 ・で、・・・・16
戦争を語り継ぐモノ 1 「戦意高揚のためのビラ」・「紙芝居『焼夷弾』」 稲荷鬼王神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • • • 18
戦争を語り継ぐ 区民の方の戦争体験談・戦争体験記	
「多くの有能な若者が戦地へ」 坂部 健 / 「平和はすばらしい」 鈴木 光男 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· · · · · · 21 · · · · · 22 · · · · · 23 · · · · · 24 · · · · · 25 · · · · 26 · · · · 27 · · · · 28 · · · · 29 · · · · 30

「絶対に戦争はしてはいけない」 武内 幸二郎 33 「働くことが復興の原動力」 野村 長八 34 「ハングリー精神が、日本を変えた」 百渓 文枝 35 「病院の中の戦争」 吉田 ハナ / 「軍隊が動かしていた世の中」 字賀村 源三 36 「叫ほう『戦争はしない』」 近藤 滋子 / 「特攻隊(写真について)」 近藤 伸一 38 「来陽において戦友の死」 松下 武夫 / 「戦争で努力は報われない」 谷川 博司 39 「平和への課題」 辻 彌太郎 40 「輸送船に乗って」 西尾 合子 41 「私の戦争体験記」 牧田 有史 / 「戦争反対なんて当たり前のこと」 白根 光子 42 「愚かさが判らない困った人たち」 中島 悦子 43 「町内で集団疎開」 古庄 忠雄 / 「戦中・戦後 あれこれ(思い出すままに)」 堀尾 慶治 44 「面会」 真鍋 重命 45 「目に映る炎」 鳥海 はる子 46 「戦後70年平和への決意〜戦争をしない国になってほしい〜」 佐久間 國三郎 47 「山の手大空襲で九死に一生を得た体験記」 中村 進 / 「東京大空襲での出来事」 石井 稔 48 「当時の教育方針と戦後の想い」 矢島 明廣 49 「東京大空襲での出来事」 石井 稔 48 「当時の教育方針と戦後の想い」 矢島 明廣 51 「東京大空襲での出来事」 51 「第眞週報』・「防空繪とき」・「家庭防空すごろく」 稲荷鬼王神社 51
「寫眞週報」・「防空繪とき」・「家庭防空すごろく」 稲荷鬼王神社 ・・・・・・・・・・・・51
戦争を語り継ぐモノ 3
「入営記念写真」・「馬術教範」・「従軍手帳」 高坂 三枝子 / 「武運長久 日章旗」 高橋 敦夫 / 「筑土八幡町会の『養豚隣組』(絵はがき・昭和18年)」・「疎開の荷札」・「銃後の学童(東京市四谷区役所・昭和14年1月)」 檜山 紀雄 ・・・・・・・・・・・・・・・52
世代を超えて、国籍を超えて おさいませんでは、 おさいますが、 の正和よいた。 ご
■ 世代を超えて おくみやよしこ・かねこ・しょういち / はやしかよこ・みれい / ひのかおるちゃんのお母さん / おかのけいちゃんのお母さん / まつもとしゅんぺいくんのお母さん / 有坂 玲志 / 小林 絢 / 鈴木 康介・・・・54 髙木 綾 / 田村 蓮 / 飛田 直哉 / 渡邊 皐月 / 大橋 夏己 / 小田 美紗貴 / 鈴木 美紗希 /田中一龍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

C.Z (中国) / CTK (韓国) / S (韓国) / シュレスタ (ネパール)・・・・・・59 イー・イー・ミン (ミャンマー) / カーリー・バクストン (アメリカ) ・・・・・・・60

クリネービチ・エカテリーナ (ロシア) ・・・・・・・・・・・・・・・・・61

江副 ジョエル (フランス) / アダム・マジョー (イギリス) /



寄稿

戦争がおっかないとか悲しいとか、考えたこともない、 予科練に憧れてた軍国少年。実際に予科練に入った同級生は みんな亡くなって、行かなくて良かったと思いました。



最近、8月が近づいてくると「な んであんなバカな戦争をしたの か」というようなことを言ったり、 書いたりする人がいるけれども、 その最中はそんなこと思ってもい なかったね。まだ小学生だったし、 「みんな兵隊さんになって戦地に 行って戦う」という教育を受けて いたから、戦争がおっかないとか 悲しいとか、考えたこともなかっ た。飛行機好きのいわゆる軍国少 年で、予科練に入りたかったんで す。でも、同級生で予科練に行っ た人はみんな亡くなったから、戦 後になって行かなくて良かったと 思いましたけどね。



国民服を新調した父と、新しいオーバーを着て 記念写真を撮った。(昭和15年頃)

当時、よく覚えているのは昭和 12年に朝日新聞の「神風号」が英国 から日本へ帰って来た時のこと。

わくわくして、ラジオの実況中継 を聞いてました。そういう報道 ばっかりだから、それが普通だっ たんです。

昭和17年から本土決戦になって、初めての空襲で「ドーリットル爆撃隊」が飛んできた。「大きな飛行機だな」と思いながら間近で見てました。また、昭和19年頃だと思いますが、伊勢丹の前に撃墜されたB29の折れた羽を展示していて、勇んで見に行きましたね。ちょうどその頃から空襲が激しくなって、20年の正月明けに、実家が下町の森下から錦糸町へ引っ越したんです。

あの3月10日の大空襲の時は亀戸のほうへ逃げた。あっちこっち燃えて、人が右往左往してる。年寄りが「大火事になったら風上へ逃げろ」というのを思い出して、錦糸町まで戻って助かった。途中、大横川の「江東橋」で警防団に止められたけど「ここにいたら死んじゃうわ」って振り切ってね。あ

三遊亭 金馬氏

落語家 新宿七丁目在住 昭和16年に12歳で三代目三遊亭金馬 に入門し、金時の芸名でデビュー。昭和30年にバラエティの元祖 NHK の「お笑 い三人組」に出演し、人気を博す。昭和33年に真打に昇進し、昭和42年に四代目三遊亭金馬を襲名。昭和45年に文化庁芸術祭で優秀賞受賞、平成12年に勲四等瑞宝章を受章。ストーリーを楽しませる落語を演じ、人情話を得意とする。

のまま亀戸にいたら間違いなく死 んでましたね。

実は戦時中も寄席はずっとやってたんです。終戦後も1ヵ月くらいで再開して、あたしも二つ目に昇進して、今の丸井のところにあった帝都座に出てた。笑っていると腹が減ってることも忘れられたんですね。

よく日本人は「平和ぼけ」っていうけど、ホントに平和が何なのか分かってるのかな。昔はマスコミがあおりたてて戦争に突き進んだわけで、そこには目を光らしておきたいね。大体、日本人が戦争を放棄していても、外国に理解されるかどうか疑問だよ。これからも平和であって欲しいし、「みんなで平和にしよう」って言い続けることは大事だね。



慰安会に出られない傷病兵を病室で慰問している ところ。司会をしたり、腹話術をしたり、この頃 はよく働いた。(中央人形を持っているのが金馬 さん)

平和の使者たち



人間の生活を支える行動基準、 ものの考え方や価値観などは、時 代により、また国や民族によって さまざまです。夏目漱石は、『文 学論」のなかで、20世紀の初め、 ロンドンに留学した時に、「(前略) 雪見に人を誘ひて笑を招きし事あ り。月は憐れ深きものと説いて驚 ろかれた(後略)」こともあったと 述べています。日本人が季節の変 化に敏感で、四季折り折りの自然 の姿に深い感興を覚えるというこ とは、西洋の人々には容易に理解 しにくいことのようです。そう言 えば、ワシントンのポトマック湖 畔の桜花が満開の時に、その下で 花見の宴を催すといったような話 は、聞いたことがありません。月 見や花見のような行事は、日本人 の独特の美意識、価値観が生み出 したものと言えます。

もちろん西洋には西洋の、その 他の国にもそれぞれの国の美意識 や価値観、それに基づく行動様式 があります。そのような文化的背 景に対する理解がなければ、漱石 のロンドンでの体験が物語るよう に、外国の人の言動はしばしば笑 いや驚きを招き、奇異の念を抱か せ、更には誤解や摩擦を生み出す ことさえ稀ではありません。今日 のように世界が狭くなり、多様な 歴史や文化を背負った人々が互 いに交流、交渉し、時に無知や誤 解に基づく抗争まで発生している グローバル化の時代においては、 誤解や偏見による対立を解消し、 人々のあいだに平和な共存を保つ ためには、異文化に対する正当な 理解が欠かせません。

古くから伝えられてきた詩歌や、絵画、建築、工芸などの芸術作品、あるいは生活と結びついた芸能、祭礼、年中行事などは、どの民族、どの国においても、文化の伝統を具体的なかたちで示してく

高階 秀爾氏

美術評論・文化振興 中落合在住昭和 28 年東京大学教養学部教養学科を卒業後、同大学大学院在学中にフランス政府招聘給付費留学生として渡仏し、パリ大学附属美術研究所及びルーブル学院にて西洋美術史を専攻。帰国後、東京大学で助教授、教授を歴任。平成 4 年に国立西洋美術館長に就任した。現在は大原美術館長、文化審議会の初代会長をはじめとする数多くの公的委員に就任し、我が国の文化行政に尽力している。平成 17 年、文化功労者。平成 24 年には文化勲章を受章。平成27 年日本芸術院会員に任命される。

れる貴重な遺産であり、同時にまた、それらを生み出した人々の美意識、価値観、生き方を伝える平和の使者たちです。世界のさまざまな文化遺産を通じてこの使者たちの言葉に耳を傾け、人々の心の結びつきを確かめることこそ、今何よりも大事なことであると思われます。

 $oldsymbol{8}$

寄稿

寄稿

太平洋戦争終戦70年をむかえて



私は生まれも育ちも現在の地だが、昭和20年の初めに戦争激化で強制疎開。買ってあった奥秩父の家へ引っ越して、その年の4月に荒川小学校へ入学。一学期が終わった夏休みに終戦を迎える事となった。そのせいか戦争の恐ろしい体験がない。そして明くる年に神楽坂に戻り、津久戸小学校へ転校した。

そこから戦後の物資不足の耐乏生活が始まったのである。食料も衣料品も極端に少ない。学用品などは殆どない。おやつは芋か豆とか自家製のパン。バナナやチョコレート等の高級品は見た事もない。現在では想像もつかない。食料は殆ど配給で贅沢は言えない

が甘い物は食べたかった。然し生 活は結構楽しい小学生であった。 遊びも工夫して近所の子供達と、 外で活発に走り回り、遊びに不便 と不満を感じた事はない。戦争が 終結し、取り敢えず命の危険が無 くなったが、戦争が終われば即平 和な生活とはいかない。だが戦争 は終わり平和の喜びと幸せを感じ た。然し戦後の日本の立ち直りは 驚異的で、日本人の勤勉さと叡智 は世界を驚かした。それは戦争の 放棄によって、軍事費を平時経済 に回し、生活が豊かになったから であろう。然し快適さを際限なく 追求する為に、地球は厄介な事に なってきている。

人間は「足る」を知る事が肝要で



鶴賀 若狭掾氏

新内節浄瑠璃 神楽坂在住 幼少のころより新内節の太夫であった父 の鶴賀伊勢太夫から、新内浄瑠璃の手 ほどきを受ける。平成12年に鶴賀若狭 掾を襲名し11代目鶴賀流家元となる。 平成13年、重要無形文化財保持者(人 間国宝)の認定を受ける。平成21年旭 日小綬章を受章。海外公演を40数か国 で行い、平成21年度には文化庁文化交 流使を務める。

ある。

世界中が平和を希求しているが、現実は厳しく紛争は各地で起こり、多くの人々が苦しむ。

終戦後、日本はその点は平和で ある。

平和の反対は戦争ではない。戦争がなくても必ずしも平和とは言えない。不公平や社会的暴力を無くし、人間としての権利や尊厳を持てる状態でこそ平和だと思う。

悲惨な殺戮と勝手な論理の悪魔 の戦争。悲しい哉、戦争はこの世 から絶える事はない。

今や日本を取り巻く環境は日々 危険度を増す。如何に対処すべき か、今我々は冷静に考える時であ ろう。戦争もなく心の安寧、そし て安心と安全を保てる世の中、そ の上に末長い文化的平和国家の建 設を願う。子や孫が身も心も幸福 な平和社会に生きて行けるよう。

その為にも文化力を遺憾無く発 揮したい。



身はいかに

なるともいくさ とどめけり ただたふれゆく 民をおもいて 昭和天皇御製

本年は、太平洋戦争における終戦の詔勅を賜ってより70年の節目の年にあたります。我が国の今日の平和と繁栄が、終戦時における 先帝陛下(昭和天皇)の御聖断の賜物であると同時に、先の大戦でお亡くなりになった多くの御霊の上に築かれていることは申すまでもない事です。別けても、靖國神社をはじめ日本全国の護国神社に奉満されている英霊の殉難は、日本人として決して記憶の底に埋没させてはならないものであります。

靖國神社には246万6千余柱 の御祭神がお祀りされています が、そのおよそ9割が太平洋戦争 に殉ぜられた英霊です。その膨 大な数は、先の大戦が如何に苛 烈なものであったかを如実に物 語っています。

その英霊の方々を始め、先の 大戦で尊い命を失った先人たち は、恐らく、後の世の子孫達には 平和な世に生きて欲しい、自らが 苦しんだような想いは決して繰 り返してならないと願ったに違 いありません。またそれを信ず ればこそ、尊い命を奉げられたの でしょう。その崇高な献身に思 いを馳せる時、私達は心の底か ら感謝の念を奉げますと共に、先 らないと一人が強く心に誓 わねばなりません。

人は平和を求めて止まない。世



東音 宮田 哲男氏

長唄唄方 払方町在住

東京藝術大学音楽部邦楽科、研究科で 山田抄太郎教授に従事し、技芸の錬磨 と長唄の研究に取り組んだ。平成10年 に重要無形文化財(人間国宝)に認定 され、平成12年に紫綬褒章、平成15 年に日本芸術院賞など、数々の賞を受 賞し、平成27年日本芸術院会員に任命 される。また、長唄東音会の重要な一 員として、後継者の養成にも熱心に取り 組んでいる。

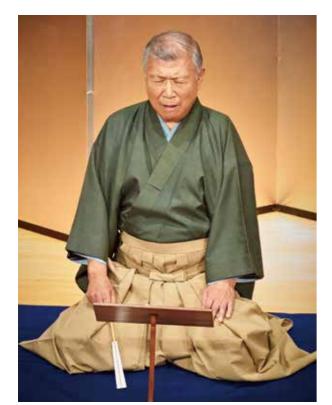
界民族が共通して持つ普遍的な想いにもかかわらず、人類は太古の昔から幾度も戦乱を繰り返してきました。この現代においても、多くの国や地域で戦争が起きている悲しい事実もあります。

平和は、ただそれを願い、唱えていれば自ずと天から降ってくるようなものではありません。その維持には外交や国防を始め、国の営みのあらゆる側面での英知の結集と不断の努力が求められます。 現在、我が国を取り巻く情勢は戦後の歩みの中でも最も複雑且つ厳しいものとなってきています。

戦後70年の節目、この70年の平 和が何故もたらされたのか今一度 真摯に見つめ直し、多くの先人た ちの想いを噛みしめながら、恒久 の平和を希求するとともに、二度 とあの惨禍を繰り返してはならな いとの決意の下、日本人皆が力を 尽くしていかなくてはならないで しょう。

長唄の世界でも優秀な人が戦争に行って環ってきませんでした。 名人といわれた人の芸を聴いてみたかったなと思います。 戦争をしてはいけませんね。

聞き取り



23区のひとつである新宿区が 「平和宣言」をする意味を考えて みました。区民一人ひとりが平穏 な心をもてば平和な区になります ね。平和というのは諍いがなく、 人の心が落ち着いているというこ とです。長唄や邦楽は人の心を和 ませることができます。四季のな かで育まれた仁・義・礼・智・信 という日本人の心や文化を伝えて いくことが我々の使命であり、意味 のある仕事です。良い舞台を提供 して、区民の皆さんの気持ちが平 穏になれば、新宿区を平和にする ことにつながるのではないでしょ うか。

戦争が始まったのは僕が5歳の ときです。子どもでしたがラジオ で聞いて「戦争が始まった」とはっ きり分かりました。戦時中も最初 の頃は、むしろに火をつけて水で 消して「空襲ごっこ」で遊んだりし

てました。

当時は、日本橋 の浪花町というと ころに住んでいた のです。町全体 が花柳界という環 境で、学校に行き ながら毎日、近所 のお師匠さんの家 へ長唄のお稽古に 通っていました。

そのうち本物の 空襲が来るように なり、そして昭和 20年3月10日のあ の東京大空襲が 来ました。低空飛 行でB29が飛んで きて、焼夷弾がバ ラバラ落ちてきた

のが見えたのです。いよいよ逃げ るというときに「これが見納め」と 思って見た玄関の光景が目に焼き 付いています。リヤカーに家財道 具を積んで、家の外に出ると右は 隅田川で左は日本橋です。左へ逃 げて、三井ビルの地下で、おにぎり の炊き出しを食べたのを覚えてい ます。右へ逃げた人はほとんど亡 くなりました。子どもなので悲壮 感はなく、不思議なことに怖いと か自分が死んじゃうという感覚は なかったですね。

焼け出された後、親戚を頼って 鎌倉へ疎開し、その年の8月15日 に鎌倉で終戦を迎えました。

僕は戦後、本格的に長唄を始め て、大学卒業後に歌舞伎長唄の初 舞台を踏みました。優秀な人が 戦争に行って還ってこなかったの で、僕らの上の世代は、ぽつぽつと しか残っていません。名人といわ



鳥羽屋 里長氏

歌舞伎音楽長唄唄方 矢来町在住 昭和 26 年に杵屋栄之助に入門し、昭和 49年に七世鳥羽屋里長を襲名。歌舞伎 音楽(鳴物)研修講師、歌舞伎音楽(長唄) 研修主任講師として後継者育成に努め た。平成14年に重要無形文化財保持者 (人間国宝) 認定、平成16年に旭日小 綬章を受章。一般社団法人長唄協会会 長、一般社団法人伝統歌舞伎保存会理 事を歴任し長唄振興に尽力している。

れた人の芸を聴いてみたかったな と思います。やはり戦争はいけない と重ねて申し上げたいですね。

伝統芸能には日本の心と感性が 凝縮されています。子どもたちも 長唄や邦楽を聴くことで、四季を 愛でて、互いを敬い合う、そんな 良い日本人になって欲しいと思い





1、学校 4 年生頃 鎌倉の鶴ヶ岡八 幡宮前で祖母と。

写直提供:(公財)新日鉄住金文化財団

踊る時は、日本文化の結晶である着物を身につけます。 着物は平和の象徴です。本来、日本人は争いを好まない民族だと いうことを次の世代へ継承していきたいです。 聞き取り

ことで着ることも

できず、踊りのお

稽古などできるわ

けもありません。

壁にかけていた三

味線も「戦争して

いるのに何だそん

なものを飾って」

といわれるので、

見えないように布



僕は昭和3年に下谷区の仲御徒

前の生まれ。小学校1年の時に九

世西川扇蔵だった母が29歳の若さ

で急逝したのです。それでわずか

7歳で十世西川扇蔵を襲名しまし

た。学校が終わると一人で都電に

乗って、ほかの流派のお師匠さん

宅へお稽古に通うという小学生時

戦時色が濃くなってきたのは、

明大付属中野中学の2年生の頃で

す。当時、着物は「贅沢品」という

昭和8年常磐津「かつを売り」

代でした。

で覆っていたほど です。 戦局もいよいよ 悪化し、中学生の 僕も「勤労動員」に 駆り出され、大森 にあるチタンの会 社でハンダ付けの 作業を行う毎日で

そんな生活が続くなか、昭和20 年3月10日の大空襲で家が燃えて しまい、住むところがなくなって しまいました。それで、父の実家 の福島県二本松へ疎開すること になったのです。ちょうど地元の 中学校で代用教員を探しており、 中学校を卒業したばかりでしたが 運良く採用されました。当時は僕 の1級上まで「学徒動員」で戦争に 行っていたので、教師が不足して いたのです。ですから帰京までの 2年間を教師として福島で過ごし ました。東京と違って食べ物もあ るし、のどかな生活だったのを覚 えています。

した。

終戦後、東京へ戻り、明治大学 に入学しました。六世藤間勘十郎 先生に師事したのはその頃です。 まだ食糧事情も悪く、娯楽的なも のは二の次の時代でしたが、よ うやく踊りを再開できて、うれし



西川扇藏氏

日本舞踊家 市谷台町在住 昭和8年に初舞台を踏み、7歳で十世 西川扇藏を襲名。古典作品の的確な表 現に加え、新作の振り付けや上演でも実 力を発揮。平成 11 年に重要無形文化財 保持者(人間国宝)の認定をはじめ数々 の賞を受賞。公益財団法人日本舞踊振興 財団の理事長としても、日本舞踊の古典 発掘・研究・保存・伝承や海外活動を通 じて日本舞踊の国際化に尽力している。

かったですね。

戦後は踊り一筋に邁進し、平成 11年には重要無形文化財保持者 (人間国宝)に認定され、平成21年 には旭日小綬章をいただくことが できました。現在も、2、3年に一 度の頻度で外国公演を行っていま す。その時は必ず着物を着て行き ます。そして『ご覧のように着物 は運動に向きません。着物を着る のは日本人が平和な民族だからで す』とお話しすると外国の方も納 得されます。もう戦争はしちゃい けない。「和装」というぐらいで、 着物は平和の象徴です。着物で踊 ることで、日本人は争いを好まな い民族だということを次の世代や 世界中に伝えていきたいですね。



昭和13年「扇会」

寄稿

四谷に住んで

私の家は徳川時代から続く能の家で、庄内藩に仕え、明治維新の時に東京へ出たようです。姉が一人、兄が三人の末っ子で5歳の時に父が他界、能を継いでいた二番目の兄・清に厳しく稽古をつけられました。7歳より能の子方を勤めておりましたが、その頃はいやで逃げまわったものです。幼少期は麹町の平河町や四谷の南伊賀町で過ごし、番町小学校卒業のころ若葉に転居、四谷公園や西念寺の広場でよく遊びました。

15歳頃でしたか、西念寺通りに 「喜よし」という寄席があり、そこの 息子さんがカメラを教えてくれた りして誠に平和な時代でした。17



8歳の頃 右(兄)、左(従兄弟)と。

歳で家元の内弟子に入るも 結核(肺門リンパ腺炎)に罹 り、二年ほど療養生活を余 儀なくされました。

昭和18年、21歳で被告でででででででいる。 では、第三乙種でででででできる。 年召集、横須賀重砲兵連隊の写真班に配属されました。この隊にはいろいて、30歳を超えた料亭の若したの小倉さんにもこで会いました。 がいて、40人に4挺しかないありまでといましたが、懸命に訓練を重ね、弱い体も少し、対したののではいる。 重ね、弱い体も少し、満州へのでました。

出兵を控えていましたが、私達は 急にわずか四か月で除隊。それからは軍属として陸軍軍需本廠・機 械班に勤務。男は二、三人で女性 職員がほとんどでした。上司が謡 の稽古をご所望になり、夜は袴を はいて稽古に伺ったこともありま した。終戦後は解約の補償のため、 経理少佐と大阪の企業を回り、そ れで軍の仕事は解散となりました。

この間、若葉の家は空襲で焼け、近くの西念寺に身を寄せておりました。住職であった西島義彦氏とは懇意の間柄で何かとお世話になり、二人で暮らしました。私が外で風呂を沸かすと近所の方々が入りに来たりして、皆で助け合って生きていました。同じ環境の下、何もが平等で不思議と病人は少なく、皆、一つの方向を向いて明るく過ごしておりました。

西念寺が空襲にあった時は、あ の広い本堂に畳の数だけ焼夷弾が 落ちてきたような気がしました。



寄稿

三川泉氏

能シテ方 本塩町在住

大正 11 年、宝生流能シテ方の三川寿水の四男として生まれる。昭和4年に宝生流宗家の十七世宝生九郎重英に入門し、同年初舞台を踏む。昭和20年からは、野口兼資に師事。昭和56年から60年まで、現在の一般社団法人日本能楽会理事。平成15年、能シテ方の技法を高度に体現し、かつ、これに精通しているとして、重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受けた。

三川泉さんは平成28年2月13日に逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

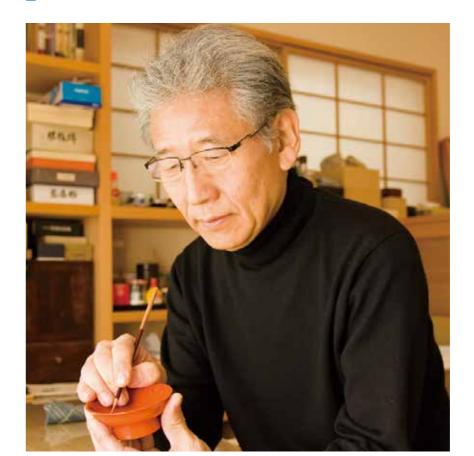
懸命の消火も間に合いません。近くの山田わか女史(社会思想家・1879年~1957年)宅の地下に避難しました。若かったこともありますが、あの時は何でしょう、B29の隊列を見上げたり、大切な文学全集が焼けたのにそれをじった見ているしかない、ある種、諦観するような不思議な感覚がありました。今思えば恐ろしいことばかりですが、それが日常でした。

終戦後、唯一残った染井の稽古 舞台でようやく能の公演をいたし ました。人々も芸に飢えていたの でしょう、いつも満員であったこ とが深く印象に残っております。



徴兵の時、家元、先輩、家族らの寄せ書き。

日本の工芸文化と平和な心



日本には世界に類を見ない素晴らしい美の分野があります。それが「工芸」です。工芸というと日常使用する食器類などをイメージすると思いますが、日本の工芸は、日常の器から芸術の世界までの幅広い分野を含んでいることが特徴です。世界の中でも特殊な価値観の中から生まれ育まれた日本の美です。

例えば、奈良時代の美の最高峰が収蔵されている東大寺の正倉院。ここに大切に伝えられてきた宝物は、すべて工芸品といっても過言ではありません。ところが明治期に、絵画・彫刻を「美術」と呼んで、「工芸」より上位とする西洋の価値観を取り入れてしまいました。ですから、今は日本美術といえば、真っ先に屛風や仏像を思い浮かべてしまうかも知れません。

しかし、千年以上にわたり日本の 文化の顔として、「工芸」は美の中 心にありました。日本美術は「工 芸」を軸に考えないと語れないの です。工芸品には「使う」という条 件が外せません。現在は絵画とし て分類されている屏風や複に描か れた絵も、実は部屋の仕切りとし て生活の中に存在していました。 日本の絵画は「使う」という意味で は、工芸の一種であったわけです。

工芸の中でも私が専門としている漆の分野は、その中心的存在です。漆は日本の山野に生育しているウルシノキの樹液を掻き取って精製した天然塗料で、縄文時代早期から現代に至るまで、日本人には欠くことの出来ない素材です。 ヨーロッパではかつて、日本の漆器をジャパンと呼んでいたほど大



室瀬 和美氏

漆芸家 下落合在住 東京藝術大学大学院修士課程で田口善 国に従事するとともに、漆芸作家であった父・室瀬春二、松田権六の指導を受 け蒔絵を中心とする伝統的な漆芸技法 を習得した。平成20年、重要無形文 化財保持者(人間国宝)の認定を受け、 同年、紫綬豪章を受章。

切にしており、現在でも日本の漆芸を高く評価しています。これから世界に出る若い人達が、現代まで伝えられている日本を代表する文化の一つである、この美しい漆文化を学び、語ることによって文化交流が深まる。漆も平和外交に結び付く重要なジャンルと言えるのではないでしょうか。

この漆に代表される工芸は、自 分勝手な造形をしてきたわけでは なく、相手との関係を尊重し、社会 生活と密接に関わりながら美的表 現をしてきました。「生活の中に美 を求める」という価値観から生まれ た芸術なのです。実はこの使う人 の立場を考えながら自らの美的感 覚を表現する日本の工芸文化の思 想、自己中心でなく相手の立場や 気持ちを大切にしながら自分を表 現する考え方こそが、平和な世界 を築くための知恵と言えます。

是非、次世代を担う若い人達が、 日本の工芸文化を通した価値観を 世界に広げ、平和な世界を目指し ていただきたいと願っています。 戦争は絶対に嫌です。戦争中の3年間ほど怖いことはもうない。 あの恐怖を味わったかどうかで、 それからの物事に対する姿勢が違ってきたと思います。

戦争はね、絶対に嫌です。いまのほとんどの人は戦争を知らないから。映画に出てくるような、そんな綺麗事じゃないんですよ。優しくしてくれた従兄弟たちも、出征して還ってきませんでした。いまの子どもたちは、自分とか家族の生命がおびやかされるなんてことは考えたことがないと思います。それが戦争というものなんです。

私は昭和7年に、7人姉妹の末っ子として生まれました。父は陸軍の軍人でしたが、物心ついた頃には退役していました。イギリスに単身赴任していたこともあって、軍人の家庭なのに自由で開放的な家風だったと思います。

開戦のときは9歳で、四谷の雙葉小学校に通っていました。お箏のお稽古よりも学校のほうが楽しいという小学生でしたね。

戦争が激しくなった昭和19年

に静岡の姉妹校へ 学童疎開すること になりました。空 襲撃報が出ると防 空壕に隠れるので すが、上空をB29 が東京方面へ飛ん で行くのが見える んです。「グーッ グーットという異 様な音はいまも耳 に残っています。 学校近くの畑を歩 いていたときに飛 行機から機銃掃 射されそうになっ たこともありま す。マダム (先生) が私をかばって長 い黒いドレスで隠

してくださったことは生涯忘れる ことができません。

そして、ちょうど東京に戻ってきていて3月10日の大空襲を経験しました。幸い自宅は戦火を逃れて翌日、神楽坂に行ってみたら下町一帯が焼け野原に。まっ茶色なその光景をただ呆然と見ていました。当時はみんな生きているだけで精一杯で、感情を失っていたんです。

それだけに終戦のときの開放感は大きく「これで命の危険はなくなった」とほっとしました。 並ざる 放送を聞いた後で、花柄の半袖の 服に着替えたのを覚えています。

お筝を本格的に始めたのも戦後 のことです。戦時中は息を潜めて いた演奏家たちが素晴らしい演奏 を披露して下さいました。いいも のを沢山聴く機会に恵まれたこと で、筝曲の雅なのどかさに魅了さ



六代 山勢 松韻氏

等曲演奏家 市谷在住 実姉が五代山勢松韻だったことで、幼 少より等、長唄、日本舞踊を学ぶ。東 京藝術大学に進み、専攻科修了後はア メリカのワシントン大学で客員教授と して勤務。帰国後は積極的に芸術祭に 参加し、3度の芸術祭賞受賞、平成9 年芸術選賞文部大臣賞。平成10年に 紫綬褒章を受章し、平成13年に重要 無形文化財保持者(人間国宝)に認定。 平成20年日本芸術院会員に任命。平 成25年、文化功労者として顕彰された。

れ、この道を歩む決心をした様に 思います。

戦争中の3年間ほど怖いことは もうないでしょう。あの恐怖を味 わったことで、それからの物事に 対する態度が違ってきたように思 います。



やなせたかしさんと平和

アンパンマンの生みの親でも知られる、新宿区名誉区民:やなせたか しさんは、平成25年10月13日に94歳で惜しくも亡くなられました。

やなせさんは、ご自身の戦争体験をとおして"平和"へのメッセージを 多く残されました。ここでは、株式会社やなせスタジオのご協力を得て、 その一部を紹介します。





軍隊時代の やなせたかし

ぼくは人を殺す戦争はきらいです。憎くもなんともない人を殺すのは嫌なのです。死ぬのも嫌だったけれど、もう94歳になると、そっちのほうはどうでもよくなりました。

戦争はしないほうがいい。

一度戦争をしたら、みんな戦争がきらいになりますよ。本当の戦争を知らないから「戦争をしろ」とか、「戦争をしたい」と考えるのです。(中略) こんなことを言うと、「アンパンマンはばいきんまんをアンパンチでやっつけるじゃあないか。あれはどうなんだ」と反論する人がいます。

ばいきんまんは人じゃなくてば い菌です。しかも、やられたら「ば いばいきーん」と言い残して去っ ていきます。そして、また戻って きて悪さをする。

アンパンマンとばいきんまんは、食べ物とばい菌です。だから、 仲良くしてもらっては困るので す。それでも、彼らはマンガの中 でともに生きています。(中略)

ぼくが言いたいのは、戦争にならないように、日頃からがんばって、みんなが戦争なんてしなくてすむ世の中にしよう、ということです。戦争をしなくていいんだ



© やなせたかし/フレーベル館・TMS・NTV



やなせたかし氏

平成16年、新宿区名誉区民になる。 その後、新宿区のこどもたちのために、 防犯マスコット「新宿シンちゃん」を寄贈。他にも、四谷子ども園園歌、新宿 養護学校校歌を作詞・作曲する。 昭和15年に徴兵され、中国に出征し終 戦を迎えた。

から、軍隊なんていらなくなりま す。でも、これはとても難しいこ とですよ。(中略)

ぼくは、戦争の原因は「飢え」と 「欲 |ではないか、と考えています。

腹が減ったから隣の国からとってこようとか、領土でも資源でもちゃんとあるのにもっと欲しいとか、そういうものが戦争につながるのです。

これは、生き物の生存本能だから困ります。

動物でも人間でも同じことですよ。 ただ、人間は頭のいい生き物だ から、なんとかできるのではない か、と思うのです。

ぼくが『アンパンマン』の中で描 こうとしたのは、分け与えること で飢えはなくせるということと、 嫌な相手とでも一緒にくらすこと はできるということです。

「マンガだからできることだ」 「現実にはムリだ」なんて言わず に、若い人たちが真剣に考えてく れればうれしいです。

> 『ぼくは戦争は大きらい』 (小学館刊)より

戦争を語り継ぐモノ

こちらで紹介する写真は、新宿区平和都市宣言30周年記念誌の発行に際して、区民の皆様から寄せられた資料です。





多くの有能な若者が戦地へ



坂部 健 さん 四谷四丁目在住 終戦時:19歳

私は大正15年生まれで、戦争が始まった頃は16歳です。12月8日の朝、登校しようと自転車のそばまで行ったら、ラジオから緊急放送が聞こえ、急いで家に戻って開戦の大本営発表を聞きました。「これはえらいことになるなぁ」と思いましたよ。

私が一番悔しいのは学徒出陣なんですよね。学徒出陣以後、文科系の人は二十歳になったら軍隊へ、理工科系の生徒や医学生は学業が終わるまでは勉強していてよろしいという制度ができたんですね。語学好きの兄も出陣の1人でした。神宮球場は雨の中、見送りに来た東京中の女学生でいっぱいだった。私も兄と従兄弟の見送りに行きました。

親にしてみれば2人しかいない男の子ですから、私は弁護士になる夢を諦めて、カメラ作りを学ぶ東京写真専門工業学校(現 東京工芸大学)への受験を決めました。戦争が嫌だから勉強するなんて、当時は非国民と言われたかもしれません。

戦争中に一本の映画を観て驚きました。戦時中の 日本にとっては敵国のものでしたから、特定の場所 で観せてもらいました。当時、アメリカはすでにカ ラー映画だったんですよ。その頃の日本映画はもち ろん白黒でしたから、「こんなに進歩した国と戦った ら負けても仕方ない」と思いましたよ。

専門学校の卒業前に、勤労動員で諏訪の工場に行けと言われたんですよ。そこへ行ってみたら、まだ



目白大学短期大学部の学生による坂部さんへのインタビュー

工場がこれから建設だったんです。信州にいる間は、霧ヶ峰から鉄平石という石を運ぶ仕事に就き、休憩には友人と一杯50銭のところてんを食べたりしましたね。

終戦の前日、東京の工場から小包を受け取ってくるようにと言われまして「久しぶりに東京へ帰れるから」って、自分から志願して友人と夜行列車で行ったんです。工場で小包を受け取り諏訪の工場へ帰る途中、機銃掃射が八王子付近に来たんですよ。そしたら運転手さんが機転を利かせたんでしょうね。物凄いスピードで小仏トンネルに飛び込んだことで助かりました。朝、上諏訪に着き、玉音放送を聞きました。

初めは、日本は勝つと思っていました。けれども、食べ物が無くなり空襲で家が焼かれると、いつ終わるんだという気持ちになっていきました。戦死した兄の遺物を受け取るため増上寺へ行ったのですが、そこでは「名誉の戦死」といわれ箱を渡されました。コロコロと音がするので開けると、石ころが一つ入っていたのです。

戦後、私は22歳で映画会社に就職し、その後も技術畑で25年働きました。高度経済成長で景気も売れ行きもよくなり、皆よく働きましたよ。今まで抑圧されていたけど、働けば働くだけの物をいただけるんですから。

戦争は絶対してはいけない。勝っても負けても悲惨ですよ。「ペンを捨てて銃を取れ」という言葉とともに、多くの有能な若者が戦地へ行きました。平和な国にするために、日本を守らなければならない。自分の国にプラスになるような備えは必要だと思います。

聞き取り

平和はすばらしい



鈴木 光男 さん 新宿一丁目在住 終戦時: 16歳

開戦当時は小学校六年でした。戦争のこともよく 分からないし、どんなことになるだろうと、とにか く深く考えませんでした。戦争が始まった時は、景 気のいい軍艦マーチが流れていて、勝ったらすごい ニュースが流れて、「日本はすごいな」と思っていま した。

何もかも不足していたけれども、特に不足しているのはお米でした。戦争当時、終戦後、お米は珍しかったです。買い物も自由にできなくなりました。 当時は、「産めよ増やせよ」で、妊婦さんが優先でした。私もずっと並んでいるのに、妊婦さんはどんどん、どんどん前へ行ってしまい、羨ましいなと思っていました。

戦争が始まった当時は、まだ国民を騒がせないようにお米がありましたが、長引くにつれ、ご飯なんて満足に食べたことはありませんでした。できるだけ量を増やすために、お粥にして、食べられるものは草でもなんでも入れました。特にサツマイモ入りは最高に美味しかったです。とにかくお腹一杯にしなくちゃなりませんでした。

だんだん戦争が激しくなって、食べるものがなくなると買い出しに行きました。誰が一番たくさん買って来るか、あちこち買出しに行きました。農家があるとそこへ行って「売ってください」って言って、断られて、また違う農家のところへ行ってお願いして断られて、やっとの思いでサツマイモを少し分けてもらいました。とにかく生きるため、食べるため、どこへでも行きました。

寮に入って軍事工場で働いていたときも食事はお 粥でした。サツマイモが入ったりしていたけれどと ても足りません。六郷川の土手へ行って、食べられ る草を教えてもらい、それを集めてごはんの中に入 れて足しにしました。

私の住んでいた地域が焼けた当時は、ひんぱんに空襲警報が発令されました。毎晩B29が来て、空襲警報が出るわけですから、寝間着なんて着て、のんびり寝ていられませんでした。いつでも飛び出せるように、ズボンをはいて、シャツを着て、上着だけは横に置いて寝ていました。一晩でいいから「空襲もないからゆっくり寝なさい」と言ってくれればいいなと思うくらい、とにかくひどかったです。私の家が焼けたときは、焼夷弾がちょうど手すりに落ちてバーンと一気に燃え出しました。あわてて逃げ出して、近くの大学に避難しました。

終戦になって、そのあくる日はウソみたいに空襲警報が鳴りませんでした。戦争が終わってゆっくり寝られる、戦争が終わるってこんなにいいものなのか、平和はこんなに素晴らしいものなのか、とつくづく思いました。



鈴木さんへのインタビュー

とにかく戦争だけはやってほしくないです。戦時中、わがままは一切通じませんでした。物が豊かな中でも、ある程度は我慢をしてほしいです。それと上を求めない、下を見つめて生きていきたいと思います。我慢する、人のために尽くす、そういったことを考えてほしいです。我慢してそれを乗り越えれば幸せになれるし、夢も持てるようになるのではと思います。

聞き取り

戦争は二度と繰り返してはならない



安藤 茂 さん 矢来町在住 終戦時:19歳

太平洋戦争開戦の時、私は中学2年生で矢来町に住んでいました。大学へは進まず、中島飛行機に徴用されて働いていました。太平洋戦争が始まったことはラジオで聞きました。そして「しょうがない、三国が手を結んでしまったのだな」と思ったのを覚えています。

戦争中の授業はというと、中学1年生から教練をします。 三八式歩兵銃を使った授業や、匍匐前進など厳しいものばかりでした。それらは毎時間違う先生に教えてもらっていました。模造銃を持ち歩いての登下校も当たり前でした。当時の情報源はみんなラジオでした。軍部の発表する報道をみんな本気にして、信用していました。しかし、今にして思えば嘘の放送が多かったですね。19歳のときに、微兵検査を

聞き取り

して軍に入隊しました。ここでは殴られることが多 く厳しい生活でした。

終戦は21歳で迎えました。この時は、軍用列車に 乗って中国にいました。終戦後で一番変わったこと は、食糧が悪くなったことです。一汁一菜が基本で した。月に1回体力検査があるのですが、どんどん体 重が減っていきましたよ。食事はおかゆが多く、箸 を差しても倒れるほどのつゆの多さでした。そのま ま中国に抑留されて、中国人に布を渡されリュック や毛布、靴下、肌着を作らされたり、ピストルを持っ ている中国人に、「ふんどしになれ」といわれたり、頭 から殺虫剤の粉をまかれたりもしました。

日本に戻ってきてから保険会社に5万円借りて、兄 弟5人で15坪の家を建てました。その後、出版社に 就職することができました。大正6年から父が蕎麦 屋を開いていたので継がなきゃいけないと思いなが らも、会社にいれば昼はサツマイモをくれるし、小麦 の配給がないので蕎麦屋も再開できずにいました。 その後、母がすい臓がんで入院してから1ヵ月ほど で亡くなったので、私は出版社を退職して蕎麦屋を 継ぎました。

戦争とは、本当にこれ以上ないほど悪いものであっ て二度と繰り返してはならないものです。学校で子 どもたちが銃の練習などをしていた姿は、悲しいも のですよ。



出征の時、神楽坂演舞場の出演者や近所の人達が寄せ書きをしてくれた日の丸。



安藤さんへのインタビュー

疎開時の苦労が戦後の私の礎に



大崎 秀夫 さん 箪笥町在住 終戦時:10歳

生まれたのは江東区の富岡八幡宮の近くで、家は 材木問屋でした。私は8人兄弟の3男坊です。兄たち が次々招集されて、富岡八幡様へ旗を持って、見送 りに行ったのを昨日のことのように覚えています。 戦争を意識したのは、それが最初ですね。

そのうち兄弟のなかで私だけ集団疎開することに なりました。通っていた平人小学校の疎開先は新潟 の弥彦村で、寮は弥彦神社のすぐそばの駅前にあっ た山田旅館です。

疎開中で何が一番、辛かったかというと地元の子 どもたちに「疎開、疎開」って、いじめられたことで す。私は体が小さかったですが、負けん気が強かっ たので、10人くらいの上級生にも体当たりして向 かっていきました。その後は、いじめもなくなりま したね。

あとは靴がなくて、裸足で学校に通っていたのを 思い出します。雪が降っても裸足だから、周りの人 がびっくりして、寮のおばさんが長靴をくれました。 食べ物がなかったのも辛かったね。寮のご飯では足 りなくて、近所の農家で作業を手伝って、おにぎりを もらったりして空腹を凌いでいました。考えてみた ら、地元の大人の人たちにはずいぶんよくしてもら いましたね。

疎開中は普通、親が面会に来ます。うちは一度も 来なかったけど寂しいとも思いませんでした。親が 来て「可愛そうだ」といって、東京に連れられて帰っ た子は、3月10日に亡くなりました。終戦後も、うち だけ迎えがなくて、いよいよ孤児院に入るという2日 前に親父が来たのだけど感激もなかったですね。

東京に戻ってしばらくして、また私だけ茨城で暮 らすことになり、1人で1年半ほど暮らしました。ま だ小学生ですよ。でも、うさぎを繁殖させて売って、 お小遣いを稼いだりして、たくましく暮らしていま した。

そうやって戦中・戦後と苦労して、生きながらえ たのだから、少しでも長生きして、地域のために役に

立ちたいという思いがありました。また人の情けが 分かるから、頼まれるとイヤといえない。それで、気 がついたらさまざまな役職を引き受けて、今日があ るというわけです。小さいときの試練は未だに忘れ ないですし、その経験がいまの私の基礎になってい るのは間違いないですね。

今の子どもたちには、礼儀や感謝を伝えることの大 切さを学んで、親を大事にしてもらいたいです。そう すればこれからの日本も良い国になると思います。

は思いますが、外圧を恐れず確とした外交姿勢を内 外にアピールし、安寧の日々を持続する良き国となっ て欲しいと思います。

戦死した父親の処へそれを報告に行く日を待ち望 んでいる老遺児が、心から願ってやまない次第です。

寄稿

学徒動員

寄稿



宮崎 玲子 さん 北町在住 終戦時: 15歳

当時は、短期の勤労奉仕ではなくて、工場への労 働も強制されました。太平洋戦争下では成年男子が 兵役に狩り出されたため、労働力が逼迫しました。 昭和16年(1941)に、14歳(数え年)から25歳の未婚・ 無職の女性を強制的に工場などの労働力とする勤労 動員徴用に関する法令が国家総動員法に基づき制定 され、主に軍需工場の労働に当てられました。未成 年学徒及び国民学校高等科卒業以上の女性も労働要 員とされて、その中には国民学校高等科や女学校の 生徒から店員や家事手伝い、花嫁修業中の人なども 含まれていました。当時日本領であった台湾、韓国、 南樺太の女性も同様の徴用を受けました。日本では 一般女性が軍務関係で働かされる事は少なかったと 思いますが、イギリスもこの制度が適用されて軍務 関係でも働いたそうです。

秋の稲刈り勤労奉仕が済んだ11月、私達2年生は 軍需工場への動員となりました。すでに上級生は工 場に通っていました。学校の生徒でありながら、授 業を全くせずに、直接工場に行って作業をする毎日 が始まりました。仕事は信管(弾丸の先につけて炸 裂させる部品)作りでした。疎開前の東京に残った同 級生は、計器に夜光塗料を塗る作業にあたり、塗料 には人体に影響を及ぼす成分が含まれていたそうで す。彼女らは状況が悪化して材料が滞り、最後はや ることなしに遊んでいるだけの状態もあったといい

同じ頃、中学生は松根油の材料としての松の大木 の根を掘るために動員されました。平成23年(2011)

気づいてみたら70年



小玉 進 さん 矢来町在住 小玉進さんは平成27年11月 28日に逝去されました。ご冥福 をお祈りいたします。

明治からの教育が戦時体制にはいり、尋常小学校 から国民学校第一期の新入生として未だ戦前の幸福 な時代が残る昭和16年に入学。桜満開の春を楽しむ 時間が過ぎ去る間もなく12月8日に大東亜戦争に入 りました。

楽しかるべき児童期から軍事優先の学童期とな り、3年生ともなると男女別クラスとなり、授業らし きものは修身と国語主体で1日の殆どが体操競技風 の木銃片手に匍匐前進や藁人形で作った敵大統領・ 首相の体を竹槍で刺す訓練等で明け暮れました。 シーズンによって出征兵士の家庭に派遣され、農作 業・山林作業等、勤労奉仕で子ども同士の遊び等と いうものは、ほとんど味わうことがありませんでし

昭和20年8月15日、玉音放送に涙し、何が悲しい のか真実が理解できず、日本が連合国に敗れた事実 のみ実感したものです。

今大戦で犠牲となった数百万の同胞の尊い生命と 引き換えに現在享受しているところの「幸福・平和・ 安全」が成り立っているということは確かです。

昨今、戦後70年の話題の中で、戦争についての賛否 両論が交わされております。そして、国・自治体・各 団体により色々な行事が行われていく事と思います。

私見としては賑やかな記念行事も意義のある事と

私は別に具体的な不調はなく健康だったのですが、生まれつきの顔色の悪さ(面の皮が厚くて血の気が見えない?)や、やや細めだったためか、身体検査で工場動員から外されました。外見だけで健康を判断する時代でした。工場に通う同級生から不心得者と白い目を向けられ、学校は楽しそうと羨ましがられ、また親が手をまわして工場動員を避けたのではないか、とも疑われて肩身の狭い思いでした。これが後日、本当に体調を崩す原因となったのでした。しかし、毎日遊んでいたわけではなく、在校生(1年生と専攻科生)用の給食の味噌汁作りや、職員室の掃除、日ごとに増える疎開転入生の世話などに忙しく過ごしました。特に味噌汁作りは前日に汁の実を刻み、当日は1時間以上前から大釜で薪を焚いて行う不慣れな仕事で、工場の方が楽かとも思いました。

私はどういう訳かこの学級に属してから少しずつ 体重が減り始め、毎日胃が痛くなりましたが、地元 の日赤病院に通っても消化薬を処方されたのみでし た。その頃の食糧不足や、食養生の悪さも響いてい たと思われますが、後にこの不調はストレスによる ものではないかと判断されています。

高等小学校1年生は、現在の中学校1年で13歳ですが、彼女らも勤労の日々となりました。午前中は目的不明の穴掘り、午後は錆びた鉄棒の錆落としで、錆で真っ赤に汚れた手は土で落として帰路についたそうです。毎朝「花もつぼみの若桜、五尺の命ひっさげて」と学徒動員の歌(作詞・野村俊夫)を歌って働きました。ごくわずかな報酬は郵便貯金に振り込まれましたが、戦後のインフレで、貯金が下ろせるようになった頃はほとんど価値を失ったといいます。また勤労学生への特別配給された下駄は台のみで、鼻緒を手作りしなければ使えませんでした。同じ年齢でも女学校では1年生の工場動員はされませんでした。外地在住の人達も、女子学生や小学生まで同様に勤労動員に狩り出されたそうです。

当時の学校の予防医学は実に粗末でした。虚弱者のクラスには、結核で長期間休み快復して工場へ戻るまでの準備期間として登校している者もいました。当時はゴホンゴホンと言いながらも熱が下がれば快癒とされていました。私は5月の身体測定の折に、それまで陰性だったツベルクリン反応で腕全体が腫れるほどとなり、落ち始めていた体重は25キロ

までやせ細って、みっともなくて人前に手足が出せなくなりました。

終戦で授業は平常に戻り、翌年父が戦地から帰還しました。 食糧事情は最悪でしたが、充分ではなかったにも拘らず、私の 体調は急に快復したのでした。 (「語り伝える戦時下の暮らし」 宮崎玲子著より)

新り伝える親野下の暮らし

語り伝える戦時下の暮らし

聞き取り

思考が停止した



山内 賢次郎 さん 白銀町在住 終戦時:21歳

太平洋戦争が起きた時、私は17歳でした。その後、 私は昭和18年頃に海軍に志願することになります。 当時、太平洋戦争を知り、アメリカに「やってやった」 という喜びの感情と、あまりにも戦域が広く、こんな 小さな国が本当にハワイまで行って戦争をして勝て るのかという不安もありました。

戦時中は、すべてが国によって統制されていました。しゃべることも思うようにしゃべれません。見えることも見てはいけない。聞くことも軍艦マーチばかりで自由に聞くことができない。まさに、「見ざる言わざる聞かざる」でした。すべてが一方的で、欧米に勝たなくてはいけないという方針のようでした。

当時、軍隊に行くか軍需工場に行くか、それ以外の選択した。その頃、戦力した。その頃、もした。昭日で対すまました。昭日で初めて利17年の4月18日で独立の時、私は赤坂の高池近くにいました。のはいました。のはからないました。のはからないました。のはからないました。



海軍に出征していた頃



山内さんへのインタビュー

た。爆弾が早稲田に落ちたと聞きました。こんなに も早くアメリカが攻めてくるとは、思っていなかっ たのでショックを受けました。「こんなことをしては いられない、私も国のために働かなくては」と思い海 軍へ志願したのです。

昭和18年の晩秋、横須賀武山海兵団に入隊。そこで 3ヵ月くらい訓練を受け、選抜されて、山口県と広島県 の県境にある大竹海軍潜水学校に配属されました。

昭和19年秋、上官からいきなり小型潜水艦への配属を命じられました。乗艦する潜水艦は、波号の第228潜という特立型潜水艦でした。訓練艦で猛訓練の最中、8月15日に学校の全員が呼び出され、天皇陛下の終戦を知らせるラジオを聞きました。天皇陛下は、戦争は終わったとは言っていましたが、私の上官は、「まだ海軍は生きているから、いつでも帰校できるように準備しておけ」と言われました。

終戦まで私たちは「お前たちは戦争で戦って死ぬんだ」と洗脳されていました。しかし、上官から、しばらくして「戦争は終わった。お前らはもう家に帰っていい」と告げられました。それを聞いたとき、私の頭の思考が停止してしまったのです。"死ぬ"ということから"生きていく"という急な転換に頭がついていけなかったのです。慣れてきたのは、それから1、2年後のことでした。

現代、自由に意見が言える雰囲気に育った皆さん



出征する時に「武運 長 久」(出征した兵がいつまでも無事なこと)を願って、 兄弟、友人、町会の人々が寄せ書きをしてくれた日の丸。

は、相手を知るという意味でも、もっと広い世界観を 持ってほしいです。私が体験した戦争は、歴史とし て過去のものになってきています。次の時代には、 もう新しい日本ができているわけだから、これから の時代、個々だけでなく連帯感を持って生きて欲し いと思います。

寄稿

「銃後」の戦争体験



大竹 良重 さん 榎町在住 終戦時: 17歳

平和日本の今日では、既に死語に等しくとなった 「銃後 |が私の戦争体験の場である。

昭和19年末から翌20年の戦争も終焉に近づいた 時期の体験は、心に鮮明に残っている。

当時私は満17歳、紛れも無い軍国少年の一人であった。同い年で軍隊に志願する者が周囲にも少なくなかった。工業学校生徒であった私は、学徒勤員の一員として、東京都下小金井町の軍需工場に派遣された。工業学校ということで充分な訓練も受けぬまま旋盤部門に配属された。工場の人員構成は、男子女子の動員学徒と一般被開工で大半を占め、熟練工と目される人材は徴兵の影響か、非常に少なかった。工場は海軍の水中聴音機(ソナー)を造っていると聞かされたが、終ぞ完成品を見ることは無かった。

昭和19年の11月頃から米機の本土空襲が活発になった。記憶では、昭和20年4月7日午前10時頃に、その年何度目かの空襲警報が発令された。従業員は工場の命令で作業を中止して工場グラウンドに掘られた簡易防空壕に分散して避難した。狭く薄暗い壕内で仲間と空虚な会話を交わしながら、真上を通過するB29の爆音を漫然と聴いていた。

何分か経って、気配で安全を確認したか、一人が 壕を出ると、次々と皆が明るい外へ出た。

爆音の中、上空を見上げると、真っ昼間、B29の編隊が一万メートル近い高空をゆうゆうと、我が物顔に飛行していた。翼がキラキラ光っていたのが強い印象として残っている。軍国少年は拳を固めていた

に違いない。

我々の工場の真上を通過したB29の編隊が、三鷹あたりの上空で爆弾と思われるキラキラ光る物体を降り注ぐ様に投下しているのが遠望された。三鷹には中島飛行機の主力工場があり、以前にもB29の標的にされている。

投下から、何秒かすると、何か体に微震が伝わった。他の従業員も感じた様で、工場内に一瞬異様な雰囲気が漂った。

250キロ爆弾を含む多量の着弾で、中島飛行機では、動員学徒や徴用工も入った多数の従業員が犠牲になっている。ということが現実だと思っても、当時の我々は「悲愴」な気持ちは湧かなかった。戦争のもたらす非情さと、心の奥に「明日は我が身」という思いがあったことも否めない。

更に、遠望とは言え、爆弾が雨の様に投下されるシーンを見ながら何を思っていたのかは定かでないが、不条理はすべて戦争遂行のためという理屈のもと、首己歎繭が加わって納得し非情になっていたとも思う。

平和な今日では、建築現場でボルト1本を落下させても問題化する。状況を前者と比較すれば、平和の尊さを敢えて論ずることも無い。

寄稿

私の8月15日



加藤 利雄 さん 喜久井町在住 終戦時:14歳

その日は、朝から真夏の太陽が照りつけ、田んぽの水面がキラキラと輝いていた。伯父の家族、母、妹と朝食をとりながら朝6時のラジオのニュースを聞いていると本日正午に天皇陛下のお言葉が放送されるので聞き逃しの無い様にと呼びかけている。本土決戦に備えて国民に奮起を促す放送であろうと私は思った。昭和20年8月15日、山形県鶴岡市の在にある農家に縁故疎開していた時の体験である。

朝食後約1里の道のりを徒歩で市内にある鶴岡中 学に向かう。学校に工場が疎開してくるので、3年生 であった私達は、数日前から教室の床をはがす作業を行っていた。正午が近づくと全員講堂に集合するよう連絡があり、軍靴を脱いで講堂に上がると演壇にラジオが置いてある。全員ゲートルを巻いたままラジオに向かって正座し、放送が始まると土下座して玉音放送を聞いた。初めは良く聞き取れなかったが、「忍びがたきを忍び」と聞いた時に、とうとう日本は負けたのだと悟った。「神州不滅」、「有史以来負け知らず」と教えられていた軍国少年の私にとって大変ショックであり、残念であった。

放送が終わると前の方の生徒数人が大きな声を出して背伸びをした。ゲートルを巻いたまま20分以上も正座していたので足が痺れたのである。すると若い教師がその生徒達にいきなり往復ビンタを加えた。「貴様達のような奴がいるから日本は負けたんだ」その教師も私と同じように日本が負けた悔しさの憂さをそのような形で晴らしたのだろう。

私は、悔しい気持ちを胸に秘めながら帰路に着いた。太平洋戦争が始まって以来私が経験したことが 走馬灯のように思い浮かぶ。

真珠湾攻撃による大戦果、シンガポール陥落の提 灯行列など日本中が高揚していた時の昭和17年4月 18日、東京の最初の空襲の時に見た超低空で飛来したB25のパイロットの顔、その空襲で焼夷弾の直撃 を受け亡くなった先輩の葬儀の長い葬列。

昭和20年3月10日の空襲の時、学校防衛隊の一員であった私は、空襲警報と共に早稲田中学に駆けつけた。その屋上で見た日本の高射砲や戦闘機をあざ笑うが様に泳いでいた超高空のB29の編隊、その結果本所・深川地区や神楽坂で莫大な被害が出て真っ赤に染まった東の空。

5月25日東京最後の空襲で早稲田大学理工学研究所の直下に私も勤労動員で掘ったL字型横穴式防空壕で、両側が火の海で逃げ出す事が出来ず300人以上の犠牲者が出たこと。

また、東京に残った私の父親は消火活動の後その 防空壕に行ったが、満員で入れず、止む無く大学の キャンパスに逃げて難を逃れたこと。

山形に来てから前年に決壊した最上川の堤防を修復すべく近くの小学校に泊まり込みで行ったモッコ担ぎやトロッコ押し作業、飛行機の燃料にするため羽黒山の麓まで行って松の根を掘り起す作業など。

家路の途中、最上川の支流である赤川の橋の上で 出羽三山を眺めながら私はさめざめと泣いた。

忘れまじ この悔しさを いつの日か 晴らさん覚悟 赤川のごと

その年の暮れ、焼け跡のバラックに住むべく東京

に戻り、お世話になった先生に手紙を出した。望外 にも戴いたご返事の中で「反動に走るな」の言葉が軍 国少年の呪縛を解き放ち、その後の私の人生が正常 になったと確信している。

オウム真理教事件、昨今の9·11、各国の自爆テロ、イスラム国などの若い人たちの行動のニュースを聞くたびに、若き日の自分と重ね合わせ忸怩たる思いがある。

青少年に対する教育の大切さを認識し、日本には、 決して悪夢のような日が来ないことを切に願ってい る今日この頃である。

寄稿

学童疎開の思い出



管野 晃 さん 改代町在住 終戦時:12歳

昭和19年の新学期の頃だと思う。学童疎開が本格化し始めた。学童疎開というのは、太平洋戦争末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校(昭和16年4月から従来の尋常小学校は国民学校となり、昭和22年現在の小学校となる)児童を、農山村地域に集団的にまたは個人的に移動させることで、あのお宅は親戚の田舎へ疎開したと言うような話が、ちらほらと聞こえていた。

当時私は現在の新宿区改代町に居住し国民学校初等科6年生であったが、知らない土地へ疎開をするなら知っている場所の方が良いと思い、箱根岡田高原学園が疎開児童を募集していたのでそこへ行くことにした。箱根は風光明媚な所で、現在の小涌園の所を左に曲がり旅館の三河屋の右隣にあり、夏休み中であったにもかかわらず、2日陽が照って少し焼けたかなと思うと、1日雨が降り、雨の多い所だという印象があった。とは言え、食事は少なく食生活は決して良いとは言えなかった。

そのうち東京では、集団疎開の準備が進み、改代 町は栃木県上都賀郡加蘇村下久我にある常真寺と 言うお寺へ行くことになった。そこは、現在のJR日 光線の鹿沼駅から三里半ぐらい入ったところで、現 在は鹿沼市になってしまったらしく地図を見ても確認できなかった。私はその中に妹がいたので合流した。妹の話では、往路は貨車で鹿沼を下りてからはトラックだったとのことである。

寺での集団生活は、始まりの1週間ぐらいの間は泣いていた子どももいたようだが、楽しいと言うにはいかないが、極端な喧嘩やいじめのようなことも無かったように思われ、概ね順調にいったのではなかったか。

ここでの集団生活を思いつくまま記してみようと 思う。

まず悩まされたのはノミとシラミで、ノミは畳に 潜っているのか、布団に住み着いているのか、喰われ れば痒いのは当たり前だが、布団の裏はノミの糞の 黒いあとが、赤飯に胡麻を振り掛けたようになって いた。

次はシラミで、下着の縫い目にびっしりと提灯行列のように並んでいた。寮母さん達が熱湯処理をしてくれたので、被害は少なくなった。他の寮では、家恋しさか児童が脱走を試みたということもあった。

悲しい事もあった。一人の女の子が、腹痛を起こしたが、治らないので鹿沼からお医者さんが来たが、亡くなってしまった。後で聞くところによれば、腸閉塞とか腸捻転とか言っていた。現在ならばこのようなことには絶対にならないと思う。

戦争は、いつの時代でも、一番弱い者にしわ寄せ が来る。理由などない。戦争は反対だ。

聞き取り

日本人としての誇りを大切に



「土川 隣之介 さん 市谷台町在住

戦時中、私は本籍のある岡山県の第六高等学校に 通っていました。そして、高校の寮で生活していま した。

終戦時:19歳

寮の同室に韓国籍の方がいました。日本にいる間は日本名を使っていましたが、戦争が終わってからは本名に戻していました。しかし彼はその後、アメ

聞き取り

聞き取り

リカに連れていかれ、日本の情報を探るためにあち こち引っ張りまわされていたと聞いています。

昭和20年3月、高等学校卒業後に、私は家族の居る東京(小石川区林町)に大学入学のために移り住みました。しかし、五月頃でしょうか、空襲で家が焼失してしまい、家族は岡山に戻りましたが、私は東京に残ることになりました。

岡山の家族のもとへは、 $1 \sim 2$ 週間ぐらいの期間、 時々行ったりもしました。

当時の移動手段は、列車でした。ですが、現在のような時刻表もなく、いつくるかも分からない列車を、駅でただひたすら待っていたのを覚えています。 列車に乗ってからも、軍人さんや学生など、大人から子どもまで、人と荷物であふれる車内で、じっと立ち続けながら数時間、長いときには数十時間に感じる距離を、列車に揺られていました。

終戦が近づいていた頃、私は「戦後どうなるのか」などとは考えませんでした。「ほしがりません、勝つまでは」の標語のもと、我慢して戦わなければならないと教えられていたので「早く戦争が終わればいいのに」などとも考えませんでした。終戦のことは父から聞きました。その頃には、父と2人で、再び東京に戻っていました。終戦を喜んだりはしませんでした。日本は負けてしまった、これは「恥」であると、感じていたからです。

当時、国が決めたことなら仕方がないし、やるしかない、従うしかないと思っていました。戦後70年経ちましたが、自由というのは、あくまでも考え方の一つであって、自身の行動にはある程度の秩序が必要だと思います。何があっても頑張ろうではないか。戦後も、日本人特有の団結力があったからこそ、立ち直ることができたのではと考えます。

たしかに、悲惨な目にも遭いましたが、それにより、日本人は学んだこともあるのではないでしょうか。日本はとても恵まれていて、いい歴史と伝統があると思っています。それらを引き継いでいくことが大切だと思います。



江川さんへのインタビュー

戦争は勝ち負けなどではない



太田 壽夫 さん 市谷台町在住 終戦時: 18歳

私の生まれは昭和2年、開戦時は14歳の学生です。 住まいは新宿区でしたが、昔の言い方ですと東京府 淀橋区と呼ばれていた地域に住んでいました。

昭和16年12月8日の朝、私はその頃、早稲田の中学へ自転車に乗って学校へ向かっていました。登校中ラジオから軍艦マーチが聞こえてきて、開戦や、米英軍との戦いに突入といった内容も聞こえました。私自身この時に戦争の恐ろしさを体験したわけではなく、分からないことが多かったですね。ただ本当にびっくりしましたよ。登校中の出来事だったので、学校に着いても開戦を知らない生徒もいました。

学生帽と身には、帯剣を着け、巻脚絆を巻き、銃を 担いで富士山麓の滝ケ原や、千葉県習志野で演習を 重ねたこともありますよ。

当時は体の丈夫な20代の若者には有無を言わさず 召集令状という「赤紙」が送られて兵隊になったわけです。私は17歳の時、召集を待たずして「どうせ軍へ入るなら」と、親にも大した挨拶もせず、ひとり志願兵として立川にあった軍の適性検査を受けに行ったんです。なぜ自ら行ったかといっても、志願兵は陸海空の兵種を選べますし、そういう時代だったのでね。そのまま福岡県大力洗陸軍飛行学校へ入隊しました。そこからは新兵としての訓練を受けましたよ。宇都宮でも、グライダーの練習をしましたね。その後、仙台で第2師団第3中隊に配属になり、飛行訓練で連日を過ごしましたよ。



身体検査の写真

昭和19年12月30日、私は 第3航空軍に転属となり、南 方へ向けて門司港を出港しま した。私たちが乗るのは油運 送船でね、宗像丸という船で した。この船はもともと船体 の前後に油を積み運ぶ船だっ たんですが、当時は何しろ資 源がない。食料だけでなく、 飛行機を飛ばす油もなかった 中学5の時の富士 山演習場にて。す ねにゲートルを巻 いている。



昭和 19 年 4 月 1 日、 大刀洗 陸軍飛行学校 (福岡県) にて。当時 は一等兵だった。

その後、台湾の第74飛行場中隊となり、終戦を知ったのは台北の山の中にある飛行場でした。ここで玉音放送を聞いたときには先のことが全く分からなかったですね。復員後、地元に帰ると水道管だけが残った焼野原が広がっていました。母と弟は岐阜県、妹は学童疎開しましたが、父は家で空襲に遭いました。兵隊に出た自分が生き残ることができたこと、家族5人が再会できたのは、運が良かったとしか言えません。紆余曲折を経た青春時代でしたが、戦争は絶対にしないことです。戦争は勝ち負けなどではないのですから。

一瞬のうちに焼土が広がり、多くの命が失われる ことを知っていれば…。

青春は 夏の軍歌と ともに去り



太田さんへのインタビュー

忘れられない疎開先での出来事



大森 保 さん 市谷台町在住 終戦時:8歳

開戦当時は4歳でした。前から「戦争がありそうだ」 と父から聞いていたのと、市ヶ谷に住んでいて大本 営が近く、沢山軍人さんがいたために情報が入って いたので、「始まったのかな」と思ったくらいでした。

昭和20年3月10日の大空襲を見て、おふくろが子どもだから危ないというので、実家がある茨城県の日立に疎開させられました。当時、小学一年生でした。日立に避難しても日立製作所が国営の工場になっていたので、狙われて艦砲射撃にあいました。戦艦とか大きい船が海の沖にずらっと並んで、一斉に大砲で攻撃してきました。工場がほとんど壊滅したところもあるくらいでした。何発かは工場を通り過ぎて町に落ち、死人も出ました。幸い私は、おじいさんにおぶわれて逃げて助かりました。

疎開中、ロッキードP38にも追いかけられました。 すごい勢いで急降下してきました。神社のお社には 木が生い茂っているので、その中に逃げ込むと上から は分かりません。そこに穴を掘って防空壕を作り、友 人とみんなで隠れていました。穴の中から覗くと向こ うからおばあさんが来ました。一生懸命駆け出してい たけれど、間に合いませんでした。おばあさんは水を 張ったばかりの見晴らしの良い田んぼのところで撃た れてしまいました。機銃掃射ですからもう体はめちゃ めちゃで、血がぱっと散っていました。今でも夢に見 たり、思い出したりすることがあります。

終戦当時は8歳でした。当時ラジオもあまりありませんでした。おじいさんおばあさんの年代の人は漢字が読めない人も多く、新聞をとっている家も何



昭和 22 年頃 のバラック



焼け跡に倉庫と庭園の石塔、風呂 屋の煙突が見える。(昭和 22 年頃)



焼け跡に水道管が見える。 (昭和 22 年頃)

件とありませんでした。12時に何か放送があると聞き、おじいさんが庭の挿し木にラジオをひっかけて近所の人に触れ回りました。全部で20人くらい集まって聞きました。

あまりいいラジオでないのでざわざわして、さらに古い言葉で言われるのでちんぷんかんぷんでした。おじいさんが朝鮮総督府の書記官をやっていたので意味を説明してくれて、日本が負けたことを知りました。みんな唖然としていました。子どもがみんな戦争に行っている人が多く、中には泣きだす人もいました。これは大変なことになったなと思いました。これからの生活の心配というより、戦地に行った人が、負けてどうなるだろうと心配していました。

平和はすごく大事なことです。ただ、平和なのが 当たり前だと感じるかもしれませんが、決して平和 なのは当たり前じゃなくて、自分たちが考えて、積 み重ねて、こしらえていかないといけないと思いま す。何百万と戦死した人もいるわけですから、そう いう人たちが何のために戦ったのかというのを少し でも、一歩でも、理解するようにして欲しいです。今 ある平和を積み重ねて行ってください。平和に浮か れすぎないで大事にしてほしいです。



大森さんへのインタビュー

戦争の中で育った昭和っ子



小林 八郎 さん 富久町在住 終戦時:12歳

●その頃の東京は、のどかだった

昭和8年2月、牛込区市谷谷町の米屋の三番目の子 どもとして生まれる。一家は、祖父・祖母・叔父・父母・ 兄姉・私の2世帯8人の大家族であった。

物心がつき、近所の遊び仲間と走り回っていた頃のまちの風景は、「あさり〜、しじみ〜、とうふ〜、納豆〜」とにぎやかな売り声が流れ、子どもたちは「あっさり〜、死んじめ〜」と叫びながら、まちを走り回っていた。

7歳になり、牛込尋常小学校(現 牛込仲之小学校) に入学。風邪から肺炎を患い、熱さましの馬肉を繰り返し胸に張ってもらい、死病から逃れたが、一年生 の半分は不登校だった。その頃は、米、酒、塩、薪、 炭等は荷馬車で運んでいた。小物は大八車で運び、 自転車、リヤカーは高級品だった。

昭和12年、支那事変がはじまり、出征兵士の社行会が行われるようになった。子どもたちの遊び場だった念仏坂の石段下の小広場に箱を並べ、「祝出征〇〇〇君」と書いた赤いタスキを掛け、壇上に立ち、軍服姿の在郷軍人があいさつをし、みんなでバンザイを唱えた。また、愛国婦人会のタスキを掛けた割烹着姿のおばさん達や子ども達も一緒になり、「勝ってくるぞと勇ましく~」と大声で謳いながら、大幟を立て、今の靖国通りまで送り出した。

市ヶ谷には陸軍士官学校があったので、馬に乗っている将校をよく見かけた。また、週に一度、陸軍戸山学校から代々木の練兵場に演習に向かう隊列をバンザイで見送った。

やがて、米、味噌、醤油、酒、たばこ等、みんな配給制となり、我が家も店を閉じた。父は配給所の職員となり、休みの日はリヤカー運送を始めたが、その後、徴用され、飛行機工場に通うこととなり、次々に近所のお店も閉じられ、まちは淋しくなっていった。日曜は警防団として、空襲に備え、隣組ごとに防火演習を行い、バケツリレーの訓練も行った。灯火管制で電灯の笠に風呂敷を掛け、学校への登下校もまち

を二分しての集団登校となっていった。

●日々戦時色が濃くなった

小学校は国民学校と名を変え、2年生になると元海 軍少尉だった芳賀先生が担任となった。病気で退官 したと聞いた先生はやさしくて厳しかったが人気が あった。

昭和16年12月8日、先生からアメリカ・イギリスと戦争となったこと、海軍がハワイを空襲してアメリカ艦隊を撃滅したことを聞き、みんなでバンザイを繰り返した。翌日から、黒板の脇に世界地図を張り、先生に教えられ、地図に日の丸を張り付けたマッチ棒を突き立てた。毎日戦争の話からはじまり、「ハワイ・マレー沖海戦」やニュース映画等の迫力に夢中になった。

春になると芳賀先生は海軍に戻り、学校長以外は、 みんな女の先生になった。4月の土曜日、町の通りで 遊んでいた12時頃、突然警戒警報のサイレンが鳴り 響き、戸山方向でドンドンと大砲の音がし、振り向く と、白い煙の花が浮かび、その下を超低空で飛んで いく黒い胴体に黄色い星の双発の飛行機が見えた。 翌日には、早稲田の岡崎病院の前で子どもに焼夷弾 が直撃したと聞き、亡くなったと聞こえてきた。

●身近に迫る戦争

昭和18年になると、順次、学童は地方に疎開することとなり、牛込仲之国民学校は栃木県益子町を指定された。個人で疎開する者を除き、3年生から5年生までの希望者を募り、翌年夏までに出発することとなった。

我が家は3年生の弟も一緒だった。夏のある日、学用品・着替え等を持ち、親に付き添われ、30人位が学校に集合した。先生2名・寮母さん2名に引率され、11時頃に出発。上野から小山、下館を経由し、午後5時頃益子に到着した。田舎の小さな駅では、町役場の人や先生たち10人位が出迎えてくれた。小山の中腹にある宿舎の観音寺に着いたのは日の暮れた頃。親と離れ、淋しさが増し、弟は泣き出しそうだった。お寺に案内され、食事の後、諸注意を受け、本堂に布団を並べて敷いた。便所は本堂裏の山際にあり、暗くて怖く感じた。床に入っても中々寝付けなかった。

翌朝は6時に起床、和尚が唱えるお経を一緒に唱えることが、毎日の日課となった。益子小学校では、生徒50人位・先生15人位が出迎えてくれた。大岡教頭先生が朝礼台に上り、朗朗とした声で明治天皇の御製(天皇の作る詩文や和歌)を唱え、その意味を教わり、今後、一体となって勉強することを誓いあっ

た。益子小学校の子どもたちとはすぐに仲良くなった。冬の寒さは厳しかったが下駄スケートも楽しん だ

サイパンの陥落が伝えられた頃、益子の小山の上にある監視哨に地元の子どもと訪れたが監視員は退屈していた。翌年、数人の6年生は帰京することとなったが、弟は残された。

昭和20年3月、東京が大空襲を受けたことを知ってから、じきに帰京することとなった。来た時の通り列車を乗り換えたが、列車の窓には幕が張られていた。昼過ぎ、上野に到着した。異様な焼けた匂いがしていて、迎えに来た親たちも押し黙っていた。校長先生の簡単なあいさつの後、すぐに解散。立ち退きにより我が家には帰れず、迎えに来てくれた父に連れられ、見知らぬまちで家族と合流した。家の中は雑然としており、大風呂敷に包んだ荷物が雑然と転がっていた。

●だれもが生き残るため必死だった

東京に戻ってから、わずか3日で、父の実家へと疎開した。父は自転車で先導し、叔父と兄は、それぞれ自転車にリヤカーをつけ、箪笥や大風呂敷など荷物を積み、布団で囲った中に、母と2人の妹、弟の4人が乗り、私は押す役だった。

7時に出発をし、池袋・板橋・志村をとおり、戸田橋を渡って埼玉県に入ったが、道は荷物を積んだリヤカー・大八車があふれていた。昼を過ぎ、大宮の氷川神社の参道に着いた。父の知り合いのクリーニング屋で大きなヤカン一杯のお茶と蒸したじゃがいもを持ってきてくれてみんなで大喜びした。

父の実家は、食事を用意して今か今かと待っていてくれたが、やっとたどり着いたのは夜11時を過ぎていた。

田舎での生活は88歳の祖父(父の父)をはじめ、叔母さん一家7人と私たち東京から疎開してきた5人、合わせて12人という大所帯の生活になった。つるべでの水汲みは大仕事であり、子どもたちや老親の洗濯、食事の支度等、母は慣れない田舎暮らしに大変だったと思う。

母子5人を田舎に残し、父たちが帰京して3日目の 夜、家の庭先の遠方、森の上の空が真っ赤になった。 祖父が東京が空襲されているといった。何とか無事 に逃げてほしいと念じたが、胸に迫る想いに涙が止 まらなかった。翌日、父が無事を知らせに、自転車で 駆け付けてくれた。「みんな無事だが、東京は一面焼 け野原でひどいものだ。」といい、自転車に食べ物を 積んですぐ帰っていった。 それからは、村の高等小学校に通いつつ、馬の鼻取り、田植え、桑の葉つみ等、一生懸命農作業の手伝いをした。8月15日、重大放送があると田舎の家の縁側にラジオを持ち出し、近所の人々と一緒に聞いた。終戦の詔勅であった。老爺が「どうやら敗けたらしい」といった。数日後、父達がリヤカーで迎えに来て、東京に戻ると一面焼け野原だった。焼けトタンのバラック住まいで薯と雑草を摘んで、煮炊きし飢えをしのいた。

家族には、夜中でも食べ物が買える時代が来ると は想像もできなかった。

衣食足りて礼節を知る。わかるかなぁー。

寄稿

黒い雨に泣いた日



志村 恭子 さん 若松町在住 終戦時:5歳

当時私は、5歳。前橋市内の幼稚園に通っていました。連日空襲警報が鳴り、防災頭巾を被りすぐに帰宅する日々でした。

あれは忘れもしない、8月の暑い日の出来事でした。 明け方、警報がいつもより大きく、どーんと何かが 落ちてくる音で飛び起きました。高校生の兄が「大 変だ!家が燃えている。早く外に出るんだ」目の前の 蚊帳に火がついていたのです。母は、弟をおんぶし、 私は頭巾を被るのがやっと。庭の防空壕に走りまし た。中は、水が溜まっていましたが、焼夷弾が落ちて くる方が怖いので、じっと我慢していました。

明かりが見えて、土と草で覆われた入口の板を開けて外に出てみました。

辺りを見て茫然。焼け残ったのは、近くの家一軒のみで、見渡す限り焼け野原でした。水蒸気が、あちこち立ち、雨の様な水が落ちてきました。母と兄の顔が黒くなっていて、私も同じだったでしょう。 大火災で、水蒸気が上がり煤と混じり黒い雨になったのでしょう。

その時になって私は、泣きました。食べる物も無 く、お腹も空いていました。母が隣の漬物工場の跡 に行き、黒焦げのたくわんを貰ってきました。私は、 口を黒くして食べました。

自転車の音がして、「あっ!お父さんだ」。なんと、電車が止まっているので桐生から自転車で帰って来たのです。父は教師で、その頃は、桐生の学校に転勤したばかりでした。夕方、兄と前橋中学校(現在の前橋高校)の近くに行ってみました。

・ 世道には、たくさんの不発弾が地面からのぞいていました。二人でそっと歩きました。

間もなく、小学校に行けるようになりましたが、 本、ノートの無い日が続きました。家は、貧しく大家 族でしたが、夕方遅くまで近所の子と、思い切り外で 遊び、お正月は家に呼んでカルタ大会などしました。 おかげさまで、父の知り合いの方の助けで今日があ ることに心から感謝しております。

終戦から3年程過ぎた頃、父が「東京はどうなって いるのか」と、姉と私を連れて上京したのです。

あの、上野公園で見たことは、忘れられません。 少年たちが、あちこちで靴磨きの仕事を必死で やっていた姿でした。私は、涙がこぼれました。

大人になってから、困っている子どもを見ると、何 かと助けてしまいます。

自分の子ども、孫の事を大切に思いながら70代に なりました。

戦争の悲劇を忘れてはなりません。

子どもたちに伝えていこう。戦争はしてはいけな いことを!

寄稿

兄妹二人で防空壕で生活していた頃

須田 秀雄 さん

戸山二丁目在住 終戦時:16歳

日本で戦争初期に空襲を受けたところは各地にありました。新宿区の早稲田鶴巻町、私の母校である 鶴巻小学校付近もその一つです。

双発の飛行のうち1機が私の家の上を低空で飛んでいきました。私は、まだキナ臭い匂いがする現場を見に行きました。そこは映画館の早稲田キネマの前でした。小学生のころ妹達と「四谷怪談」や鈴木澄子の「化け猫」の映画を観に行ったのを思い出して、「何でこんな所に・・」と思いましたが、それが数年後



小学校の 修学旅行で (伊勢神宮)

のB29の大空襲の前触れだとは、誰が思ったことで しょう。

その数年後、私たちは防空壕生活になっています。鶴巻町の電車通りは海軍の兵隊が江戸川公園の 崖に防空壕を掘って、その土は江戸川橋付近まで積 み上げられました。私の家の防空壕は、建物疎開の 跡地に作りました。

父は、下町方面の大空襲の後、私と妹のために疎開を決めたようで、長姉の嫁いでいる長野へ借家を探しに母と行きました。

東京の家は、連日連夜の空襲警報のサイレンと雨漏りがひどく、畳にはキノコが林立したり、ネズミが出たりで家には入れませんでした。田舎での借家は、見つかりましたが、東京発の汽車の切符が買えず、私は引き続き柳町の建物疎開の作業に出ていました。建物疎開で住人が去った家の中には、あわただしい疎開のためか、床の間には未だ置物があり、子ども部屋らしい部屋には絵が貼ったままになっていました。

当時、私は16歳でした。妹は近くの工場に通っていました。夜毎の警戒警報で服のままのゴロ寝でした。ある日アメリカの戦闘機が早稲田大学の大隈講堂を旋回しているのを見て悲しくなりました。



アルバム





食事の支度は、一つ違いの妹がしてくれました。 ご飯は少なく、野菜の入ったおじやでした。そのう ちに長野行の切符も取れて、隣組に挨拶をして、借 家でしたが幼いころから住んだ家を離れました。私 はリュックサック1個、妹は母に頼まれたかヤカンと ホウキを持っていたのを覚えています。

家が焼けたのを知ったのは、数か月後でした。

聞き取り

絶対に戦争はしてはいけない



武内 幸二郎 さん

太平洋戦争が始まる前、13歳まで高等小学校に通っていました。卒業後はレンズを作る工場で朝の6時から夕方の6時まで働いていました。そこでは毎月の給料はなく、5年間働いてやっと給料を頂けるというシステムでした。終戦の前の年、その工場で働いていたときに召集令状が来ました。

終戦時: 20 歳

この時、岩手県の盛岡郊外にいたのですが、入隊の前日は食べたり、飲んだりして自由に過ごしました。入隊当日に、健康診断を行います。それに合格しないと入れないのです。私は、健康だったため合格して入隊することになりました。初日の食事は、大豆入りのごはんが山盛りに出てきました。後々、戦況が厳しくなるにつれて、ごはんの量が少なくなっていきました。この盛岡にいた頃、家が3月10日の空襲で焼けてしまいました。そして3月26日に沖縄戦が始まっています。

5月1日、転属命令で熊本に行くことが決まりました。盛岡から2日間かけて蒸気機関車で移動しました。途中の水分補給は6回ほど。食事は大豆が袋に詰められているだけでした。熊本にいるときに広島で原子爆弾が落とされ、それから長崎にも落とされました。長崎の3日後くらいに上官から原子爆弾が落とされたことを教えられました。そして8月15日の終戦日を迎えましたが、これも知らされることはなかったです。20日になって、やっとポツダム宣言が発表されたことを聞きました。それと同時に解散

しました。

私は、東京が空爆で焼けているということを聞いていて、早めに帰ることになったのですが帰宅途中の橋が空襲でやられ、線路も曲がっていて帰宅するのがとても大変でした。東京に帰ってからは、工兵のときの元部隊長が焼け跡の整備をする工場をやっていたので、そこで働きました。私は銀座の整備を担当していました。その後、たまたま警視庁の前を通ったら消防官を募集していたので、簡単な試験を受けて合格し、21歳の頃、消防士になりました。

29歳まで消防士として働き、結婚して子どもを授かりました。家族のことを考えて銀行に転職し、定年まで働きました。日本の復興を目の当たりにしました。最後に未来の子どもたちに伝えたいことは「絶対に戦争はしてはいけない」ということです。軍隊に行った自分が言っているのだから本当のことです。あのまま原爆を次々と落としていたら、世界は滅亡してしまったでしょう。日本はこのまま平和であって欲しいと思います。



武内さんへのインタビュー

聞き取り

働くことが復興の原動力



野村 長八 さん 市谷台町在住 終戦時:13歳

太平洋戦争が始まったことをラジオで聞いた時、10歳だった私は「良かった」と思いました。まだ子どもだったので戦争になれば物資がたくさん



焼け跡に建てたバラックの前で母と 弟と野村さん。(左)



空襲の焼け跡。(市谷台町 13番地あたり)

入ってくると思っていたからです。戦争中は登録していた家には、お米などが配給されていました。基本的にはすべての物資が不足していました。しかし、私の家は八百屋だったこともあり、多少は野菜がありましたが、かぼちゃやさつまいもばかりを食べていましたね。なので、今では私はかぼちゃが大嫌いです。そのくらい食べていました。

それに戦時中や戦後は甘いものや塩とかは、無かったですね。戦争中の食事といったら、味よりも量を増やすことばかりを考えていました。開戦から終戦までずっと東京にいました。初めて東京が攻撃されたドーリットル空襲で家を失いました。

昭和16年頃から学徒動賞で軍需工場に行き、朝8時から夜6時まで毎日働きました。辛かったですね。昭和18年には空襲に備えて家屋を綱で引っ張り、壊していくという作業を市ヶ谷でしていました。私たちは学校から兵隊さんの指導のもとに、連れて行かれました。当時、市ヶ谷は軍部の中心地だったので軍人さんが多くて、かっこよくて憧れちゃったね。もうこの時から、私たちは軍人になる覚悟はできていました。

13歳の時にラジオで終戦を知りました。当時のラジオは雑音がひどかったので、何を言っているのか分かりませんでした。しかし、周りの大人たちから聞いて、初めて日本が負けたことを知りました。戦争が終わり、電気をつけて生活することが許されてホッとしました。焼け野原になっていたので四谷の方まで見渡せるようになり、実際に軍人さんが書類などを燃やしていたのが見えました。その時に改めて日本は負けたと感じました。戦争が終わりすぐに仮住まいで商売を再開しましたが、まったく野菜が入ってこなかったので、あまり売るものもありませんでした。昭和30年に家を新築してから、ずっと商売をしていました。

戦後は、寝る時間も惜しんで働きました。それが

日本の復興の力になっていったと思いますね。15時間働くのは当たり前でした。仕入れはずっと神田の市場にまで行っていました。それだけで足りないときは肥料を得るために、伊勢丹まで自転車でちりとりを持って、馬糞や牛糞を取りに行ったりもしました。家の裏は焼けてしまっているので、そこで野菜を育てました。

戦争の時は、私たちに正しいことを伝えてくれなかった。だから、正しいことをちゃんと私たちに伝えてほしいですね。今みたいに平和すぎても判断が鈍ります。平和についてもっと真剣に考えてほしいです。



野村さんへのインタビュー

聞き取り

ハングリー精神が、日本を変えた



百溪 文枝 さん 富久町在住 終戦時: 18歳

戦後私は、高円寺に住んでいました。焼け野原が 散在しているなか、高円寺駅の近くは、戦火を免れ、 小さい店が並んでいました。その中で、焼け跡から 集めてきたのでしょうか、焼け焦げたミシンの本体 が、店の屋根より高く山のように積んでありました。 ミシンを再生し、商売しようという先見の明があっ たのは、「イシダミシン」でした。

間もなく、店先には、金文字入りの"シンガー""蛇の目""三菱"等のミシンが並び、衣類の無い時代に自分で服を作ろうと求められ、飛ぶように売れて、人々

を楽しませたのです。

日本人は、ほっそりしているイメージだけれど、精神力はとても強いのです。なぜなら、ハングリー精神があったからなのです。お金のない人は、良い物を作らないと儲かりません。物はすべて、ハングリーでなければ作れないのです。

人は、実際に遭遇して実感を得るものなのです。 想像というのは、実感が伴わないために分からない のです。太平洋戦争が始まった時、私は14歳でした。 今はテレビがありますけど、この時代にはどこのお 家にもラジオしかないですから、戦争を目で見るこ とはありません。ですから、実感まで湧きませんで した。戦争中はパジャマなんて着ていられず、防空 頭巾を傍らに置き眠りました。

毎日、空襲警報で目が覚めているから、肉体的にも精神的にも辛い毎日でした。そして、アメリカ軍の飛行機が低空で飛来したので、私が宮城のお堀にある防空壕に飛び込もうとした時、ふと真上に見たアメリカ兵の顔が、人参の色に見えたのが、忘れられません。少し遅かったら、やられていたかもしれません。しかし、この話を聞いて、戦争はこうだったんだなと、戦争を言葉だけで理解することは難しいと思います。実感を得るためには反復することがとても大事なのです。

終戦記念日などで新聞に載る体験談の話し手は、 もう90代という人生最後の年齢を迎えています。次 の世代は、戦争について実感できないかもしれませ ん。実感はできないまでも、もっと進んで戦争につ いての本を読んだり、戦争の映画をテレビで放映し 人々の心に刻み込まないと、戦争の悲惨さは忘れら れていくと思います。何百万人もの同胞の死に、申 し訳なく、戦争はやってはいけない事を、繰り返して 語り合う必要があると思います。



百渓さんへのインタビュー

病院の中の戦争



吉田 ハナ さん 戸山二丁目在住 終戦時: 21 歳

今は平和に関心がある若い方も多いですし、いつまでも元気で戦争のない国であってほしいです。戦争っていうのは大変ですよね。今思っても「どうやって私は1人でやってきたのかしら」と思います。

私は大正13年生まれで、太平洋戦争が始まった頃は16歳。初めは開戦の実感はあまりなかったです。 しかし、食べ物や衣類の不足が深刻になり、空襲を知ることでだんだんと「戦争」を感じるようになりましたね。

昭和18年頃。今で言う国立国際医療研究センター (旧・陸軍第一病院)は、疎開して方々に散らばっていました。その中でも箱根には当時「三味荘」と呼ばれたホテルがあり、傷病兵の手当てをする場所になっていました。私たちはその近くの宿で寝泊まりしながら、看護婦として働いていました。看護婦の先輩からは「ここで勤まったならば、どこへ行っても困らない」といわれるほど、重傷を負った兵隊さんの病棟でした。大きな講堂にベッドを入れ、次々運ばれてくる傷病兵をそこに寝かせ、ベッドが足りなくなると床に寝かせました。毎日のように死者が出ます。

私は一生懸命働きました。当時は薬やガーゼ、包帯だって貴重品です。ギブスや手術後の汚れた物も、何度も川で洗って消毒して使いましたよ。それから看護婦に衛生兵や比較的元気な患者が付き添って、飯ごうを持って小涌谷まで歩いて泥を取ってくるんです。それを大鍋でコトコト煮て、白衣が破けたような布きれに塗ることで、シップ代わりとしました。

小田原が空襲で焼け、箱根も危ないと知った私は昭和19年に長野県へ疎開しました。そこで終戦を知り、東京へ帰るとそこも焼け野原でした。終戦とはいえすぐに身近な変化はなく、食べ物も衣類も不足したままです。お金も自由に使えないし、電話はもちろんありませんでしたから、電報を5回打ってやっと母の訃報が届くような時代でした。

戦後はアメリカから来た看護婦さんから、就業希望者向けの再教育を受けました。通訳付きのその講

義は、仕事が終わる夕方から夜にかけてのもので、受けない人もいましたが、私は何百時間と聞きました。 講義が終わった頃にできたのが第一回目の看護師国 家試験でしたので受験しました。当時の私たちは働 きながら勉強、勉強でしたよ。

戦中の国立病院は兵隊さんの病院でしたから、産婦人科と小児科は戦後にできました。私が産婦人科で働き始めたのはベビーブームの頃です。物が無いので調理場のはかりで赤ちゃんの体重を量ったり、やかんでお湯を沸かして洗ってあげたりと、初めはいろいろと大変なことがありました。勤務が終わると、野外でも友達と社交ダンスを楽しみました。河原のふちに蓮華畑がずーっと広がってとても綺麗でした。懐かしいですね。こういう時代もあったんですよ。



吉田さんへのインタビュー

聞き取り

軍隊が動かしていた世の中



字**賀村 源三** さん 百人町三丁目在住 終戦時: 25歳

昭和17年5月14日、横須賀海軍航海学校で信号見張を教わった私は、行く先も知らされず、横須賀の港から水上機母艦秋津洲に便乗して、外地へ向かっていました。乗船してから4日目、「信号担当である以上立ちなさい」といわれ、艦の一番前に立たされました。そこで、目の前に一瞬、潜望鏡らしきものが見えました。「前方に敵潜望鏡ひとつ!」と叫ぶと、艦長





昭和 16 (1941) 年 横須賀航海学校の仲間と上野にて。 (12月7・8日)

が「潜望鏡はどこだ、距離は何キロだ、方位何度だ」 というのですが、一瞬の出来事だったため、見失って しまったのです。本当に潜望鏡を見たとすれば優秀 な兵隊です。

そして、明日はサイパンへ着くという日に、本当の 潜水艦が出てきました。私は寝ていましたが、「潜望 鏡!」と叫ばれ、一斉に起きて見張りをしました。そ こで、艦尾すれすれに過ぎ去った敵魚雷を見たので した。たとえ前日に私が見た潜望鏡がイルカだった としても、あの準備がなければ、どうなっていたか分 からなかったと思います。

20歳から24歳という青春の真っ只中の4年間、私はラバウルで戦争を経験しました。海軍が3万人、陸軍が6万人ほどいたので、海岸べりにあった山のような食料は減り、2・3年すると一食がさつまいも2本ほどになりました。ラバウルは芋がよくできる土地なんです。山が噴火する火山灰のお陰で、年に3回ほど



昭和 17 年ラバウルにて

芋が作れました。救われました。お米は山の洞窟を掘って、最後の決戦用に残しておいたようです。終戦になってから持ち帰ろうとしましたが、みんな虫に食われていました。お米もカンパンも防空壕の戦場ラバウルの様に穴だらけ、内地はもっとひどいのだと思いしっかりと抱きしめて復員しました。

終戦時には、ラバウルで食べるために畑を耕していました。そんな時、上の人から終戦と聞かされました。嬉しかったけれど、戦争が終わったら捕虜になるわけです。「そう簡単には帰れないよ。帰ったところで何もないけれど、あと5年は帰れないから覚悟しておけ」と言われてガクっとしました。しかし、案外早く帰れました。内地に戻ったのは、日本を出発してちょうど4年後の同じ月日である昭和21年5月14日でした。船は、リバ艇18号、名古屋三井埠頭に帰港しました。

戦争は国がやめるといえば、いつでもやめられた と思います。日本人の男として、戦わなくちゃしょ うがない。やらないでいれば自分が殺されるだけの ことですから、やらざるを得ないのですね。そう思っ ていました。国の統制についても、上から言われた ことはやらなければならないと思うだけでした。良 い悪いでなく、勝たなくちゃいけない。あの当時は 政治でなくて、軍隊が動かしていた世の中だったん です。



宇賀村さんへのインタビュー

叫ぼう「戦争はしない」



近藤 滋子 さん 大久保三丁目在住 終戦時:13歳

戦後70年を迎えたさいたま市。新都心として発展 していく大宮の地にも戦争の傷跡、そして心の傷が あることを、私は忘れることが出来ない。

それは、昭和20年4月13日夜半から14日にかけ B29の襲来を受けた。大宮駅前の一角に居住してい た私達家族にとって戦争がいかに悲惨であることか を物語る体験であった。

軍需工場を目標にされた流れ弾が住宅の中心地に 落下。防空壕より目に入ったのはB29の爆撃により 焼夷弾が次から次へと花火のように散り、瞬間に火 の海となっていく様子。真っ赤な波になって押し寄 せてくる火。病弱な私は、ぼう然と立ちつくしてい た。防火用貯水槽に竹竿に雑巾をしばりつけたバ ケツリレーの消火訓練は何の役にもたたなかった。 幸い隣の土嚢のおかげで火はくい止まった。振り 返った我が家は、全ての柱は真っ黒にただれ落ちて いた。畳を何枚も何枚も積み重ねての生活。「命が 助かった」「良かった、良かった」という両親の声に 「ハッ」とした。大宮空襲の前の3月には、東京大空襲 があり、毎日東京の空は真っ赤にただれたようにな り、駅からは焼けただれた裸足の人、手拭いで顔を かくし足を引きずっている人、目は力なく、ぼう然と 歩く地獄から来たような姿を見て「これからどうなる のか」と恐怖の毎日でした。

私の青春は、毎日が軍事訓練、薙刀、竹槍、草刈りにと。そのうち校庭は畑となり、積み上げた枯草に 汲み取りの肥しを混ぜ、手で叩きながら四角の黒い 山をいくつも作った。

毎月15日は隊列を組み「必勝」の鉢巻をして神社に「日本は神国だから必ず勝つ」「打ちてしやまん」「八数一字」すべて「勝つまでは」の合言葉でガマン、ガマンの時代だった。軍人が一番偉いと言われ、敬礼が遅れたということで上官は怒り、往復ビンタがとんだ。倒れた兵隊さんには手を出せない、人が人を変えてしまう恐ろしさ。「大陸の花嫁さん」と騒がれ、満州開拓団の慰問袋で文通し応募した友達の姉は、満州開拓団の慰問袋で文通し応募した友達の姉は、

満州に渡ったが、その後音信不通となったと泣き崩れる母親の姿に小さな胸が痛んだ。畳を積み上げたような生活の中で8月15日の終戦を迎えた。「戦争は終わった」「日本は負けた」ということが判ったのは、何時間か後であった。仕事の好きな父が「満州の株は紙クズになったなぁ」とつぶやく厳しい横顔に、これからの苦しい生活を暗示されたように私の心に響いた。

すべて配給制度の中で、裁判官が配給制度を守り「餓死」したことにショックを受けた。さつま芋のツルが、一番のご馳走だった思い出。物々交換でやっと手に入ったお米のおにぎりの味。戦争は人を悪にし、不幸にしていく。戦争は絶対に起こしてもならないし、戦争を仕掛けてもならない。

人間が人間として最も人間らしく生きていくため に。叫ぼう「戦争はしない!」

新宿に54年、縁あって特攻隊志願だった夫と共に 80代を元気に迎えられたことに感謝して、1日1日を 大切に生きていこうと心に決めた戦後70年です。

寄稿

特攻隊(写真について)



近藤 伸一 さん 大久保三丁目在住 終戦時: 15歳

新潟県から3次もの試験をくぐり、憧れの7つボタンの特攻隊に入隊した。奈良の訓練場で厳しい訓練に明け暮れ、昭和20年8月上旬には出撃前最後の姿として集合写真を撮り、形見としてのツメ、髪の毛、遺書を集められた。





しかし、出撃する直前に8月15日の終戦を迎えた。 特攻隊は、当時の男子にとって憧れの存在であったとは言え、徴兵によって入隊した人とは違い、入隊 を志願した当時の自分については、現代の人に理解 しがたいだろうと思い、このことを妻にも話したことがなかった。

このたびの「新宿区平和都市宣言30周年記念誌」作成のための体験記等の公募を契機に、初めて写真にまつわる話をした。



寄稿

来陽において戦友の死



松下 武夫 さん 新宿六丁目在住 終戦時: 24歳

私は当初、 たい (※1) に駐留していて、軍の作戦命令により、「湘桂作戦」に出陣し、その一環として来陽(※2) に進軍した。

昭和19年8月8日早朝、来陽に急進した野砲三第二 大隊第四中隊が、来陽北方入口付近の十字路に進ん できた時、先頭に立って中隊の陣地侵入を誘導中の 指揮小隊長〇少尉が、敵弾を胸に受け、壮絶な戦死 を遂げた。

同じ8日午前6時ごろ、第五中隊は、来陽北方郊外の台地に陣地進入し、すでに国民軍の精鋭部隊と戦闘中の歩兵第68聯隊、同第34聯隊を支援協力する態勢にはいり、前進観測基地を設置するための指揮小隊長であった私は、観測のN上等兵、通信のW上等兵を伴い、南側の傾斜地を匍匐前進して下った。

10メートルも進まぬうち、城内から敵のチェコ製機関銃の激射を受けて、私は負傷(左大腿部ほか貫

通、衡陽の野戦病院に入院)。

続く、N上等兵は、砲対鏡を背に負い、また、W上等兵は線巻機を背負ったまま一声、二声「天皇陛下万歳」を口にし、壮烈な戦死を遂げた。

また、砲側では、砲手のS上等兵が、狙撃されて即 死した。

銃弾の飛来が激しいため、死傷者の手当ては出来 ずに、夜間を待ってから死傷者は収容された。

<松下さんのお話より>

戦争は、人を殺すか自分が死ぬかの中で、自分が 生きるために、人を殺すことになります。戦争は、愚 かなこと。戦争はしてはいけないと強く思います。 平和を願います。

松下 武夫さん (95歳)

昭和17年名古屋野砲兵第三連隊原隊に入営。 昭和18年夏、中国の応山に駐留する本隊に配属。 昭和21年2月復員。

※指揮小隊長は中隊の先任将校で中隊長を補佐し、 観測、通信を主な任務とします。中隊は、兵150人、 馬70頭、砲2門(平時は4門)の2個小隊と、段列小 隊の編成です。野砲隊は、馬部隊で、馬と寝食を共 にし、共に戦った仲です。この愛馬たちは、上海で 接収され、その後どうなったか。安らかな眠りを願っ ています。

※1…現在の中国湖北省随州市広水市付近 ※2…現在の中国湖南省衡陽市耒陽市付近

聞き取り

戦争で努力は報われない



谷川 博司 さん 高田馬場四丁目在住 終戦時:16歳

昭和12年の日中戦争が始まった時、通っていた銭 湯で日本の状況を聞きました。ラジオでは景気のい い話が多かったですが、お風呂の隅で「大人たちがい よいよ始まるぞ」とひそひそ話をしているのを聞い て、その時から、子どもながら緊張を感じていました。太平洋戦争が始まった年は13歳でした。学校に行こうとしているとラジオが流れました。その知らせを聞いて、びっくりしたのと、いよいよかと思いました。

初めての空襲のときは早実の2年生でした。たまたま掃除当番だった私は、いつもとは違う飛行機が飛んでいるのを見つけました。その途端ドカンという音がして焼夷弾が落とされました。天井を突き抜けて、私たちのいる2階の床も突き抜けて1階に落ちました。下にいた一年生は、モップやほうきで火を消していたのを憶えています。それがいわゆるドーリットル空襲でした。これは聞いた話ですが、隣の早稲田中学校では校庭で遊んでいた1人の男の子に焼夷弾が直撃し、即死したということもあったそうです

私の家はパン屋をしていたので食べ物に困ることはありませんでしたが、4月13日の空襲で家が燃えてしまいました。幸い残っていた隣の家を半分借りて暮らしていました。その1ヵ月後にまた空襲がありました。父が私に荷物を乗せたリアカーを曳かせ、早く逃げろというので一生懸命逃げました。火が収まり家に帰ってみるとすべて焼けていて、がっかりしました。

その後は勤労動員で土浦に行きました。そこで食べ物が無く、私は栄養失調になりました。父にハガキを出すと、心配した父が連れ戻しに来てくれて、愛知に私を連れて行ってくれました。昔は東京の人が田舎に疎開してくると親戚には邪魔者扱いされまし

「空襲に追われて」
谷川さんの戦争体験画





た。ずいぶん辛い思いもしました。それが終戦間近 の昭和20年のことです。

終戦後は東京に帰って、パン屋を再開させました。お客さんから小麦粉をもらい、その分パンを焼いて渡すというようにしていました。戦時中より戦後のほうが、食料が少なく、特におかずが足りなかったので、家の裏庭でかぼちゃを育てて食べていました。本当に戦争中は最低の生活でしたからね。

戦争は、努力も報われないのです。こんなばかば かしいことは、今後は絶対にしてはいけない。この 戦争が始まったのも軍のプライドなど、小さな意地 の張り合いから生まれたんじゃないでしょうか。意 地を張ってもいいことは何もないです。どんなに労力を費やしても報われないことが戦争だと思います。話し合って和解することが一番の解決方法だったのでは、と私は思います。



聞き取り

平和への課題



辻 彌太郎 さん 高田馬場四丁目在住 終戦時:16歳

太平洋戦争が起きた昭和16年は、12歳で中学生でした。太平洋戦争が始まったことは家のラジオで知りました。学校では友だちと、「とうとう戦争が始まったな」などという話をしました。戦争中の暮らしは、さほど普段と変化はなかったように感じます。学校では授業で「三八式歩兵銃」の訓練をしたり、現在の早稲田大学理工学部がある場所に射撃場があったの

で、本当の弾を使って練習したこともありました。

戦後、そこには米軍の兵隊さんも来ていました。 でも彼らはカービン銃を使っていて、日本とアメリカの差を感じました。ほかには、三八銃を持って10 キロ歩かされたりしたこともありましたよ。当時は、 10キロなんて軽いものでした。

そして海軍飛行予科練習生(通称:予科練)で飛行機の訓練をすることができました。予科練では、毎日操縦訓練を行い、卒業生は飛行機乗りとなって特攻に行くのです。お国のために死ねという隊長がほとんどで、私の友人も3人亡くなりました。しかし、隊長の中には生きて帰ってこいという方もいて、帰ってきた友人もいました。

戦争中よりも戦後のほうが食糧難はすごかったですよ。当時の主食は、かぼちゃやさつまいもでした。とにかく食糧の調達には最善の努力をしました。さつまいもの葉は甘くておいしかったけど、カボチャの葉はどうしても食べられませんでしたね。電車で食糧を買いに行くこともありましたが、帰りに検問に引っかかってしまうこともしばしばあって、そのときは本当にショックですよ。仕方ないとは思いますが。でも、学生服を着ているとまれに通してくれたことがありました。やはり食べ盛りの時期に、十分な食事が取れないことは辛いことだったし、当時の学生は今と違って勉強より体力づくりだったから、エネルギーになるものなら何でも食べるのが当たり前でしたわ。

そして終戦の時は、中学校を4年間で卒業して大学に入学した年で16歳でした。そのときは、天皇陛下のお言葉があるという情報が世間で流れていました。なんとなくだけど自分の中で「戦争が終わったのかな」など考えていました。天皇陛下から終戦のお言葉を聞いたときは、ホッとしましたよ。でも、良かったと喜ぶ人はなかなかいませんでしたね。そういえばテレビドラマで戦争の物語を観ると、戦地に行く兵隊たちを送るときに涙を流したり、泣き崩れてい



辻さんへのインタビュー

る描写がありますが、そのような光景は見たことないです。むしろ、「お国のために頑張れ」と応援している人が多かったように思います。

若い世代の方々に伝えたいことは、「自分の身は自分で守る」ということです。平和を続けていくには無関心では続かないと思います。戦後70年1度も戦争をしていないというのは、平和憲法があるから平和を守っているのか。それとも、ほかに理由があるからなのか。これは、今後のみんなで考えなければいけない課題だと思いますね。

寄稿

輸送船に乗って

西尾 合子 さん

高田馬場三丁目在住 終戦時:20歳

私の家族は5人で現在の練馬区に住んでいました。弟が早大に合格し、本人は大変喜んでいたのですが、父が学を登り置で連れていかれるのがイヤで、退学させて疎開先へ連れていました。そして、後用命令で満州四平街に出発してしまったのです。父はガッカリして「俺は満洲へ行く」と言いだし、偶然隣組に満鉄の上層部の方がおられ、父は満鉄の社員になってしまったのです。

当時、毎日、昼も夜も空襲でいつ命がなくなるか わからない時なので、私達4人で満州へ行く事にし ました。

8月8日に新潟港から乗船したのは、「空知丸」という4千トンの船でした。石炭船なのでゴザ1枚3人座ることしか出来ないで、トイレは板囲いでした。食器が無いので洗面器で食べました。おみおつけは、石鹸箱で飲みました。船は、4日間で朝鮮の売前に着いて、列車で満州へ行くコースでした。先に出発した弟は、下関で船が沈み漁船に助けられ東京に帰っていました。翌日9日にソビエトが参戦して日本海は戦場になってしまいました。「空知丸」は潜水艦に追われ、船尾から爆弾を投下して逃げ回りました。一緒だった輸送船は水柱とともに、皆沈んでいき、「空知丸」だけになりました。私たちも終わりだと思いました。

7日過ぎた日、船長から皆集まるように言われました。「我々は米英の前に膝を屈した」と言われ何のことかわからなかったのです。「負けたのだ」皆泣きわ

めき、海に飛び込む人たち。地獄になりました。船 ごと連れて行かれ殺されるのだと思いました。

そして2日後、船長から「福井県の敦賀港に帰る事になった」と言われ、日本に帰れることを知り、本当に嬉しかったです。

あの船の生活を考えれば、何事も我慢できるといつも思っております。たくさんの人々の犠牲で生きてこられたのです。ありがとうございます。

寄稿

私の戦争体験記



牧田 有史 さん
西早稲田一丁目在住

私は、昭和19年4月、中等学校4年生になった。その4月初めに「学徒勤労動員実施要領ニ関スル件」が発令され、私の学校では、国鉄貨物駅3駅に同級生が分散して赴いた。

私は立川駅チームの一員となり、立川駅周辺の軍 事施設への軍需物資の出し入れを行い、トラックの 上乗り作業員として毎日勤務していた。

同年11月のある日の午後、国分寺・資材庁への納入仕事を終え、立川貨物所へ帰る途中でB29、1機による空襲があった。そのB29は我々がいるトラックの頭上1万2千メートル位であろうか、超高度での飛来であり、そのB29が飛び去る後には白い飛行機雲が延々と長く尾を引く敵機の姿を見て悔しい思いは強くあるが、秋空高く真っ青な空に白く流れ行く帯雲と、太陽の光を浴びてキラキラ輝く機体は、それこそ美しき絵画そのものである。

悔しい思いで見届けている最中、同じ高さでピカッと光るゴマ粒ぐらいの大きさの物体がB29の進行方向の正面に向かっていく物体を発見。トラック上の8人は目をコラして見つめているうちに日本軍用機であることが解り、B29に対して真正面からの体当たりをかけているのである。我々一同が空を見上げる最中に起きた劇的なシーンで、まさかの現実を見た瞬間である。8人全員は、「ヤッター!万歳、万歳」の声高らかに叫んだのである。日本機は残念ながらバ

ラバラに空中分解して落下し、機体のひとつ、ひとつがハッキリと見えて落ちゆくが、B29は平然として飛び去り、遠くにある東京方面の雲間に入り視界から消え去ってしまった。

日本機のバラバラになって落下していく機体の中から、白く細長い物体が一緒に下へ下へと落ちていくのを我々一同が眼をこらして見つめていると、パイロットが着用するパラシュートであることが判明。今までの喜びの声は悲鳴に変わった。「開け!開け!」の大声で叫び続けるが、パラシュートは開かずに遠くの森かげに消えてしまった。

これこそ、特別攻撃隊(特攻隊)が行う生の姿を直 視したのである。この特攻隊員が行った現実、生の 人間がお国の為、一途に死を覚悟して突っ込みゆく、 清く美しい一瞬の出来事の姿を見届けたのである。 決しておろそかにしてはならない尊い姿である。

後日、その開かぬパラシュートのご当人である英雄は、国分寺・資材庁の奥地にある森林で発見され、所属する航空基地の人々によって引き取られていったとのことである。そして、体当たりをかけられたB29は東京湾に墜落したとの報道がある。

この件については、私の上級生である5年生が、勤労動員によって三鷹の中島飛行機工場に出向していたその場所でも、同級生数名の人達が、その体当たりの現場を確認していたと私に知らせてくれた。合掌。

聞き取り

戦争反対なんて当たり前のこと



白根 光子 さん 上落合一丁目在住 終戦時: 22歳

私は大正12年生まれですから、昭和15年の3月には高等女学校を卒業しました。だから、太平洋戦争が始まった時は18歳だと思います。まだ子どもで、まして女の子だったから、これが「大変な事になる」っていう自覚はなかったですね。終戦は昭和20年ですから、私は22歳。この頃にはもうすでに学校の先生になっていました。昭和23年に結婚するまで小学校に勤め、集団疎開に参加しました。

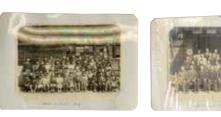


校長先生が作った疎開誌を未だに持っています。 疎開先の群馬県にある宿「梨木館」に因んで「梨木」と いう本です。校長先生をはじめ先生たちがこれから 始まる疎開生活について、ここに寄せ書きしました。 私も書きましたよ。

小学6年生は3月に卒業なので、中学校へ入れるための書類の準備のため、6年生の担当だった私は東京大空襲の2日前に東京へ帰りました。そこで空襲に遭い、そのあと次の学年の担当になったので、また疎開先へ向かいました。

私は子どもたちと1年2ヵ月の集団生活をしました。疎開に行くといっても低学年の子は分からなくて遠足気分だから、一週間もすると泣いて泣いて、大変でしたよ。疎開先の生活は朝5時半起床から始まり、朝礼や勉強をします。ご飯は寮母さんが世話をしてくれて、入浴は夕方4時になると変わりばんこに入ります。夜8時にはあかりを消しちゃうんだから。そんな中で農家のお家にお泊りをしたり、まきを運んだり、秋には遠足もしました。

終戦の日。大きな旅館でしたから玉普放送は、子 どもたちと一緒に疎開先のラジオで聞きました。聞 いたときはただ動けなかったですよ。1・2年生は 大泣きする。4年生の女の子から「先生、日本は負け ちゃったんだから大沼へ行って皆で死んじゃおうよ」 と言われたんです。その時、私は「あんたたちが死ん じゃったら日本はなくなっちゃうんだよ。だから、こ







昭和21年秋の遠足(当時1年生)

れからの日本はあんたたちがどんなに辛くても、生きてかなきゃならないんだから。死ぬなんて考えちゃダメ」って論したのを覚えています。唯一幸せだったのは疎開先から帰って来たとき、子どもたちの親御さんが亡くなったとか、そういう話がなかったことです。

戦後、先生を始めてから、子どもたちの食糧事情の悲惨さは身に染みました。子どもたちに食に対する作文を書かせたときは泣きましたね。自分は一人娘だったから、子どもたちがこんなにひどい生活をしているなんて知らなかったんです。戦争は確かに悲惨だった。でも戦争反対なんて当たり前のこと。賛成する人なんていないんだから、なんで声高に言うのか。私には分からない。戦後日本を守ってきたのは、当時の若者の力だと思います。戦争を経験したおばあさんが言うんだから、今の若い人たちには今の時代の贅沢さ、幸せさをもう少し噛み締めてほしいなと思いますよ。



白根さんへのインタビュー

寄稿

愚かさが判らない困った人たち



中島 悦子 さん 下落合三丁目在住

敗戦の日、私は隣のケイコちゃんの家に行った。「戦争終わったね」「うん」「もうB29来ないね」空を見上げると、抜けるような青空にぽっかり2つ夏雲が浮かんでいた。

その時12歳の私は、戦死した父は無駄死にだった と思った。

その日まで「日本は神国だ」「負けた事のない国だ」「最後には逆転して必ず勝つ」と信じ込まされていた。日本は勝つはずだと信じて始めた戦争だろうか、騙されたあの時以来、私にとって我が国はこの国になった。

残された遺族にとって、毎日が辛酸の日々となった。それは、今日まで続いている。理不尽な世間の冷たい視線を浴び、不幸をもたらす疫病神のように嫌われた。人々は戦争を1日も早く忘れたいようであった。だから私は、最近まで口を閉ざして語らなかった。

自分の死の意味も判らぬまま、死地へと追いやられた人々の声は、無念と悲しみに地鳴りのように地底からのぼってくる。私は父の最期を想像する。

どこでどう間違ってしまったのか、その理由を知らなければならない。それが死者への供養となる。私のつたない古代史研究も、40年を超える。これは死者への鎮魂の祈りである。人間はどうしてこうも馬鹿なことを繰り返すのだろう。人間の愚かさは底無しだ。ダイナマイトの側で線香花火。否、大都会は一瞬にして原子野に変わる。その想像力がもう失われている。

戦争は遊びではない。そして死ぬのは庶民である。残された未亡人、遺児たち、息子を失った親、兄弟、3・4世代を悲痛な運命へと突き落す。その悲劇は計り知れない。

寄稿

町内で集団疎開

古庄忠雄さん

下落合二丁目在住終戦時:5歳

1945年5月25日の大空襲の夜はとうとう帰宅できず、大倉山の松林で野宿。翌朝奇跡的に焼け残った自宅に戻った。

だが、そのまま住み続けるのは危険だとの理由で、 女・子どもは、役所の命令で集団疎開をさせられる ことになった。田舎のある家族は、とっくに疎開を 済ませていた。

町内に残っていた同じような家族は、群馬県北部 にあったお寺に移住した。7月初めのことだった。 母と妹・弟が一緒で、4人は数家族とともに、寺の庫 神での共同生活が始まった。

記憶に残っている映像は、群馬の山々、榛名に赤城、そして、眼下を流れる吾妻川。仕切りもない共同トイレや滅多に番が回ってこなかった狭い風呂場とか、不便さこの上ない日常生活だった。

食事は、主食はジャガイモ混じりというよりも、イモに米粒が少しくっついているといった粗末な代物だった。地元の農家の方々は親切で、もらい風呂をしたり、旬の果物を頂戴した覚えがある。

学童の集団疎開についての記録は少なくないようだが、私達のような町内での集団疎開については、経験者が少ないのか、記録を目にしたことは一度も無い。

幸いなことに、間もなく敗戦を迎え、一家は焼け 残った自宅に無事に帰って来た。群馬の冬はとても 厳しい気候なので、その前に帰京できて良かったと 思う。

翌年4月に、落合第四小学校に入学した。入学式 に晴れ着姿の同級生はほとんどいなかった。

表紙どころか、製本していない粗末な教科書で「読み方」や「算数」の授業を受けた。何もかも足りなくて、ひどい食糧難に加えて、学用品も粗末だったし、着る物さえボロを繕ったような代物だった。本当に貧しい時代だった。

同じ疎開経験をした女子と同級になったが、群馬 での生活を話し合うことは一度も無かった。

その後、群馬県には何度も行く機会はあったが、 あのお寺を訪れる機会は二度となかった。寺の名前 も正確な場所も忘れてしまったし、同行した母も亡 くなって久しい。

現在、落合第四小学校や落合中学校の同期会が定期的に開かれ、当時の事を話題にし合うのだが、大空襲の夜に落合地区に住んでいた者は一人も無く、集団疎開の事を知っている者もいない。

寄稿

戦中・戦後 あれこれ(思い出すままに)



堀尾 慶治 さん 下落合四丁目在住 終戦時:16歳

昭和20年4月13日の空襲で、洗い場(道沿いの湧 水の所に造られた洗い場で、近所の人達が共用して いた)の崖の上のちょうど階段上、左側の3軒が焼夷 弾の直撃で炎上。3~4メートルの路地と、炎上して いる家の庭を入れると対面の家の板塀まで10メート ル以上離れていましたが、輻射熱で塀が煙を上げ始 める火勢です。消火活動と言ってもわずかな水も無 く、布でたたいて燃え上がるのを防ぐだけです。当 時ほとんど断水状態が続いていたので、消防車など 居るわけもなく、ただ布で叩いて見守る事しか出来 ません。当時働き手の男性は、50歳前後か私達中学 生。家の間隔が昔は離れていたのと、樹木で守られ 風が弱いため、直撃を受けた家以外の類焼は免れた と思います。消防の放水で助かった所など何処にも ありません。装備、水、総じてどうすることもできな かったのです。

我が家は、運よく焼夷弾の直撃を免れました。そ の代り、家が雨漏りするようになりました。調べた ら、屋根に焼夷弾の尾翼が刺さっていました。ご存 知ですか? 焼夷弾は、寸法は覚えていませんが、直 径10センチ大、長さ60センチぐらいの単体が、60本 位の集合体で、それが鉄の留板と帯で3段に東ねら れ1個の大型焼夷弾になっています。それを投下中 に空中で散乱させ落ちてくるのです。その尾翼部分 ですから相当大きいものになります。それが屋根に 突き刺さっていたのです。それと、鉄の留板も多数 落ちていました。終戦後まで記念に保存していたの ですが、戦後の食糧難の時にくず屋に鉄くずとして 良い値で売られ、お腹に収まってしまいました。今 思うと、「記念品にしておけば・・」と残念です。 そ の焼夷弾は、日本の木と紙でできた家の為に開発さ れ「モロトフのパン籠」というニックネームがついて いたように記憶していますが・・。

そのパン籠から焼夷弾がバラ撒かれると、ちょうど線香花火の様に、沢山の火の玉が夜空からフリフリしながら降ってくるのです。その上には探照灯に浮かぶB29の編隊、下から撃つ高射砲も届かず、それも打ち上げ花火のように夜空に彩りを添えてくれました。見上げている我々は、楽しむどころではなく、いつ自分達の頭上に焼夷弾が落ちてくるのかハラハラしながら見ていたのです。

私はどういう訳か、空襲には縁があります。

最初は、昭和17年4月18日、日本が始めてアメリカの艦載機B25による空爆を受けた時、私は中学2年。ジフテリアにかかり、小滝橋にあった隔離病院の豊多摩病院に軽症のため入院できず、早稲田鶴巻町の岡崎病院に入院させられました。午後、空襲警

報も出ないうちに小型爆弾の洗礼。火災も起きていたので急遽避難。岡崎病院も被害を受け、屋上に干してあった私の中学の制服が焼ける被害を被りました。早稲田上空に飛来したのは1機ですから、それほどの騒ぎにならず、私も詳しい情報も持たずじまいでした。これも残念です。

次は、昭和19年7月に、サイパンが陥落し、11月からは本格的な本土空襲の幕開けです。最初に来たのは私達中学4年生の勤労動員先の中島飛行機の武蔵野工場。三菱と並ぶ東洋一の主要飛行機エンジン工場です。警戒警報の中、工場の食堂で食事中に突然の爆発音。1トン爆弾の洗礼、サイレンが鳴り、「空

襲だ!」との叫びに、皆地下道に避難。一緒に動員で来ていた府立六中の生徒が避難していた地下道で、死者のでる被害を受けたそうです。帰ると、途中、工場の周辺には多数の1トン爆弾の20メートル位のすり鉢状の穴が、爆発の凄まじさを物語っていました。



私たちの下落合

寄稿

面会

重鍋 重命 さん

下落合四丁目在住 終戦時:11歳

父が面会に来た。二人だけで面会室にはいる。お 土産はオムスビ・ふかし芋。食べ物を面会室の外に 持ち出すことはできない。見つかると先生に没収さ れる。小さくなっている胃袋につめるだけ詰めこむ。 ほおばりながら父の話をきく。「上野駅から地下鉄で 浅草駅。浅草から東武線で栗橋駅。栗橋から東北線 に乗りかえて小山駅。小山で水戸線に乗り換えて稲 田駅。」いま考えると、すごく遠まわりをしている。 政府が通達した旅行制限で長距離切符が手にはいら ないのだ。乗りつぎ乗りつぎできたのだ。

「母さんも元気だよ。Hもね。」父や母と一緒に暮らせる弟のHが急に憎らしくなった。

「なんで、僕だけ此処にいなければならないの」疲れて帰るションボリした父の後ろ姿を参道の外れまで追いかけて指切りさせた。「また来てね。きっとだ

よ。男の約束だよ」父のゴツイ小指はアカギレでヒビ 割れていた。

ある時、お腹をこわして下痢がひどくなった。トイレに間に合わなくてパンツを汚した。洗濯は寮母さんがしてくれるが、ウンチで汚れたパンツを他人にみせられない。風呂敷に包んで竹行李に隠した。しばらくすると竹行李からすえた匂いがしてくる。匂いでみんなにバレないだろうか。匂いのする行李は世界中で一番気にかかるものになった。そんなところへ母が面会にきてくれた。荷物棚のまえに連れて行き行李をあけて見せる。母はだまって風呂敷包をとりだし、汚れたパンツをそっと洗濯してくれた。

「がんばってね。東京でもみんながんばっているからね」別れの時、僕の頭をなでながら涙声でいう。でもなぜ泣くのだろう。一番気にかかることが解決して嬉しいのに。とっても、とっても嬉しいのに。

S君に面会が来た。差し入れの肝油をみんなに見 せびらかして食べている。肝油は薬だから面会室か ら持ち出しても良いのかな? 甘い肝油は甘味料じゃ ないか。それに見せびらかさなくてもいいじゃない か。シャクにさわった僕は、部屋に誰もいないのを みはからって、S君のカバンから肝油を取り出し、隣 のカバンに隠した。お寺の娘さんに僕たちと同学年 の子がいて、東京の小学校の方がよいと思ったのか 転校してきた。昼間だけ僕たちと同じ部屋にいる。 そんな彼女を僕たちは「カラス」と呼んで嫌ってい た。いつもお母さんのそばにいられるのを、ヤッカ ンでいたのかもしれない。たまたまS君の肝油を隠 したのがカラスのカバンだった。まさか先生にいい つけないだろうと、たかを括っていた僕の思惑は見 事にはずれた。S君はA先生にいいつけ、A先生がみ んなの荷物しらべをしたのだ。カラスのカバンから 肝油がでてきた。カラスは肝油を盗んだと身に覚え のない濡れ衣をきせられてしまった。カラスは稲田 小に転校してしまった。「ごめんねカラス。でも貴方 のカバンだとは知らなかった」「先生、ヒイキだよ。 肝油は食べものだよ。なぜ没収しないのし

職員室に用事で入ったとき、先生の机の上に真っ 自なパンが一斤載っていた。誰かが面会室の外にも ちだして没収された食パンだ。蒲箇に入っても、そ の食パンが目に焼きついて離れない。あの机の上の フワフワの食パンはどうなっただろう。まだ机の上 にあるのかな。「ちょっと触ってみたいな」誘惑に負 けて蒲箇をぬけ出して職員室にいく。障子の前でた めらう。「触るだけ。ちょっと触るだけだぞ」そう自 分にいい聞かせながら、障子をソーッと開けた。「誰 だっ! 「電灯が点く。職員室には、いちばん怖いT先 生が寝ていた。長いお寺の廊下を夢中で逃げる。首ねっこをむんずと掴まれ、廊下を引きずられながら、職員室へつれてこられた。「これは、ビンタだ。いや、ビンタだけじゃすまない」覚悟した。悪いのは僕だ。どうされても仕方ない。 T先生は僕を冷たい畳に座らせると、意外にも「ここで全部食え」白い吐息とともに一言いうと。僕に背を向けて横になり、蒲節をかぶっ

た。寝まき一枚 で寒さに震えな がら、胸につかえ る一斤の食パン を涙のスープで 食べた。

「僕たちの戦争」 学童疎開 落合 第四小学校 眞鍋 重命編より)



DVD「俺たちの戦争」

聞き取り

目に映る炎



鳥海 はる子 さん 上落合一丁目在住 終戦時: 22歳

開戦当時18歳だった私は、下落合の近くにあった 軍需工場で働いていました。といっても、工場勤務 ではなく、丸ノ内にある東京営業所でタイピストを していました。ラジオでなんとなく戦争が始まった と聞きましたが、その後に流れてくるのは、都合のい い情報ばかりでしたね。

昭和20年3月10日、下町に焼夷弾が落とされました。私は、少し高台になっているところから、材木の上に乗り、空襲を見ていました。非国民だ、と言われるかもしれませんが、その光景を見て「キレイね、まるで花火みたい」と思わず口にしていたのを覚えています。

昭和20年4月15日、私はこの時上落合三丁目に住んでいました。この日、私は、焼夷弾の被害に遭いました。姉がいたのですが、山梨へ疎開していたので、両親と私の3人でした。初めは東中野の中央線



落合銀座にあった鳥海商店 (燃料店) の様子。





周辺を狙っていたのだと思います。私の父は警防団に入っていたので「まだ大丈夫だと思うが、その時は母さんを頼む」と言って、上落合の町会の人たちのために、詰所の方へ行ってしまいました。

しばらくして、空襲警報も警戒警報も解除されましたが、当時消防車やかける水なんてありませんでしたから、落合銀座の商店街の片側一帯は、家屋が強制疎開されてしまい、家をつぶして、火事の延焼を防ごうとしていました。狭かった道が広くなり、私の家は、その通りに面したところにありました。一度母を連れ原っぱへ逃げたあと、まだ焼けていない家へ戻り、アルバムだけを持って母のもとへ戻りました。母には「着物の一枚でも持ってくればいいのに」と言われてしまいましたが、私にとっては、これが自分の財産だったのです。再び家のほうへ行き、目の前で自宅が焼けていくのを見ていました。その後、雨が降り出しました。

終戦のことは、軍需工場に勤めていたし、常に将校さんみたいな人たちがいたので、あまり口には出さないけれど、負けたんじゃないか、というのは噂で耳にしていました。ラジオで天皇陛下のお話を聞いた後のニュースで、ハッキリ終戦と分かりました。内心、終わって良かった、やっと自由になれる、と思



鳥海さんへのインタビュー

いましたね。

教育 動語は今でも暗唱できます。全部とはいいませんが、「爾臣民父母ニ孝二兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」この部分は、常日頃自分たちの心に記憶しておかなければならないことだと思います。

寄稿

戦後70年平和への決意 〜戦争をしない国になってほしい〜



佐久間 國三郎 さん 北新宿三丁目在住

「東京大空襲下町地区」1945年(昭和20年)3月10日未明、現在の「墨田区」「江東区」「台東区」などが、325機のB29の焼夷弾投下により、一夜で、10万人以上が犠牲になった。当時淀橋区(現新宿区)に家族10人が暮らしていた。2人の兄は兵隊に、弟妹2人は集団疎開していた。私は15才で、戦闘機の部品を造る町工場で働いていた。

祖母が深川区牡丹町に住んでいたので、3月10日 の空襲の翌日に、母の命令で、私は深川に祖母を捜 しに行くことになった。国鉄大久保駅より東京駅ま では電車はなんとか動いた。都電は全線不通。歩い て牡丹町に向かった。隅田川の永代橋を渡り深川に 入った。雲一つない青空、日本晴れでした。海岸ま で真平で360度の地平線だ。海岸の近くにある、ゴ ミ焼場の4本のお化け煙突がみえた。辺り一帯に男 女の区別もつかない焼死体が転がっていた。門前仲 町から深川不動尊と目的地に近づくと、路上の焼死 体の数は凄まじいものとなり、人々は折り重なるよう に、山になり、足の踏み場がないほど。死体の数が多 くなって、まともに正視できない惨状でした。富岡 町から牡丹町に渡る大島川の東富橋が木造のため焼 け落ち、消防自動車が頭から川に突っ込んでいた。 欄干も無く、手すり代わりに綱が一本張ってあった。 向こう側にどのように渡ったか記憶がない。木場に 近いせいか運河が多く、材木が貯蔵されていた。筏 の周りに魚のように川に浮かぶ数えきれないほどの 死体は、凍死、溺死したと聞いています。川岸では家 族を捜す人々。「お父さん」「お母さん」「どこにいるの」と子どもが泣きさけぶ。お父さん、お母さんが、子どもの名前を呼びながら、黒こげの遺体に声をかけていた。私は思わず両手を合わせました。私はこの世の終わりではないかと、悪夢なら早くさめてほしい、と思った。この悲惨な状況を、忘れてはならないと、心に誓った。腹がすいた、口に入るものがない、どうにもならない。自宅に帰り、両親に「祖母の手掛かりは何もなし」と報告したら、「ごくろうさん」の一言でした。そして、二日三日過ぎたころ、隣家に電話が入り、祖母は、知人の家に避難し無事であることがわかりました。「本当にありがとうございました」

5月25日山の手大空襲で自宅は焼失してしまいま した。

両親と私、妹2人と弟の6人が山の手大空襲の体験 者です。

今年は、戦後70年の節目の年に当たります。あのような悲惨な戦を二度とくりかえしてはいけない。 決して忘れてはいけない。これからも平和の尊さと 命の大切さを後世に伝えていく事が、私達戦争体験 者の使命だと思っています。

寄稿

山の手大空襲で九死に一生を得た体験記



中村 進 さん 北新宿三丁目在住 終戦時: 14歳

私は、昭和6年に新宿区北新宿三丁目(当時の淀橋区柏木)で生まれました。今から70年前の昭和20年5月25日の夜に、B29の「山の手大空襲」で自宅を焼け出されました。

当時私は、両親と兄弟4人の6人家族でした。父は 出征中、兄は勤勞動員、小学生の弟は学童疎開で不在 だったので、自宅に居たのは母と赤ん坊だった妹、そ れに中学2年生になったばかりの私の3人だけでした。

夜中に空襲警報が鳴り、南の空が真っ赤に燃え上がりました。妹を背負った母と私は、慌てて防空頭巾をかぶり、掛布団を抱えて自宅を飛び出し、近くにあった素掘りの防空壕に飛び込んで、掛布団の下で

うずくまっていました。

頭上からB29が投下した大量の焼夷弾が雨あられ と降り注ぎ、空中でさく裂した油脂が飛び散って、か ぶっていた布団が突然燃え上がりました。私はあわ てて布団をはねのけ、母の手を引っ張って防空壕か らはい上がりました。

そこから、数日前の空襲ですでに焼け野原になっていた空地(中央線の線路の北側で、現在の新宿区北新宿四丁目)まで必死に逃げて、地面にうつ伏せに倒れていました。火災の大旋風で舞い上がった木材などが、燃えながら頭上を飛んで行ったことを、今でも鮮明に記憶しています。

朝になってやっと火災も収まりましたが、煙でいぶされた眼は失明状態で、数日間は物を見ることができませんでした。食物は何もなかったので、自宅の庭先にあった井戸の水を飲んで、なんとか生き延びました。このようにして私達は、正に九死に一生を得ることが出来ました。

3月10日の「下町大空襲」と、5月25日の「山の手大空襲」とで、東京の区部はほとんど焼きつくされ、B29の空襲は地方の都市へ移りました。

広島・長崎に原爆が投下され、8月15日に終戦と なりました。

私は自分の空襲体験を通じて、多数の犠牲者の上に、今の平和がある事を忘れられません。この地球上で二度と戦争が起きないように、日本と世界の平和を祈ってやみません。

聞き取り

東京大空襲での出来事



石井 稔 さん 西新宿五丁目在住 終戦時:17歳

太平洋戦争が始まった時、私は13歳でした。当時は、今の新宿区飯田橋に住んでいました。その後、柏木のほうに移りましたが、空襲で焼け出されて、淀橋に移りました。戦争が終わって、周りは焼け野原でした。

元軍人で、長年国のために働いていた人たちが街

を仕切っていました。4月24日、5月25日での空襲は、今でも鮮明に覚えています。空襲の時、柏木では、40発くらい隣組に焼夷弾が落ちてきました。隣組というのは、物がなくなって配給するところであり、「もし焼夷弾が落ちてきたらどうするか」などの話し合いの場でもありました。私の隣に住んでいた奥さんは、小さい子どもを背負って、家族皆を引き連れて逃げて行きました。

その時、私の目の前で、背負っている子どもに焼夷 弾が直撃しました。子どもの首は吹っ飛びました。 しかし、子どもを背負っている奥さんは、それに気付いていません。私は「おばさん、その子、首がない」と 言いました。そのような状況でした。

二度目に焼け出された淀橋では、柏木のときと違い、焼夷弾が一発も落ちてきません。柏木とは違い、周りは焼け野原で何もありません。ただ、ほかから延焼してきて、バリバリと音がしていました。私の家はちょうど新宿区と渋谷区の境にありました。どんどん焼けてくる音がしてきて、私たちはその場から逃げようとしました。しかし、消防団の団長に止められ「戻って火を消せ」と大きく手を広げて怒鳴られました。

その当時、私はまだ20歳前で、その場を突破できる力を持っていません。だから、私たちは来たほうへ戻りました。そうすると自分の家が燃えていました。迫りくる火の気配を感じて、私はもちろん、その場にいた誰もが無我夢中で、焦っていました。逃げ場を失ってしまいあわてていると、2人の子どもを連れた若い母親に呼び止められました。

その母親に「私だけでは、2人を連れて逃げきれないから、1人を連れて一緒に逃げてくれないか」と頼



まれてしまいました。自分も生きるか死ぬかの瀬戸際で、そんな余裕はありませんでしたが、必死になって頼み込む母親と怯えている子どもの姿を見て、とっさの判断で預かりました。そして、その子どもを連れて神田川に飛び込みました。川に飛び込んだのはいいが、それでも火の粉や熱風を感じました。辺りを見回すと、野球場のスタンドに立っているような感じで、周りが焼野原になっていて何にもありませんでした。

こんな状況から復興し、今の日本があるのは、当時の敗戦での悔しさを支えに皆がたくさん働いたからではないかと思います。もう二度と戦争を起こしてはならない。戦争を防ぐには、これからの若い世代の教育にかかっているのではないでしょうか。



石井さんへのインタビュー

聞き取り

当時の教育方針と戦後の想い



大島 明廣 さん 西新宿五丁目在住 終戦時: 18歳

太平洋戦争が起きた時、私は15歳で現在の西新宿である淀橋区に住んでいました。現在の日本は、民主主義の教育を受けている人ばかりですが、当時は軍国主義でした。その当時の教育方針は、自分を犠牲にしても国や仲間のために働くことが大切ということです。私たちは軍人や軍隊は偉くて、国を守って立派な人達と信じていました。学校や新聞・ラジオでも、子どもの頃から教育されていました。そし



て、昭和16年に戦争が始まった時、誰もが緒戦の勝利を喜んでいました。今では考えられませんが、戦争の始まりは全然暗い気持ちにはならず、むしろ明るかったように思います。

戦争が始まってからというもの、物資不足は深刻になり餓死した人もいました。特に着るものや食材が不足していました。毎日、生きていくのに精一杯でしたが、戦争だから仕方ないと思っていたのです。空襲に遭う前は、親が一生懸命働いてくれたおかげで普通の生活はできていました。しかし、空襲にあって淀橋区はすべて焼けてしまい、街全体が貧乏になってしまいました。

終戦の年、私は18歳で学生でした。家が焼けてしまったので、上野にいる友だちの家に居候していて、親は山梨に疎開していました。終戦の日は学校にいましたが、学校もすべて空襲で焼けていました。玉普放送は、初めて聞く天皇陛下の声だったのです。この時に思ったのは、ただ戦争が終わったということだけでした。悲しさも悔しさもなく、むしろ茫然としていました。

その後、学校で列を作って田町から皇居前の広場 まで歩いていきました。周りの風景はほとんどが瓦



矢島さんへのインタビュー

礫で、原っぱみたいでした。私たちは皇居前まで行って、最敬礼をしました。 泣いているかどうかは分からないけれど、多くの人が、砂利の広場に正座してひれ伏していました。

これから、空襲はなくなるが、日本がこの先どうなるのかは分からない。皇居前で頭を下げたときは、 天皇陛下も気の毒だなという気持ちでした。私たちもだけれど、天皇陛下もこれから先どうなるのか分からない。不安ばかりが募っていました。戦争が終わって私達は、また黙々と学校へ戻りました。

やがて数カ月して、父と私は元の住居に戻るため、 焼け跡の瓦礫を片付けはじめました。 淀橋は見渡す 限りの焼け野原で、点々と焼けトタンのバラックが 立つ惨めな姿でした。 小学校は、プールの中が教室 だったそうです。

しかし、近所の人たちに会うと、こんなになっても 故郷へ戻った安堵感がありました。故郷は大切に守 りたいですね。

戦争を語り継ぐモノ

こちらで紹介する写真は、新宿区平和都市宣言30周年記念誌の発行に際して、区民の皆様から寄せられた資料です。



戦争を語り継ぐモノ多

こちらで紹介する写真は、新宿区平和都市宣言30周年記念誌の発行に際して、区民の皆様から寄せられた資料です。





【聞き取り

平和について考えること



おくみや よしこさん (お母さん) かねこちゃん (6歳) しょういちくん(4歳)

信濃町在住

日頃から子どもと一緒に、いろいるなサークルに参加しています。「こんにちは」「ありがとう」などの挨拶から始まるコミュニケーションを大切にしています。近所の方たちとも、お話をして相互理解をすることに努め、助け合っていけるといいと思います。それが、争いのない平和な世界に繋がると思います。



はやしかよこさん (お母さん) みれいちゃん (2歳)

内藤町在住

紛争中の海外の生活について、 テレビなどで見聞きすると、安心 してご飯を食べたり、寝たりする ことが出来るのは「平和なんだ」と 思います。また、小さい子どもを 連れて、安心して公共施設を利用 できる時も、「日本は平和な国だ な」と思います。

聞き取り

平和について考えること



ひの かおる ちゃん (4歳) のお母さん 北新宿一丁目在住

子どもの将来に心配がないよう な、ずっと平和な世の中であって 欲しいです。

おかの けい_{ちゃん (3歳)} のお母さん 百人町二丁目在住

「平和」ということについて、日 頃は意識していないけれど、「しあ わせ」とか「安心」というイメージ です。何気ない日常生活が、あり がたいと思います。



お話会風景

まつもと しゅんぺい くん (4歳) のお母さん

日曜日に、家族みんなでご飯を 食べている時、「平和なんだな・・」 と思います。あと、落とし物をし て、それが届けられたりすると、「平 和な日本なればこそ」と感じます。

寄稿

子どもからの平和の メッセージ

~平成27年度 新宿区親と子の 平和派遣参加者より~



有坂 玲志さん 西戸山小学校6年

平和の灯を消さないために自分 たちができることを考えよう。

小林 絢 沒ん

四谷第六小学校4年

世界中の子どもたちが、安心して笑顔で暮らせる日がきてほしいです。

鈴木 康介さん

四谷中学校2年

世界の人々はみな、自由で安心

で幸せに生きることを願っている と思います。しかし、それをおび やかす戦争は決して起こしてはな らないものです。平和な未来を実 現するには、多くの人にこの体験 を伝え、小さな平和を作っていく ことだと思いました。

高木 綾さん

西早稲田中学校1年

平和のために、今私たちができることは、戦争について学び戦争の悲惨さを1人でも多くの人に伝えていくこと。

田村 蓮さん

大久保小学校6年

恨みを捨て、人を許す心を持つ 人が増える事が平和への道だと 思う。

飛田 道哉さん

戸塚第一小学校4年

今まで原ばくや戦争のテレビは こわくて、見たくありませんでしたが、今回の平和はけんで原ばく のことを知れてよかったです。これからも原ばくや戦争のことを調べたりべん強したいと思います。 そして今回の平和はけんで見たり聞いたりしたことを友だちにも話してみたいと思います。

渡邊 皐月さん

落合第四小学校5年

戦争をしてはいけないことを心 に強く想いました。命の大切さを 知り、戦争は人の心でなくすこと ができると思います。

平和へのメッセージ

寄稿

~ 2015年度平和ポスター展 入選者より~



大橋 夏己 さん

落合第二中学校 2 年

終戦70年を迎え、今私は平和な日々の中で生きています。多くの人々を悲しませた戦争が二度とおきないよう、また戦争の恐ろしさを知らない未来の子ども達が笑顔でいられるよう心から願っています。



小田 美紗貴さん

天神小学校4年

戦争で使われる飛行機は、いつも爆弾の煙の中を飛んでいるので、かわいそうだと思いました。 平和な世の中になって鳥たちと楽しく飛べるようになってほしいと願いを込めて描きました。



鈴木 美紗希さん

新宿西戸山中学校3年

私は、戦争や貧困によって世界 のどこかで日々失われていく笑顔 を取り戻し、世界中が平和になっ てほしいという思いでポスターを 制作しました。

平和について考えることもでき、本当に良い機会となりました。



中一龍さん

落合第五小学校 5 年

ぼくは戦争をテレビでしか知らないけれどあんなこわい事はあってはいけないと思います。だから、どの国も戦争を起こさないで世界中のみんなの今や未来が平和に輝ける日が続けばいいな、と願ってあの絵をかきました。



福村 菜摘 さん

牛込第三中学校 2年

軽い気持ちで争いを選んでしま う考えを捨て、正しい選択をして ほしいという願いをこめました。 そしてこれからも、平和で明るい 日本であってほしいという気持ち から、明るい黄色を背景に選びま した。



吉田 ひかる さん

戸塚第一小学校6年

絵の中に書いた「一つ一つの命を大切に」というメッセージを、伝えたいと考えました。人間はもちろん、物や動物に思いやりを持ち、大切にする事が、平和につながっていくと思います。

寄稿

平和へのメッセージ

~「平和派遣報告会」、「平和のつどい」に出演の早稲田少年少女合唱団より~



早稲田少年少女合唱団

次代を担う子供の健全な育成を 願い、平成20年に牛込地域で誕 生した少年少女合唱団です。平成 25年から新宿区の「平和派遣報告 会・合唱コンサート」に出演し、平 和都市宣言30周年記念「平和のつ どい」にも参加します。平和への 思いを込めた歌声を通して、平和 の尊さ・大切さを伝えていきたい と思います。

寄稿

平和へのメッセージ

~新宿区青少年交流事業 友好都市ベルリン市 ミッテ区派遣参加者より~

田畑 美和さん

高校2年、ドイツ派遣団

この夏、私は新宿区の「ベルリン市ミッテ区との青少年交流」の 友好特派員としてドイツへ行きました。強制収容所跡を見て言葉にならないやるせない思いを感じたり、ベルリンの壁博物館で東ドイツの人々の自由を求める強い思いを学びました。一方でドイツの青少年と毎日行動を共にすることにより異文化交流も体験しました。 実はミッテ区は移民が人口の45%以上とベルリンで最も高い地域です。これは戦前・戦中の反省や戦後の復興・発展のために継続して移民労働者を受け入れてきた結

果だそうです。町には様々な人種

や多国籍な料理店などがあふれ、活気に満ちていました。ベルリンでは人気の食べ物であるケバブもトルコ移民が始めた料理だそうです。ベルリンは、異なる国籍・人種・考え・信仰の人がいて当然だという前提のもとで、その違いを楽しんでいる社会だと感じました。私は新宿区が平和で発展するためには多文化共生がキーワードだと思います。

三浦 彩曲香

高校2年、ドイツ派遣団

私は今夏、新宿区代表としてドイツに派遣された。その中で強烈に印象に残ったのがワイマールにあるブッヘンヴァルト強制収容所であった。そこに残る当時の臭い、想像を絶する光景に私は大きなりまった。この場所できたかということを考えると、許せない気持ちが湧くと同時に胸が痛んだ。一方、ドイツの青少年との計論で平和に対しての共通認識が得られたのは大きな収穫であった。この経験は一生忘れることが出来ないだろう。

ドイツの元大統領、ワイツゼッカーの言葉に「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目になる」というものがある。都合が悪い過去を無かったことにして現在や未来に目を向けがちな今、負の過去に目



「ノイエンブルク城にて」 向かって右(ピースサインをしている方)が田 端さん、左(眼鏡をしている方)が三浦さん。

を向けることこそが平和を築くために必要なことであると感じる。 戦後70年を迎えた今、私たちにできることは何だろうか。私は海外を含め多くの人と平和について話し、平和の尊さを訴えていきたい。



寄稿

記念誌インタビューに 参画して

~新宿区平和宣言都市30周年 記念誌学生インタビュアーより~

近藤 玲子 さん

目白大学短期大学部ビジネス社会学科1年

今回、区民の皆さんへの記念 誌インタビューでは、戦争という シリアスなテーマを取り扱うの で、事前に当時の出来事を調べて 参加しました。戦争を体験した 方々のお話を、対話形式で聞く機 会はなかなかありません。実際に 貴重なお話を伺っていくうちに、 ニュース等の報道や、教科書の中 でしか知らなかった歴史としての 「戦争」を、より生々しく感じまし た。インタビュー前は緊張してい たのでとても不安でしたが、戦争 を乗り越えた方々だからこその重 みのある言葉は、私の物の見方を 変えるものばかりで、日々のめり 込むような形で取り組めました。 そのため、内容も大変ボリューム があり、文章に起こしては削って いく作業はとても難しかったで す。また、沢山の方々がフォロー やアドバイスをしてくださり、回 数を重ねるたびにインタビューの 進行がより良くなっていく実感が 沸きました。つらい体験の中で もたくましく生き抜く人の強さに 触れることができ、本当に勉強に なった数日間でした。



右端が近藤さん

目白大学短期大学部ビジネス社会学科 1 年

今回、初めてインタビューをして、自分の思っている以上に難し く、最初はとても緊張しました。

しかし、区役所の方々からアド バイスを頂き徐々に出来るように なりました。この機会を通して、 改めて戦争について深く考えるこ とが出来ました。少し無関心な面 がありましたが、この区民インタ ビューを通して興味深い体験談を 聞くことが出来、戦争に対して関 心が持てました。難しい単語が出 てきたら調べて理解するようにし たり、その方が思っていた当時の 気持ちに共感するなど、戦争を実 際に経験した人達から直接話を聞 けて、とても勉強になりました。 四日間にわたり、インタビューを しましたが、誰もが共通しておっ しゃっていたことは「戦争は二度 とおこしてはいけない」というこ とでした。そのためには、私達も 今回のインタビューで聞いた体験 談を後世に残していくように伝え ていきたいと思います。短い期間



右端が菅野さん

でしたが、この貴重な経験を生か し、今後の日本を客観的に見よう と思います。色々な考えが持てて 良かったです。

鈴木唯るん

目白大学短期大学部ビジネス社会学科1年

戦争の体験を話してくれた区 民の方々は一人一人がとても濃い 内容で、今まで聞いたことのない 話を、インタビューを通して多く 知ることができました。初めてお 会いした方に過去の人生を聞くよ うなことは緊張しましたが、大学 生の私たちへわかりやすく語って くださった戦争中の体験談に聞き 入ってしまいました。

"人は実際に遭遇して実感を得る"というお話は、まさにその通り でした。相手の気持ちと同じ感情 になるために、話を聞くだけでな く、多くの戦争の知識を持ち反復 をしていこうと思いました。

戦争の話を次の世代へと語り継ぐためにも、戦争を経験していない私たちが、もっと日本について勉強し、今の世界を知ることが大事だと気付かされました。また、インタビューした方々全員が『勝たなくてはいけない』という心でまとまっていて、軍国主義でない今の日本には足りない団結力を感じました。

とても貴重な体験をさせていた だき、ありがとうございました。



真ん中が鈴木さん

寄稿

教育現場から育む 平和の心

~新宿区親と子の平和派遣OBより~



森田 慎 さん

私は平成13年度、中学2年のと きに広島に派遣させていただきま した。

平和派遣に参加して心に残っていることは、平和記念資料館や爆心地に一番近かった本川小学校の見学です。原爆投下当時の様子を間近で見て、その悲惨さにショックを受けたことを今でも忘れません。

現在、私は都内の小学校で教員をしています。子どもたちと過ごす中で普段から意識をしていることは、人と人との関わりについてです。コミュニケーション能力の低下と言われて久しい昨今で子が、人付き合いが上手でないます。戦争や平和について日々の学習で扱うことは少ないですが、他者を守るうとする気持ちや人権を守ろうとする態度を身に付けてほしいと願っています。

平和派遣の体験を原点に、平和 な世界を担う子どもたちを育んで いきたいと思います。

寄稿

平和へのメッセージ 〜新宿区親と子の平和派遣 OBより〜

深澤 征義さん (48歳)

「新宿区親と子の平和派遣」で次男とともに広島訪問の機会を得た。 その体験は、私を大きく変えたと思っている。特に印象に残っているのは、被爆者の瀬木正孝さんの話である。壮絶な体験をされた瀬木さんが、「人の命の大切さを考えて、思いやりの心とやさしい気持

幸運にも、私は平成21年度の

木さんが、「人の命の大切さを考えて、思いやりの心とやさしい気持ちを持ってください。」と語られた言葉に心が打たれた。平和が当たり前の日本で生まれ育ち、平和について真剣に考えたこともなかったことに気づかされた。「気づき」

があると、まさに世の中が違った

形で見えてくる。

平和は自分たちで築き上げるも のであり、そのためにも戦争を含 め過去の歴史を知らなければなら ない。私は、派遣者が中心となっ ている「新宿区平和派遣の会」の 様々な活動に参加し、特に新宿区 内の戦争の史跡を巡る「平和マッ プウォーキング | の案内役をする ことで、本当に多くのことを学ぶ ことができた。様々なことを学び ながら、戦争や争いのない社会を 作るためには何をすべきかを自分 で考えることがとても大切だと思 う。私自身これから何ができるだ ろうか。特に次代を担う子どもた ちそれぞれが、平和を考えるきっ かけを持てるような学びの場を 「新宿区平和派遣の会」の活動など を通じて、微力ながら作っていき たい。瀬木さんの言葉をかみしめ ながら。



「平和マップウォーキング」で説明をしている深 澤さん(中央正面/四ツ谷駅:旧御所トンネル 前で)。

平和大使の方々との交流 ~広島被爆者援護会より~

寄稿

石原 智子さん

1945年8月6日、原爆が投下された時、母親の胎内で被爆した。語り部として、全国の小中学校をまわり、ヒロシマの声を伝えるとともに、命の大切さ、人としての優しさや思いやりの大切さを伝えている。

新宿区親と子の平和派遣に参加 する親子さんと出会ったのは何年 前のことだろう。平和を学ぶため に親子で話しあって応募し、厳し い審査の末に選ばれた7組の親子 の真剣さに感動した。

毎年長崎の式典に参列している 私は、広島派遣だけでなく長崎派 遣の親子さんの役に立てることは ないだろうか?と考え担当者の職 員さんと相談して交流を続けてい る。

実体験を持たない胎内被爆者の 私は、両親から聞いたことしか伝 えることができない。

「被爆者だけが戦争被害者ではない。大切なものを失った人の辛い悲しみを風化させないために語りなさい」と父から背中を押され、細く長くを目標に、また「私の力は微力だけど無力ではない」と自分に言いきかせて今日に至る。

平和大使の大役で経験された苦労や喜びを親子の共有の宝物にして欲しい。私は、平成20年10月1日発行の「新宿区平和の語り部登録証」の第1号をいただいている。



平成 27 年度新宿区親と子の平和派遣団と石原 智子さん(前列一番左)。

国籍を超えて

寄稿

平和へのメッセージ

C.Z さん (中国)

新宿区に住んで10年になります。新宿区が「平和都市宣言」を 行って、30周年を迎えるにあたり、 平和について考えてみたいと思い ます。

普段テレビのニュースを見ていると、世界の各地で戦争があり、 多くの人々が巻き込まれ、亡くなったり、難民になったり、未来を奪われています。それらを目の当たりにすると、毎日三食のご飯が食べられ、仕事が出来て、家族と一緒に暮らせることが、何と幸せで有難いことかとしみじみ感じます。

かつて、私の国と日本は戦争になりました。その戦争で、両国の国民は、不幸以外の何を手に入れたでしょう。戦後70年が経っても、癒やされない傷を持った方が両国におられます。

戦争はある意味で国が起こします。国民のレベル、基礎自治体のレベルで、国が戦争を起こさないように監視することが大切だと思います。戦争に行くのは、私たちや私たちの家族であり、戦争の苦しみは私たちが受けるのです。平和を守るには、戦争の悲惨さや無意味さを心に刻み、子どもたちへも伝えてゆくことが必要です。

新宿区には、多くの外国人が仕事や観光で訪れ、また多くの外国人が住み、働いています。たとえ、国籍が違っても、互いの文化の違いを知り、偏見を取り去り、互いを認め尊重し合えることが大切で

す。様々な交流を通じて、お互い を理解することが、平和への一歩 であると思います。

寄稿

平和ぼけ

CTK さん (韓国・58歳)

私は今から30余年前に来日し、 新宿の西早稲田に住んでいました。

勉学のための来日でしたが、戦 争や平和のことはあまり考えたこ とのない平和ボケ的な日常を過ご していました。

ある日、「生まれたところが戦場だったら」という新聞記事を読んで思ったことがあります。

現在、世界にある194の国の中で、45にもなる国や地域で紛争や内戦が起きているそうです。 莫大な財政を戦争や軍事費に注いでしまう国もあります。人間としての暮らしはもちろん生存さえも保証できない人がたくさんいます。

戦争の経験談や戦争の悲惨さは、日常において無数に語られています。にもかかわらず、争いは絶えることなく、平和を求める難 民も増える一方です。

もし、あなたが死への恐怖と隣 り合わせの状況に置かれたらどう しますか。

その時あなたは何ができますか。

我々は、悪を生む憎しみを捨て なければなりません。

紛争や戦争は憎しみからくる 抑圧や差別などから起きるからで オ

平和へのメッセージ

Sさん(韓国・49歳)

- ①新宿に住んで何年になりますか? 19年です。
- ②平和だと感じる場面は?

新宿には多くの外国人が住ん でいますが、日本人と外国人が 大きなトラブルなしに過ごすこ とに平和を感じます。

お互い国籍は異なるが、同じ 人間として尊重し配慮しながら 住める新宿こそ平和ですね。

③この先平和な世界が続いていく 為に大切なこと。子どもたちに 伝えたいことは?

お互いを理解し、交流があれば戦争は起こりません。 友達がいる国、配偶者の親戚がいる国との戦争を望む人はいません。

政治家も国民も他国の人とより積極的に深く交流する、経済的に絡むことが平和を維持するのに大事です。

聞き取り

平和へのメッセージ



シュレスタ_{さん}

- ①新宿に住んで何年になりますか?11年。
- ②平和だと感じる場面は? 他の国と比べて、治安が良い

寄稿

ところ。

③平和な社会を続けていくには?

多文化で共生するために、異 文化を理解することが大切。「人 間は人種が異なっても皆同じな んだ」ということを基本に、お 互いを理解することが必要。

日本は、外国人に対してもっとオープンになって欲しい。 外国人が住みやすくなるように 制度を見直したり、例えばベーシックな情報はできるだけ多言 語で発信するなどの工夫を続け て欲しい。

寄稿

平和へのメッセージ



イー・イー ミンさん (ミャンマー)

①新宿区に来て何年になりますか?

私はミャンマー連邦国マンダレー出身のイーイーミンと申す者で現在66歳です。新宿区でお世話になり、早や28年が経ちます。

②生活をしていて平和だと感じる 場面は何ですか?

平和の語源にも世界から個人 の問題までありますが、新宿区 に住んでいて今まで全く不安は ありませんでした。良い機会で すので、新宿に住んで経験した 面白い出来事を紹介します。

10数年前、夜の11時ごろに私の息子が夜食を食べに行った帰り道のこと。黒沢楽器店前の薄暗いところで「マネー、マネー」と言われ、おつりの10円玉数個を出したら、「ペイパー、ペイ

パー」と言われたことがありま した。

こちらが外国人と知って英語で言ったのか?それとも、相手が外国人で日本語を知らなかったのか?その頃すでに、新宿の多文化が始まっていたようです。

これも昔の話です。夜中の3時ごろ、外で音がするので、ドアーを開けたら不審者が立っていて、こちらの質問に対して「待ち合わせ」と言っていました。「夜中の3時に待ち合わせがあるだろうか?」と思いましたが、「これも文化の違い」と心の中にしまいました。

③この先平和な世界が続いていく 為に大事なことは何ですか?

今後も日本に住み続けるに当 たっては、お互いの国の風俗・ 習慣を受け入れることにより平 和が保てると思います。まして や自分は異文化の人間です。受 け入れてもらうだけ感謝しよう と思います。多文化共生を理解 して外国人と幸せな人生を歩む には、自分の育った国の風俗を 捨てて相手方の習慣を尊重して 平和に暮らすことが第一だと思 います。

戦後70年間、戦争も無く平和に暮らせた日本に住めたことに感謝のひとことです。私の国にも多くの問題が生じておりました。世界の平和も自分の国一国だけで守ることはできません。お互いの国の人々が、今後とも仲良くし合い共存していきたいです。

新宿区は特に異文化共生に力 を入れ、多文化共生プラザが異 国人に対しても窓口として活動 しております。これも「平和へ のメッセージ」の一つとして感 謝いたします。

平和についてのメッセージ



カーリー・ バクストンさん (アメリカ)

寄稿

私が子供の頃、学校で勉強した 戦争の歴史といえば、やはり日付 や数字を暗記することでした。理 論を強調するシカゴ大学の大学 院生になってはじめて戦争のこと を、人間の感情的な体験として深 く考えました。そして博士論文を 書こうと決めた時、戦争を体験し た個人の身の上話をぜひ伺って戦 争と平和のことを単なるデータよ り実体験として分析したいと思い ました。今回の日本での、10ヶ月 間の研究滞在の目的は、日本人が 体験した第二次世界大戦をより良 く知ることで、特に戦争に巻き込ま れた日系アメリカ人二世の当時の 日常生活について学ぶことでした。

新宿区の平和啓発事業のおかげで、当時の日本での生活はどんな様子だったのか、その実情に一歩近づくことができました。「平和マップウォーキング」で、戦争の傷跡を持つ道を自分の足で歩みました。「すいとんの会」で、当時の人々が食べた食事を自分の口で味見をしました。平和の語り部のご紹介で、戦争の体験を持つお年寄りに戦争時代の話しをいろいろ伺いました。

このように、戦争当時の日常生活の様子に触れることを通して、 現実の個々の人間の姿を考えずに 抽象的な概念だけの"敵"をみなす ことに、戦争の脅威があるという ことを私は学び結論付けました。

ですから、平和への道の一つは、 異なる世界観でこの世の中を見る 個人と、できるだけ積極的に交流 することです。「異なる世界観」と 言いましたが、それは異なる国籍、 言語、人種だけではなくて、異な る年齢、故郷、価値観も含まれて いるのではないかと思います。

そのような交流を支援する新宿 区の平和啓発事業が活動をうま く続けて、戦争は個人が体験する ものだという意識を留めるように 祈っています。世界中の他の人た ちを刺激して同じことをしようと いう気にさせることで、平和を促 進できると思います。

聞き取り

平和へのメッセージ



江副 ジョエル_{さん} (フランス)

- ①新宿に住んで何年になりますか?約30年です。
- ②普段生活していて平和だと感じ る場面は?
 - ・夜中でも散歩ができるとき。
 - ・ドアを閉め忘れて出かけてしまった時に、大丈夫だったとき。
 - ・植木や金魚の水槽などを家の 外に出しておいても、盗まれ ないこと。
- ・電車の中に忘れ物をした時に、傘などがちゃんと戻ってきたとき。
- ・紛争地から遠く離れている こともあり、難民の数がヨー ロッパと比べて少ない。

③この先、平和な世界が続いてい くために大事な事は?

日本人は、ルールを守って、 他の人のことも考えてみんなで 行動する。個人主義的に自由な 行動をしているフランスとは違 うところ。

そんな、日本のシステムを大 切にしていけば、安全で平和な 国が続くと思う。

寄稿

平和へのメッセージ



アダム・ マジョー さん (イギリス・28歳) ADAM MAJOE 山吹町在住

①新宿に来て何年になりますか? 6年です。

②平和だと感じる場面は?

以前何度か財布をお店に忘れ たり、道に落としてしまったこ とがありますが、毎回必ず見つ かります。私の国イギリスでは 絶対にあり得ないことです。

③この先平和な世界が続いていく 為に大切なこと。子どもたちに 伝えたいことは?

一番大切なことは、相手の国の文化を理解することであると私は思います。私は、日本に来てから6年間いろいろな方々と出会い、いろいろな文化を学び、また体験し、ますます日本が好きになっています。世界が平和であるためには、様々な国の文化を知り、相手と自分との違いを認め、理解することがとても大切です。

また、日本には素晴らしい文 化や歴史、国民性があります。 日本の子どもたちには日本人で あることに誇りを持ち、世界に 日本の文化を発信していくと同 時に、相手の国の文化をたくさ ん学び、グローバルに活躍して ほしいと思います。 平和へのメッセージ

クリネービチ・ エカテリーナさん (ロシア・23歳)

GRINEVICH EKATERINA 西新宿在住

『平和』という言葉を聞くと自分の頭の中には『緑が多い公園で家族と遊んでいる子ども達、街の中でジョギングしている人、あちらこちらから聞こえる外国の言葉、祭りに一緒に参加する隣の人たち』が描かれます。

全て平和の時にしかできないこ とだと思うからです。

私が新宿区に引っ越してから、 ちょうど1年が経ちました。西新 宿のほうに住んでいますが、この1 年間に平和なエピソードがたかさ んありました。例えば、私が毎日 通る新宿中央公園では、よくい は、よくい もし、また、スポーツをや人、また、スポーツをや人、また、スポーツをや人でいる人を しくピクニックしている人をもしく 見かけます。屋外であった。 のは、平和だからじゃないかなと 思います。

また、夜遅く帰ったことがあり ますが、その時にいつも無事に家 まで帰れたので、間違いなく西新 宿は安全な街だと思うのです。

新宿区平和都市宣言30周年記念「平和のつどい」 参加アーティストから



倍賞 千恵子さん

1960 年松竹音楽舞踊学校を首席で卒業後、松竹歌劇団 (SKD) へ入団。1961 年松竹にスカウトされ松竹映画「斑女」でデビュー。1962 年「下町の太陽」で歌手デビューし、同曲でレコード大賞新人賞を受賞。現在まで日本アカデミー賞を始め数多くの賞を受賞。2005 年紫綬褒章。2013 年旭日小綬賞。映画「男はつらいよ」のさくら役に代表される庶民派女優として、また歌手としても親しまれ活躍中。

コンサートや講演会で、わたしが疎開をしていた ころの話をすると、同年代の方々は懐かしい気持ち を持って聞いて下さいます。でも、皆さん、本当はす ごく大変だったのです。若い方々には本当の平和の 大切さを伝えたいですね。



ジェロ (JERO)きん

2008年、ビクターエンタテインメントよりシングル「海雪」でデビュー。オリコン総合シングルチャートでの初登場第4位は、演歌・歌謡曲の新人ソロ歌手として史上初のベスト10入りを果たすとともに過去最高位を記録。「ベストヒット歌謡祭」「日本有線大賞」「日本レコード大賞」という音楽賞すべてにおいて最優秀新人賞を獲得するとともに、念願の「紅白歌合戦」への初出場を果たした。

戦争のない平和な世の中を望んでいます。

どうしたら争いが無くなるのかとても難しい問題ですが、思いやりの心を育てることがもっとも大切なように思います。

そのためには豊かな情緒が必要となりますが、日本的情緒のたくさん詰まった演歌・歌謡曲はそういう意味でも魅力的だと思います。



小六 禮次郎さん

作曲家。岡山市出身。東京芸術大学音楽 学部作曲科卒業。

主な作品として映画「ゴジラ」「オーロラの下で」、NHK 大河ドラマ「功名が辻」「秀吉」、連続テレビ小説「さくら」、みんなのうた「いらっしゃい」(倍賞千恵子)等、幅広く多方面にわたって活躍中。また、倍賞千恵子と共演するコンサートを全国で公演し、好評を得ている。

何とか戦争にならないように知恵をしぼっていきたいと、あせりの気持ちが出てくるほどのこの頃の世相、90歳を過ぎた母の経験した、機銃掃射や空襲の話が現実にならないよう、戦争の本当の姿を知る必要があると思います。



齋藤昭希(左:13歳・中学1年) 大下華歩(右:14歳・中学2年)**¹ 今もっとも注目されている実力派女子 中高生ヴォーカルグループ「Little Glee Monster」を輩出した「第二期・最強歌少 女オーディション」を勝ち抜いた選抜2名。 最強の名に恥じないヴォーカリストを目指 して、厳しいレッスンの日々を送っている。

私たちは歌が大好きです。それは、歌を歌っている時、聴いている時、いつも誰かと繋がっているような気持ちになれるからです。争いや戦争、そして犯罪やイジメも無い平和な世界を願って、心を込めて歌いたいと思います。



INSPi (インスピ)さん

杉田篤史、大倉智之、奥村伸二、北剛彦、渡邉崇文、吉田圭介からなる 6 人組アカペラグループ。2001 年 12 月メジャーデビュー。2005 年 2 月より日立 CM ソング「この木なんの木」を 2 代目シンガーとして担当。 2016 年 1 月、5 年ぶりとなるニューシングル「エンターテイナー」をリリース。この CD には NHK みんなのうた「ドミソはハーモニー」も収録されている。

アカペラグループとして活動していて、ハーモニーを保つことの難しさを痛感します。少しの環境やコンディションの違い、また感情の乱れであっけなく簡単に崩れてしまいます。それでも僕らは諦めず、儚くそして美しいハーモニー (調和、つまり平和)を奏でていきます。



Daichi (ダイチ)さん

10歳の頃から、独学でヒューマンビートボックスを始める。18歳の頃、自宅で撮った動画を YouTube にアップしたところ、全世界から注目を浴びる。口だけで50種類以上の音を出すことができ、なおかつリズムとメロディーを同時に奏でることができる。

現在自身の YouTube チャンネル登録者数 は80万人以上。総再生回数は一億回を越える。2012年、ニューヨークにある名門ライブハウス「アポロシアター」が主催する大会・アマチュアナイトにて、日本人ミュージシャン初の年間3位入賞を果たす。

戦争というと遠い昔のことのように感じてしまうけれど、現実で起きたこと、そしてその悲惨さを忘れてはいけない。戦争を体験したことはなくても、人は想像することが出来る。平和であることの大切さをずっと先の後世にまで伝え続けられるように、行事や映像、音楽、芸術、言葉などを通して、人々の想像力を掻き立てたり思い出させることが大事だと思う。



新垣樽助さん

6月 18 日生まれ。(声優) 主な出演作品 「攻殻機動隊 ARISE」(トグサ役) 「テニスの王子様」シリーズ(木手永四郎役) 「HAWAII FIVE-O」(チン・ホー・ケリー役) 「太陽を抱く月」(イ・フォン役)

「ぬちどうたから」。沖縄の言葉で「命は宝物」という意味です。

沖縄で生まれ育った私にこの言葉を教えてくれたのは祖母でした。「この言葉の真逆にあるのが、いくさ(戦争)だよ」とも。戦争について語る祖母は、敵や味方といった言葉は使いませんでした。ただ何十万人もの命が失われた沖縄戦を悲しみ、ひたすらに「戦争」に憤る祖母であったと記憶しています。本日の集いに参加させて頂く事は、戦乱を生き抜き、命と想いを継いでくれた祖母への、ほんの少しの恩返しにもなればと、心から嬉しく、光栄に思っています。



小島 幸子さん

1月18日生まれ。(声優) 主な出演作品 「ジョジョの奇妙な冒険」(スージーQ役) 「ハピネスチャージプリキュア!」(増子美代役) 「テッド」シリーズ (タミ・リン役) 「マンマ・ミーア!」(アマンダ・セイフライド)

『平和』という言葉を聞いて、最初に思うのは『当たり前』ということです。

日本は平和で当たり前。戦争は歴史の中のこと。 遠い国のこと。ずっとそう思ってきました。しかし、 ここ最近ニュースを見ていると歴史の中のことでも 遠い国のことでもないように思います。いつどこで 何が起きてもおかしくない。

私には二人の子供がいます。子供達が平和を当たり前と思える未来にしていかなければいけない。私達にはその責任があると思うのです。



佐藤 利明さん

(進行)

娯楽映画研究家・オトナの歌謡曲プロ デューサー

文化放送「みんなの寅さん」(毎週土曜 6:40~6:50) の構成・パーソナリティーを務める。娯楽映画をテーマに、キャストへのインタビュー、新聞連載、数多くの映画 DVD の企画・解説などマルチに活躍中。「1969」(Pink Martini、由紀さおり)のスペシャル・アドヴァイザーをはじめ、歌謡曲・ジャズ・サントラなど幅広いジャンルの CD を企画。

幸福は、相手の幸福を思うこと。 悲しみは、人の痛みを知ること。 喜びは、生きていて良かったと実感できること。 自由は、自分の言葉で話せること。 平和とは、幸福と、悲しみと、喜びと、自由を噛み締めることができる毎日…

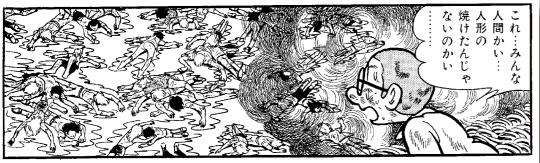


新宿区平和都市宣言 30 周年記念「平和のつどい」

- 日 時/平成28年3月27日(日) 14:30 開場 15:00 開演 17:00 終演予定
- 会 場/新宿文化センター 大ホール

手塚治虫の平和への思い

手塚治虫は生涯にマンガ原稿 15 万ページ以上、700 以上の作品を創作しました。 どの作品にも根底には、「自然の素晴らしさ」、「生命の尊さ」が溢れ、 そこには自身の戦争実体験からくる、平和への強い願いが込められています。 そうした手塚治虫の平和への思いを、作品や講演会で語った内容から一部抜粋して、 作品と合わせてご紹介します。



語り部になりたい(ガラスの地球を救え/光文社刊)より一部抜粋

なにが恐ろしいといって、自分の死の恐怖を目のあたりに味わったことです。 空襲や戦場は、どこへ逃げても同じ恐怖にさらされるのです。

そこから逃げるすべはありません。それが地震や津波などの天災ではなく、

それを与える側も人間なのだということが、とくに怖いのです。

ぼくの、ほとんどの作品に描かれているテーマには、この悪夢の ような記憶を、無意識に描いているものが多いのです。

それは、ちょうど語り部のように、自分も体験を子どもたちに 語って聞かせたい、そういう気持ちが動いているのでしょう。 どんな国も、それぞれの正義をふりかざして戦争をしてきましたし、 いまもしています。

正義とはじつに便利な言葉で、国家の数だけ、あるいは人間の数だ けあるとも言えそうです。

そのごたいそうな正義の中身は、老人から無垢の赤ん坊にまで至る 理不尽きわまりない殺人行為になることもあるということです。

















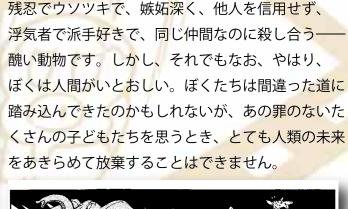
目の前でわが子や父母の死を見なくてはならなかった何百何千万の人々がいるのです。 そしてまた、自らもまた、常に死におびやかされつつ、殺さなくてはならなかった兵士たち。 戦争で負った心の傷も、肉体の傷以上に深く、到底いやされるものではありません。 こんなことも、もうぼくらの世代で永遠に打ち止めにしたいと、切<mark>に願い</mark>ます。 そのためにも、子どもたちが、健全な批判力を養えるような教育環境を整えることが、 先決なのではないかと思われます





アトムの哀しみ(ガラスの地球を救え/光文社刊)より一部抜粋











戦争を語り継ぐモノ4

こちらで紹介する写真は、新宿区平和都市宣言30周年記念誌の発行に際して、区民の皆様から寄せられた資料です。





67

太平洋戦争と新宿

関東大震災(大正12年)後の人口の流入や新宿駅のターミナルの形成等により、現在の新宿区の前身となる「四 谷区」・「牛込区」・「淀橋区」の市街地化は進み、太平洋戦争直前の昭和15年時点で人口は39万人を超え、建物棟 数は6万6千棟あまりを数えました。また、区内には、陸軍省や参謀本部、陸軍幼年学校、陸軍戸山学校、東京陸 軍第一病院、戸山ヶ原射撃場、近衛騎兵連隊兵営等、陸軍関係の施設も集積していました。

こうした新宿のまちは、昭和17年4月18日の早稲田地区への初空襲をはじめ、昭和19年12月27日以降、度重

市谷本村町は、江戸時代は尾張国 徳川家上屋敷であったが、明治以 降軍用地に転用され、陸軍予科士 官学校・陸軍幼年学校などが設置 され、後には陸軍省、参謀本部など 陸軍の中枢が置かれた。戦前・戦 中の地図では、戸山町と同様、建物 配置など詳細は示されていない。



ウスぐん ま か し かんがっこうほん ぶ 陸軍予科士官学校本部 (現在は防衛省市ヶ谷記念館として 建物の一部が移築保存されている)



霞ヶ丘町から隣接する港区北青山 にかけては、明治以降近衞歩兵第 四連隊兵営や青山練兵場が置かれ た。練兵場では明治天皇の葬儀が 行われ、その後明治神宮外苑とし て整備された。信濃町周辺にも明 治初期に軍の火薬庫が置かれ、後 に輜重兵営(補給や後方支援を担 当)となった。現在は慶應義塾大

学病院となっている。



この え ほ へいだいよんれんたい 近衛歩兵第四連隊入隊式の風景(昭和 5 年)

なる空襲により、大きな被害を受けました。とりわけ、昭和20年4月・5月の空襲では、「四谷区」・「牛込区」・「淀 橋区」の大部に被害が及び10万戸以上の建物が焼失し、淀橋区役所・淀橋警察署・四谷消防署をはじめとする官 公署、高田馬場駅・下落合駅・中井駅等の交通機関、大日本印刷工場や三越新宿店等にも被害が及び、終戦時には、 区内の約8割が焼失したことが記録されています。

ここでは、地図と写真により、太平洋戦争前後の新宿のまちの様子を紹介します。

戸山町一帯は、江戸時代は尾張国 徳川家下屋敷であったが、明治以 降軍用地に転用され、隣接する西 大久保にかけて戸山ヶ原射撃演習 場、近衛騎兵連隊兵営、陸軍戸山 学校・軍楽学校・軍医学校、陸軍 病院など施設が集中していた。現 在は戸山ハイツや都立戸山公園と なっている。





陸軍軍医学校(昭和8年頃)

陸軍戸山学校の山岳演習用人工 岩場(コンクリート製。高さ約



戦災被害を受けた目白文化村(昭和20年)



被災した中での生活(戸山小学校資料)



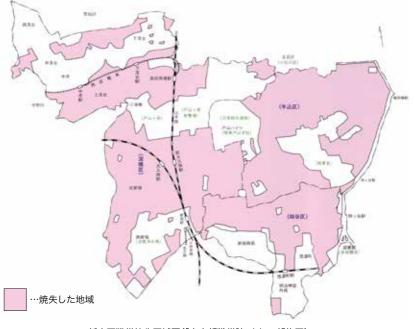
十二社料亭街から小西六を見る (現在の西新宿四丁目、同五丁目)(昭和20年)



戦災の瓦礫で埋もれた早稲田鶴巻町付近(撮影年不詳)



高田馬場駅前通り(昭和20年) (戸塚第二小学校郷土資料室資料)



新宿区戦災焼失区域図(「東京都戦災誌」より一部修正)

大東京区分図三十五区内 四谷区詳細図 (昭和 16年) 新宿歴史博物館蔵

区内の戦争遺跡など

一「新宿区地域文化財(平和分野)」・「新宿区平和マップ」より一

区内には、戦争中の陸軍施設や出征や戦災に関する記念物・史跡などが今も残っています。

こうした「まちの歴史や文化を物語る『もの』や『場所』を未来に継承」していくため、新宿区では、平成23年4月1 日に「地域文化財」制度を創設し、戦争関係の文化財については平和分野で6件を認定しています。

また、「新宿区平和派遣の会」の協力により制作した「新宿区平和マップ」でも、戦災に関する痕跡等を紹介して います。

ここでは、地域文化財に認定された記念碑や平和マップに掲載されている戦争遺跡等について紹介します。

● 地域文化財(平和分野) ● 平和マップ

●陸軍省所轄地境界石

戸山公園周辺は陸軍戸山学校 用地として買上げられた。そ の境界を示す石。



2射擊場土手跡 戸山ヶ原実弾射撃場の流

れ弾を防ぐために設けられ

た十手の一部。

❸明治天皇射的砲術 天覧所配碑

明治 15年 11月9日に、明治天皇が近衛射的 場(戸山ヶ原射撃場)開場式に出席し、同 29 日に射的砲術をご覧になった記念の碑。



4ぎ忠碑

7 喜久井町観音

日清・日露戦争に戸塚町から出征し た人々の名前を託した記念碑。元帥 陸軍大将・奥保鞏の書。



❸近衛騎兵

近衛騎兵連隊宿舎 · 炊事場跡 このえ ぎ へい 近衛騎兵 (天皇と皇后を警衛する兵士) の宿舎跡。現在は、学習院女子大学の研



③戦災者を供養するための観音像

観音像の造立縁起の石碑に 昭和 20 年 5 月 25 日の空襲で亡く は、昭和20年5月25日 なった多くの人々の霊を慰め、永 の空襲の惨状が刻まれ、歴 遠の平和を懇願する為に建立。毎 史を伝え継いでいる。 年慰霊祭が行われている。



③幸国寺の大イチョウ

樹齢 500 年以上といわれ

るイチョウの木。昭和 20

年5月の空襲の戦火から

近隣の民家を守り、現在も

力強く生き続けている。

平成元年7月、元陸軍軍医学校跡 地 (現国立感染症研究所) で 62 体以上の人骨が発見され、供養の ため石碑が建てられた。平成 14 年、納骨保管施設が完成した。



10 軍楽隊野外 音楽堂跡

陸軍戸山学校軍楽 隊が使用した音楽堂



●陸軍声山学校 址碑

明治6年に設置され た兵学寮戸山出張所 (翌年陸軍戸山学校 に改称)の跡。



②将校会議室跡

陸軍戸山学校の将校が会 議を行った場所。現在、私 立戸山幼稚園の園舎として



®いのりの碑

昭和17年4月18日の空 襲で犠牲になった早稲田 中学生を偲んで、昭和 58 年に旧友により建立された



₿鎧神社のイチョウ

昭和20年の戦災に遭った が焼け残った。黒い部分は ウレタンで保護されている。



スダジイ

昭和20年の戦災で焼け残った スダジイの木。境内には焼夷 弾により崩れた石碑もある。



(1) 旧御所トンネル

明治27年10月9日、日清戦 争の時に、青山練兵場から大量 の兵隊を輸送するため御所用地 の下にトンネルを造った。現在 も JR 総武線下りで使用。

ゆくくんしょうしょかっち きょうかいせき でを軍省所轄地境界石・ 陸軍用地境界石 / 八紘一宇碑

市谷亀岡八幡宮の境内にある。八 を 紘一宇とは、世界を一つの家にす るという意味。太平洋戦争で海外 進出を正当化するために用いられ た標語。



®日本出版クラブ会館 のイチョウ

樹齢 250 年以上の、戦災で焼 け残ったイチョウ。焼け野原 では人々の目印になった。



の石虎

嘉永元年に奉納された。 空襲で本堂が焼失して



部として建設。昭和21年か

ら2年間、極東国際軍事裁判

の法廷として使用された。



@善国寺毘沙門天

も残った。



@葬場殿趾碑

大正元年に明治天皇の葬場殿の儀 (告別式) が行われた場所。日清、 日露戦争の時、観兵式が行われ、 多くの兵士が戦地へ送られた。



り北緯 50 度以南を日本の領土と した。その国境を定めた時に使用 した天測標のレプリカ。



②近衛歩兵 第四・第六連隊跡碑

近衛歩兵第四連隊、第六連隊の 跡及び編成の説明文の碑。



満 20 歳以上の学生約 25,000 人の壮行 会が行われた。この50周年を記念し、 平成5年10月21日に生き残った方々

により平和を祈念して建てられた碑。

② 陸軍省所轄地境界石

現在の慶應義塾大学病院周辺に

は、主に食糧や軍需品などを前線

に補給するための陸軍の施設が

あった。その境界を示す石。



② 太平洋戦争 本土初空襲の地跡

昭和17年4月18 日の太平洋戦争本土 初空襲により被災し た場所。



明治 40 年に日露戦争の戦 死者を慰霊して内藤新宿 奨兵会が建立したが、関 東大震災で破壊し、昭和 3年に再建された碑。●



②祭馬碑

陸軍士官学校馬術教 官部の教官と馬丁ら が、軍馬の供養のた めに大正 11 年に建 立した碑。



学校資料調査

度重なる空襲により、区内の学校も大きな被害を受けました。昭和51年8月に発行された「新宿区教育百年史」 には、「戦前40校を数えた国民学校は、27校が全半焼し11校が廃校となった」ことや、「戦火による貴重な資料の 散逸は計り知れない」ことなどが記されています。

このような中にあっても、区内の各小学校には、郷土資料室や記念室等に、戦前・戦後の学校や子どもたちの 様子がわかる貴重な資料が所蔵されています。

区では、平成19年度から平成26年度にかけて、区民ボランティアである文化財協力員(※)の皆さんとともに、 すべての小学校の資料調査を行いました。

ここでは、学校資料調査により確認し、各学校で公開している学童疎開の記録など、戦争や平和に関する資料 について、紹介します。

※文化財協力員…地域にある身近な文化財の調査や保護・保存、資料公開などに協力していただいいる区民ボランティア。現在42名が登録されています。

四谷小学校

展示室には、四谷小学校の前身である四谷第一小学校・四谷第三小学校・四谷第四小学校に関係する戦前の学 校や子どもたちの様子を表す写真や教科書、学校運営に関する書類の綴り、年表等が展示されています。



四谷第三尋常 小學校 校舎 (昭和4年)



(昭和4年・7年・10年)



四谷第四尋 常 小 學校 木造校舎時代の正門



四谷第三国民學校 学童疎開 乾布摩擦の様子



四谷第四尋常小學校要覽(明治40年)



四谷第三国民學校 学童疎開 感謝の手紙の綴り

津久戸小学校

歴史館には、明治30年の校舎の建築仕様書をはじめ、戦前の運動会の様子を伝える資料や学校予算書、学童疎 開や空襲前後の地域の写真等、様々な資料が収蔵・展示されています。



戦前・戦中の写真パネル



入学指定通知書綴ほか



「津久戸の記録」(明治以降の写真綴り)



教育勅語



学童疎開に対する感謝の言葉

鶴巻小学校

「郷土資料室」には、創立当時「東洋一」とよばれた校舎や学校・子どもたちの様子を表す写真パネル、教科書や修 了証書、学童疎開や空襲の様子がわかる資料等が収蔵・展示されています。



写真パネル・資料の展示



開校の頃の校舎・教室・プール等



牛込区女子バスケットボール大会優勝(昭和13年)



昭和20年5月「空襲の様子」 (野見山校長記より)



鶴巻小学校周辺の航空写真(昭和23年)



戦後、校舎が住宅として活用された際に 使用した鐘等

牛込仲之小学校

資料室には、学校創立時からの卒業アルバムをはじめ、戦前・戦後の教科書や学校運営関係の書類の綴、学童疎 開時に使用した食器や写真等が収蔵・展示されています。







學級日誌(昭和3年)





第一學期・第二學期成績 一覽表 (昭和 18 年)







卒業寫眞帖 (昭和8年)

戸山小学校

資料室には、地域の方の作成した戦前や終戦直後の学校・子どもたちの様子のわかるパネルや学童疎開の写真 等が収蔵・展示されています。





「開校 30 周年頃(昭和 19 年)」・「終戦直後」の学校の様子を表すパネル展示



体育の授業 (大正 12年)



裁縫の授業 (大正 15年)



土浦館(疎開先)での学習や食事の様子

戸塚第二小学校

メモリアルルームには、戦前の学校の様子を伝える写真や「学校だより」等の資料、学童疎開の写真、修了証書等が収蔵・展示されています。(メモリアルルームは今年度改修予定)



歴史資料室 パネル展示



修了記念アルバム (昭和19年)



修了證書(昭和 20 年)



がくさっき がい 学童疎開専用列車への乗り込み(昭和 19 年)



疎開先(草津温泉)昭和 19 年



青空教室(昭和 20:

落合第四小学校

歴史資料室には、戦前の学校の様子や学童疎開に関する写真資料、「修身」や「小学国語読本」などの教科書資料、 鉄かぶとや戦時債券など地域の方から寄せられた資料等が収蔵・展示されています。



歴史資料室 全景



授業風景(昭和13年)



い もんぶくろ



必勝祈願 (氷川神社) (昭和 16 年)



学童疎開 目白駅に向かって(昭和 19 年)



ぼうどく 防毒マスク

柏木小学校

モニュメントルームには、柏木小学校の前身である淀橋第一小学校・淀橋第七小学校に関係する戦前の学校や 子どもたちの様子を表す写真パネルや卒業アルバム、戦前・戦後の教科書等が収蔵・展示されています。





定橋第七尋常 小 學校 校舎・正門(昭和 9 年写真帳より)



学童疎開の思い出 淀橋第一小學校 80 周年記念誌より



戦前の教科書 (明治 44年・大正元年・同 3年・6年)







国語・社会の教科書(昭和31年)

西新宿小学校

モニュメントルームには、西新宿小学校の前身である淀橋第三小学校と淀橋第六小学校に関係する戦前の写真 や教科書、学童疎開の記録や写真、地域から寄せられた資料等が収蔵・展示されています。



奉安所



地理の授業風景(昭和3年頃)



町会・隣組運動会(昭和 16年)



武運長 久 日章旗



終戦詔書



れんごうこくぐんそう しれいぶ つづり 連合國軍総司令部指令書の綴



新宿区の平和事業

昭和60年12月10日、新宿区議会は「新宿区非核平和都市宣言に関する決議」を全会一致で決議しました。これを受けて新宿区は、昭和61年3月15日、すべての国の核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現を希求して「新宿区平和都市宣言」を行いました。

区は、平和都市宣言の趣旨を広く区民の皆さんに知っていただくため、さまざまな啓発事業を行うとともに、 平和を願う区民の意志をアピールするため、区内に平和のモニュメントを設置しています。

また、「平和首長会議」及び「日本非核宣言自治体協議会」に加盟し、世界の各都市とともに、世界の恒久平和と核兵器の廃絶の取組を進めています。

ここでは、区の平和事業について紹介します。

親と子の平和派遣

昭和61年8月に青年たちに戦争の悲惨さと平和の 尊さについて認識を深めてもらうため、青年を広島 と長崎に各5名派遣し、翌年の昭和62年には、女性を 広島と長崎に各5名派遣しました。

その後、昭和63年からは青年の平和派遣者と、5組10名の母と子(小学校4年~6年)の平和派遣者が、広島・長崎を1年毎に訪れました。平和13年からは、現在の親と子(小学校4年~中学校3年)の平和派遣に変更し、毎年7組14人の親子を広島・長崎に交互に派遣しています。



親と子の平和派遣(平成27年8月・広島)

■派遣先で参加すること・学ぶこと

広島:原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式参列、 広島平和記念資料館見学、被爆校舎見学、 被爆体験講話、被爆碑めぐり など

長崎:原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列、青少年 ピースフォーラム(長崎市主催の被爆体 験講話や平和学習の実施)、原爆資料館見 学、被爆校舎見学 など

派遣実績(平成28年3月現在)

親(青年含む):255人、子:170人(総計425人) 【内訳】

(1) 昭和61年

「青年の平和派遣」:青年10人

(2)昭和62年

「女性平和派遣」: 女性10人

(3)昭和63年~平成12年

(毎年5組10人の親子と5人の青年が対象) 「母と子の平和派遣 |: 親65人、子65人

「青年の平和派遣」:青年65人

(4) 平成13年~平成27年

(毎年7組14人の親子が対象)

「親と子の平和派遣」:親105人、子105人

平和展

昭和61年8月の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」以降、毎年区役所本庁舎ロビー等で平和展を行っています。

区内の戦争被害を伝えるパネルや、戦争当時の実 物資料、平和首長会議の原爆ポスターなどを展示す ることにより、戦争の悲惨さと平和の大切さを伝え ています。







平和展(平成27年7~8月・区役所本庁舎ロビー)

平和コンサート

平成20年7月から、毎年平和展の開催期間中に新宿 歴史博物館講堂で、区内在住の奥田雅代さんによるバ イオリンを中心としたコンサートを行っています。

毎年多くの方が参加して、美しい音楽を楽しみ、 平和の大切さを感じる時間を過ごしています。



平和コンサート(平成 27 年 7 月・歴史博物館講堂) 左が奥田さん

地域文化財 (平和分野) 制度

私たちの身近にあって、まちの歴史や文化を物語る「もの」や「場所」を未来に継承するため、平成23年4月から「地域文化財制度」を創設し、戦争中の施設や戦災に関する痕跡・記録など6件を地域文化財(平和分野)として認定しています。(平成28年3月現在)

詳細は、区ホームページの地域文化財制度 (https://www.city.shinjuku.lg.jp/kanko/bunka02_000004.html)、地域文化財一覧 (https://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000173574.pdf)をご覧ください。



忠 魂碑(地域文化財·平和分野·新宿5丁目花園神社内)

平和マップの発行

戦争体験者が減少する中で、平和に対する意識を次の世代にも継承し、多くの区民の皆さんが平和の大切さを考えるきっかけを作ることを目的として、新宿区平和派遣の会の協力を得て、平成22年3月に「新宿区平和マップ」を発行しました。

マップでは、区内にある戦争に関する史跡や戦災に遭った樹木などを巡る5つのコースを紹介しています。実際に区内を歩いて巡り、平和について学ぶことができる内容となっており、新宿区平和派遣の会と共催で、「平和マップウォーキング」を毎年実施しています。

平和マップは、区役所本庁舎3階総務課、1階区政情報コーナー、特別出張所、新宿歴史博物館で配布しています。



平和マップ(概要説明面)



平和マップ (地図面)

「広報しんじゅく」平和特集号 (8月15日号)と黙とうの呼びかけ

毎年、「広報しんじゅく」8月15日号では、「語りつごう平和の尊さ命の大切さ」と題して、終戦記念日に因んだ"平和の特集号"を発行しています。新宿区平和都市宣言の趣旨を伝えるとともに、区の平和事業の紹介や、戦争体験記の掲載などをとおして、より多くの区民の方に戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えています。

また、8月5日号の広報では、広島の原爆投下(8月6日)、長崎の原爆投下(8月9日)、終戦記念日(8月15日)について、3月5日号の広報では、東京大空襲・東京都平和の日(3月10日)について、戦争で亡くなられた方を追悼し、世界の恒久平和を祈念するため、広く区民の方に黙とうの呼びかけを行っています。

さらに、当日には来庁者のみなさんに放送で呼びかけて、1分間の黙とうにご協力いただいています。





8月15日号 「広報しんじゅく」 平和特集号 (平成27年)

3月5日号 「黙とう呼びかけ」

新宿歴史博物館の常設展示

新宿歴史博物館の常設展示では、昭和初期に急速に 発展した新宿駅周辺の風俗や娯楽、そこに集まる人々 の日常生活、区内の被災状況や戦時下の子どもたちの 学童疎開の様子などの常設展示を行っています。



「戦後から平成 新宿のうつりかわり」 新宿歴史博物館常設展示



「戦時下のこどもたち学童集団疎開」「戦災と新宿」 新宿歴史博物館常設展示

平和のポスター展

毎年区立学校の小学4年生~中学3年生を対象に、 戦争・核兵器の廃絶や家族の絆をテーマとする平和 のポスターを募集しています。

1,000点を超える応募作品の中から、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作を選定し、区役所本庁舎ロビーで展示するほか、平成26年度からは、区内10ヶ所の地域センターで作品を展示し、身近な場所から子どもたちの平和へのメッセージを伝えています。



平和のポスター展 (平成 26 年 9 月榎町地域センター談話室)



平和のポスター展(平成 26 年 8 月区役所本庁舎ロビー)



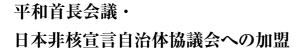
平和のポスター展 (平成 26 年 10 月柏木地域センターエントランス)

図書館の平和事業

中央図書館では、昭和61年から毎年8月に平和映 画会を開催しています。

また、各区立図書館では、戦争と平和に関する図 書を展示し、閲覧・貸出を行っています。さらに、展 示した図書の目録を利用者に配布し、平和について 考えてもらう機会づくりを行っています。

ほかにも、"平和の折鶴コーナー"や、"平和のメッ セージ"を収集して掲示するコーナーを設けたり、平 和につながるテーマの絵本を読み聞かせするなど、 幼児を含めた多くの利用者に平和の大切さを伝えて います。



新宿区では、新宿区平和都市宣言の中の「すべての 国の核兵器の廃絶を全世界に訴え、世界の恒久平和 の実現」を目指し、平成21年4月1日に「平和首長会議」 及び「日本非核宣言自治体協議会」に加盟しました。



平和の本紹介コーナー (平成27年・北新宿図書館)



第5回平和首長会議国内加盟都市会議総会 (平成27年11月9~10日・広島市)

平和首長会議(昭和57年設立)

"核兵器廃絶に向けた都市連帯"に替同する都 市が相互に緊密な連携を築くことによって、核 兵器廃絶の市民意識を国際的な規模で喚起し、 核兵器の廃絶を実現させるとともに、人類の共 存を脅かす飢餓、貧困などの諸問題の解決、さ らには難民問題、人権問題の解決及び環境保護 のために努力することによって世界恒久平和の 実現に寄与することを目的として、総会の開催 (会場は広島・長崎を交互にして4年毎に開催)、 国内加盟都市会議の開催 (毎年)、国連、各国政 府に対する要請活動、原爆写真ポスターの提供、 ニューズレターによる情報提供などの活動を 行っています。

世界161カ国6.965都市、日本国内では新宿区 を含む1.610都市が加盟しています。(平成28年 1月1日現在)

■ 日本非核宣言自治体協議会(昭和59年設立)

非人道的核兵器の使用が、人類と地球の破滅 をもたらすことにかんがみ、生命の尊厳を保ち、 人間らしく生活できる真の平和実現に寄与する ため、全国の自治体、さらには全世界のすべて の自治体に核兵器廃絶、平和宣言を呼びかける とともに、非核宣言を実施した自治体間の協力 体制を確立することを目的とした協議会です。

非核都市宣言に関する情報・資料の収集、調 査・研究、非核都市宣言呼びかけのための活動、 各自治体の平和事業推進などを行っています。

非核宣言を行っている1,604自治体のうち、新 宿区を含む314自治体が加盟をし、活動を行っ ています。(平成28年1月1日現在)

平和記念事業の実施

「新宿区平和都市宣言」を記念し、戦争の悲惨さと 平和の大切さを共有し、次の世代へ継続していくた め、平和記念事業として「平和のつどい」を開催し、 「平和記念誌」を発行しています。

「平和のつどい」については、平成17年度から、5年 毎の周年事業として開催しています。また、「平和記 念誌」については、これまで5周年誌、10周年誌、20 周年誌を発行しています。









30 周年チラシ

新宿区議会の平和事業

新宿区議会では、昭和63年から「広島市原爆死没 者慰霊式並びに平和祈念式」、「長崎原爆犠牲者慰霊 平和祈念式典」、平成4年からは「沖縄全戦没者追悼 式」に区議会議員を派遣しています。

議員自らが式典に参列することにより、戦争の悲 惨さと平和の尊さを再認識し、議会活動を通じて「新 宿区平和都市宣言 | の趣旨実現に寄与することを目 的としています。



沖縄全戦没者追悼式への派遣(東京之塔前)



広島平和記念式典への派遣(原爆死没者慰霊碑前)



長崎平和祈念式典への派遣(平和祈念像前)

平和のモニュメント

平和の灯

昭和63年7月30日、広島市平和記念公園内にある「平和の灯」と長崎市平和公園内にある「誓いの火」をそれぞれ分火し、ひとつのガス灯に合わせたものを区役所本庁舎正面玄関前の宣言記念板の上に新宿区の「平和の灯」として設置しました。世界の恒久平和の実現を目指す新宿区民の決意を表したもので、平和の象徴である鳩を配し、その鳩に見守られながら、灯は永遠にともし続けられます。

平和都市宣言記念板

昭和61年8月4日、「新宿区平和都市宣言」を記念して、宣言文を記した青銅版(縦95cm×横144cm)を作成し、宣言の趣旨を多くのみなさんに伝えるために、区役所本庁舎正面玄関前の柱に設置しました。



平和都市宣言記念板、平和の灯(区役所本庁舎正面玄関前)

平和宣言板

昭和61年8月9日以降、平和都市宣言の趣旨をより 多くのみなさんに知っていただくために、特別出張 所、区立小中学校、図書館、歴史博物館、新宿スポー ツセンターなど区内の施設65か所に平和宣言板を設 置しています。

(昭和61年8月9日、特別出張所(10所)、図書館(中央、鶴巻、西落合、戸山、北新宿、中町の6館)に設置。 平成元年小中学校等教育関連施設(65)設置。現在65 箇所に設置)

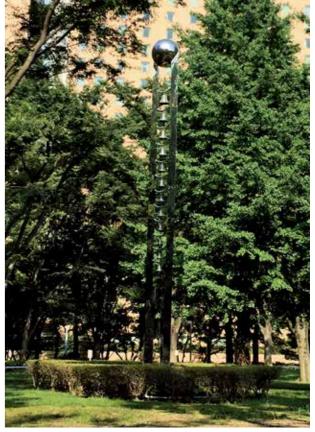


平和宣言板の例(戸山生涯学習館正面玄関)

平和の鐘

昭和62年8月6日、「新宿区平和都市宣言」を記念するとともに、"発展する新宿と地球の平和"を願うシンボルとして、"平和の鐘"を新宿中央公園芝生の広場に設置しました。

ステンレス製の2本の柱が球体を支え、球体の下に 釣下げられた大小12個のカリヨン(組鐘)が四季折々 の曲を定刻(10:00、12:00、15:00、17:00の4回)に平 和のメロディーを奏でています。



平和の鐘(新宿中央公園芝生の広場)

平和の泉・平和祈念像

平成元年8月5日、区役所本庁舎正面玄関わきに平和の泉・平和祈念像を設置しました。泉の中央にある高さ185センチメートルのブロンズ製裸婦像「光る波」の作者は北村治禧氏(1915~2001年)で、長崎市の「平和祈念像」を制作した北村西望氏の長男です。

また、泉の水は、長崎市平和公園にある「平和の泉」の源流・浦上川上流の「恵の丘長崎原爆ホーム」内の池のわき水から採取されました。長崎市の「平和の泉」は、水を求めながら亡くなった原爆犠牲者の霊を慰め平和を求めるため建設されたものです。この水を採取したのはカナダのトロント市に次いで新宿区が2番目でした。



平和の泉・平和祈念像(区役所本庁舎正面玄関わき)

「新宿区平和派遣の会」との協働事業

区は、平和派遣事業の参加者親子でつくる「新宿区平和派遣の会」との協働の取組みにより、「平和派遣報告会」、「平和講演会」などの平和啓発事業を行っています。「平和派遣の会」が、主にイベント等の企画や運営を行うことにより、多くの区民の方、とりわけ若い世代の方に対する平和啓発に寄与しています。ここでは、「平和派遣の会」から、区との協働事業等について紹介をしていただきます。

「継続は力」となり、平和教育の戦争と平和への認識を深めたことで、

基盤

b

に

貢献



平和派遣報告会 報告者は、平和派遣事業参加者

平和派遣事業参加者は広島や長崎の被爆地で原爆の惨禍について学び、生命の尊厳を深く心に刻んできます。「自分や他人のいのちを大切にできる社会こそ平和である」と気づき、その思いを伝えることで、報告会参加者に平和意識改革の波動を起こします。



平和講演会 講師は被爆・大空襲などの戦争体験者

講師である被爆体験者が語った『平和の基本はいのちを 大切にすることであり、いのちが大切にされれば思いや りの心で差別や偏見をなくすことができる』は、貴重な 平和提言と受けとめています。



すいとんの会 親子の平和派遣者がすいとん作り

様々な戦争体験をされた方々からお話を伺い、平和の大切さについて学びます。この活動を通して、家庭・学校・地域の教育力を向上させ、子どもたちが平和の心を育める環境作りを目指します。



平和マップウォーキング 「平和派遣の会」の 役員がナビゲーター

新宿区にある戦跡を巡り歴史を学ぶことで平和について 考えるきっかけを提供します。「地図の上から平和を考 える」ことで「仲の良い家庭・地域を築くことが世界平 和の基盤」であることにも気づくでしょう。

平和大使の証

平和派遣事業参加者には 平和大使としての自覚が芽 生えてきます。その証とし て、平成20年度より「平 和大使の証」を「平和派遣 の会」から授与しています。



「平和大使の証」に 引用されている言葉について

「平和大使の証」には、ユネスコ憲章の前文より「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」の一節が印字されています。このように、ユネスコ憲章には、戦争の起きた原因や教育の大切さを教え、国民の義務等が宣言されています。

「新宿区平和派遣の会」の紹介

新宿区平和派遣の会とは?

新宿区平和派遣事業の参加者は、「いのちの大切さ」を学ばせて頂いた感謝の思いと平和教育の大切さに気づき、『平和派遣報告会』の実施を目的として、平成2年に『新宿区平和派遣の会』を結成しました。独自事業として「平和派遣報告会・平和講演会・すいとんの会・施設見学会」を開催してきました。

■ 新宿区との協働事業

平成13年度からは「平和派遣報告会・平和講演会・すいとんの会」が新宿区の平和啓発事業となり、協働の取組みとして実施しています。

■ 独白事業

施設見学会の実施。

活動記録誌「語りつごう」いのちの大切さを」 毎年度発行しています。

その他

しんじゅく女性団体会議・新宿区男女共同参画推 - 進センターの活動にも参画しています。 - - - - - -

「新宿区男女共同参画推進条例」には、区、区民、 地域団体の責務が定められ、協働して「男女共 同参画社会」を実現することが謳われています。

平成27年度の活動

- テーマ

「生命尊厳を基調にした平和な社会を構築する」

■ 指針

「おもいやりのコミュニケーションを拡大する」

■ 活動日標

- ・平和派遣者が「平和大使」としての自覚を持って行動できるように支援する。
- ・学校教育における平和学習の充実に貢献する。
- 平和啓発事業を通して、「いのちの大切さ」が家庭・学校・地域で語りつがれるように推進する。
- ・新宿区の各機関、「青少年育成委員会」や長崎市・広島市の自治体との連携を深め、平和の輪 (絆)を広げる。
- 平和派遣者の学校や地域での活動状況を収集し、「活動記録誌」に掲載する。
- 活動内容を子ども派遣者に向けて積極的に発信する。



活動の歩み (平成26年度活動記録誌より)

年 度	活動内容
平成 2(1990)年	「新宿区平和派遣の会」を結成
平成 3(1991)年	「新宿区平和派遣の会」会則施行
平成12 (2000)年	「戦争体験集一語りつごう未来の子供たちへ」を発刊
平成13 (2001)年	区との協働で平和啓発事業を開始
平成14 (2002)年	活動記録誌「語りつごう いのちの大切さを」に名称変更し、以降毎年発行
平成20 (2008)年	「新宿区平和都市宣言」と「新宿区民憲章」の趣旨に沿って区と協働で推進 「平和大使の証」を作成し、平和派遣者に授与
平成21 (2009)年	「新宿区平和マップ」を区と協働で企画・制作
平成22 (2010)年	「平和派遣25年のあゆみ」を区と協働で企画・編集 中山区長(当時)と平和派遣者との平和トーク 「新宿区における平和をみんなで考える」も掲載
平成26 (2014)年	ユネスコ憲章宣言文の趣旨に沿って平和啓発事業を区と協働で推進

平和事業のあゆみ

昭和 60 (1985)年 12月10日	「新宿区非核平和都市宣言に関する決議」を 区議会が全会一致で決議
昭和 61(1986)年 3月15日	「新宿区平和都市宣言」を行う
昭和 61(1986)年 8月4日	「宣言記念板」を区役所本庁舎正面玄関前に設置
昭和 61(1986)年 8月5日	「青年の平和派遣」で広島・長崎の両市を訪問
昭和 61(1986)年 8月6日	「平和を考える図書展示」を区立図書館で実施 (以降毎年8月に実施)
昭和 61(1986)年 8月9日	「平和の映画会」を中央図書館で開催 (以降毎夏開催)
昭和61(1986)年8月15日	「平和のつどい」を開催 (平成 9 年まで毎年開催。平成 17 年度から 5 年毎の周年記念事業として実施)
昭和 61 (1986)年 8月18日	「平和のポスター展」を実施 (以降、毎年「平和展」として実施)
昭和 62 (1987)年 8月5日	「女性平和派遣」で広島・長崎の両市を訪問 (63年度からは「青年の平和派遣」、「母と子の平 和派遣」として1年毎交互に両市を訪問。平成13 年度からは「親と子の平和派遣」に移行して実施)
昭和 62 (1987)年 8月6日	「平和の鐘」を新宿中央公園芝生の広場に設置
昭和 63 (1988)年 7月 30日	「平和の灯」を区役所本庁舎正面玄関前に設置
昭和 63 (1988)年 8月	広島平和記念式典、長崎平和祈念式典へ 区議会議員が参加(以降毎年参加)
昭和 63 (1988)年 8月9日	「平和宣言板」を区立施設へ順次設置開始
平成元(1989)年 1月29日	新宿歴史博物館開館。区内の被災状況や学童疎開 の様子についての常設展示を開始。
	「平和の泉・平和祈念像」を 区役所本庁舎正面玄関わきに設置
平成 2 (1990)年 8月14日	「平和コンサート」を開催
平成 4 (1992)年 3月15日	「新宿区平和都市宣言 5 周年記念誌」を発行
平成 4 (1992)年 6月23日	「沖縄全戦没者追悼式」に助役が出席 (沖縄本土復帰 20 周年)
平成 4 (1992)年 6月23日	「沖縄全戦没者追悼式」へ区議会議員が参加 (以降毎年参加)
平成 5 (1993)年 8月5日	第3回「世界平和連帯都市市長会議」 (広島・長崎両市で開催)に区長が参加
平成 7 (1995)年 6月28日	「世界平和連帯都市市長会議アジア太平洋地域会議」 (広島市で開催) に区長が参加
平成 8 (1996)年 3月15日	「新宿区平和都市宣言 10 周年記念誌」を発行
平成 9 (1997)年 8月1日	新宿区平和都市宣言 10 周年記念「平和のつどい」 を開催(新宿文化センター)
	「第4回世界平和連帯都市市長会議」に 区長が参加
	パキスタンの未臨界核実験に対し 区長が抗議文を送付
	インド・パキスタンの未臨界核実験に対し 区長が抗議文を送付
	「核実験の中止と核兵器の廃絶を求める決議」を 区議会が採択
平成 10 (1998)年 9月25日	アメリカの未臨界核実験に対し区長が抗議文を送付 (以後、平成 24 年 12 月の未臨界核実験まで合計 20 回の実験に対してアメリカに抗議文を送付)

	ロシアの未臨界核実験に対し区長が抗議文を送付 (以後、平成16年8月の未臨界核実験まで合計 4回の実験に対してロシアに抗議文を送付)
平成 12 (2000)年	新宿区平和都市宣言 15 周年記念「平和のつどい」
8月2日	を開催 (四谷区民ホール)
	「第5回平和市長会議」に区長が参加 (同年世界平和連帯都市市長会議から改称・ 平成25年8月から「平和首長会議」に改称)
平成 14(2002)年	イギリスの未臨界核実験に対し
2月15日	区長が抗議文を送付
平成 17 (2005)年	平和祈念事業「平和を願って
6月9日	~語りべ&ミニコンサート」を区議会が開催
平成 17 (2005)年 8月4日	「第6回平和市長会議」に区長が参加
平成 18 (2006)年	アメリカ・イギリス共同の未臨界核実験に対し
2月27日	区長が抗議文を送付
平成 18 (2006)年 3月15日	「新宿区平和都市宣言 20 周年記念誌」を発行
平成 18 (2006)年	新宿区平和都市宣言 20 周年記念「平和のつどい」
3月29日	開催 (新宿文化センター)
平成 18 (2006)年 10月10日	北朝鮮が核実験を実施したと発表したことに対し 区長が抗議文を送付 (以後、平成25年2月の核実験まで合計3回の 実験に対して北朝鮮に抗議文を送付)
平成 18 (2006)年	区議会が「北朝鮮の核実験に厳重に抗議する決議」
10 月 13 日	を採択
平成 19 (2007)年	学校資料調査(花園小学校)の実施
7月 25日~26日	(以後、平成27年3月までに全小学校の資料調査を行い、報告書としてまとめる)
平成 21 (2009)年	「平和市長会議」(現在は「平和首長会議」に改称)
4月1日	及び「日本非核宣言自治体協議会」に区が加盟
平成 21 (2009)年 5月27日	北朝鮮が核実験を実施したと発表したことに対し 区議会議長が抗議文を送付 (以後、平成25年2月の核実験まで合計2回の 実験に対して北朝鮮に抗議文を送付)
平成 21 (2009)年 8月4日	「第7回平和市長会議」に区長が参加
平成 22 (2010)年	区内の戦争遺跡などを巡る5つのコースを紹介する
3月15日	「新宿区平和マップ」を発行
平成 22 (2010)年	「平和マップウォーキング」を新宿区平和派遣の
4月29日	会と共催で実施(以後、毎年実施)
平成 23 (2011)年	地域文化財(平和分野)制度を創設
4月	(以降、平成 28 年 3 月までに 6 件を認定)
平成 23 (2011)年	アメリカの新型の核性能実験に対し区長が抗議文を送付
5月23日	(以後、平成26年11月の新型の核性能実験まで合計4回の実験に対してアメリカに抗議文を送付)
平成 23 (2011)年 11月21日	新宿区平和都市宣言 25 周年記念「平和のつどい」 を開催(新宿文化センター) (同年3月15日に開催予定であったが、3月11日の東日本大震災の影響で延期して開催)
平成 27 (2015)年	「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に区長が
8月6日	参列親と子の平和派遣者と広島市で合流
	北朝鮮が水爆実験を実施したと発表したことに対 し区長が抗議文を送付
平成 28 (2016)年	北朝鮮が水爆実験を実施したと発表したことに対
1月6日	し区議会議長が抗議文を送付
W-C 00 (0010) /=	「新宿区平和都市宣言 30 周年記念誌」を発行
平成 28 (2016)年 3月15日	

- 本記念誌に掲載した寄稿文 (寄稿 と表示) については、原文尊重を原則としたため、当時使用されていた用語で不適切と思われるものについても、あえて原文のまま記載した。また、インタビュー (間き取り と表示) については、インタビューを受けた方の発言をもとに記載しているが、編集上、一部、加筆修正した部分がある。
- 戦争体験談のインタビューについては、目白大学短期大学部ビジネス社会学科・上岡史郎准教授の指導の下、 秋間優花さん、北村彩加さん、近藤玲子さん、菅野美紗さん、鈴木唯さん、田嶋彩香さん、森田夏未さん、吉田 江梨花さん、渡邊杏香さんが行った。
- 本記念誌は、首都大学東京都市教養学部・國雄行教授(日本近代史)が監修した。

平和 - 未来に語り継ぐ 私たちのメッセージ

新宿区平和都市宣言30周年記念誌

発行年月 平成28年3月

発 行 新宿区総務部総務課

新宿区歌舞伎町一丁目4番1号

電話03-5273-3505

印 刷 株式会社サンニチ印刷

印刷物作成番号 2015-11-2301

この印刷物は業者委託により 2,000 部印刷製本しています。 その経費として、1 部あたり648円(税込)がかかっています。 但し、編集時の職員人件費や配送経費は含んでいません。



新宿区は、環境への負荷を少なくし、未来の環境を創造するまちづくりを推進しています。 本誌は森林資源の保護とリサイクルの促進のため、古紙を利用した再生紙を使用しています。